
COBALT-SERIES
前田珠子
聖石の使徒
其は焔をまとう者
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は焔(ほむら)をまとう者

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は焔(ほむら)をまとう者

前田珠子

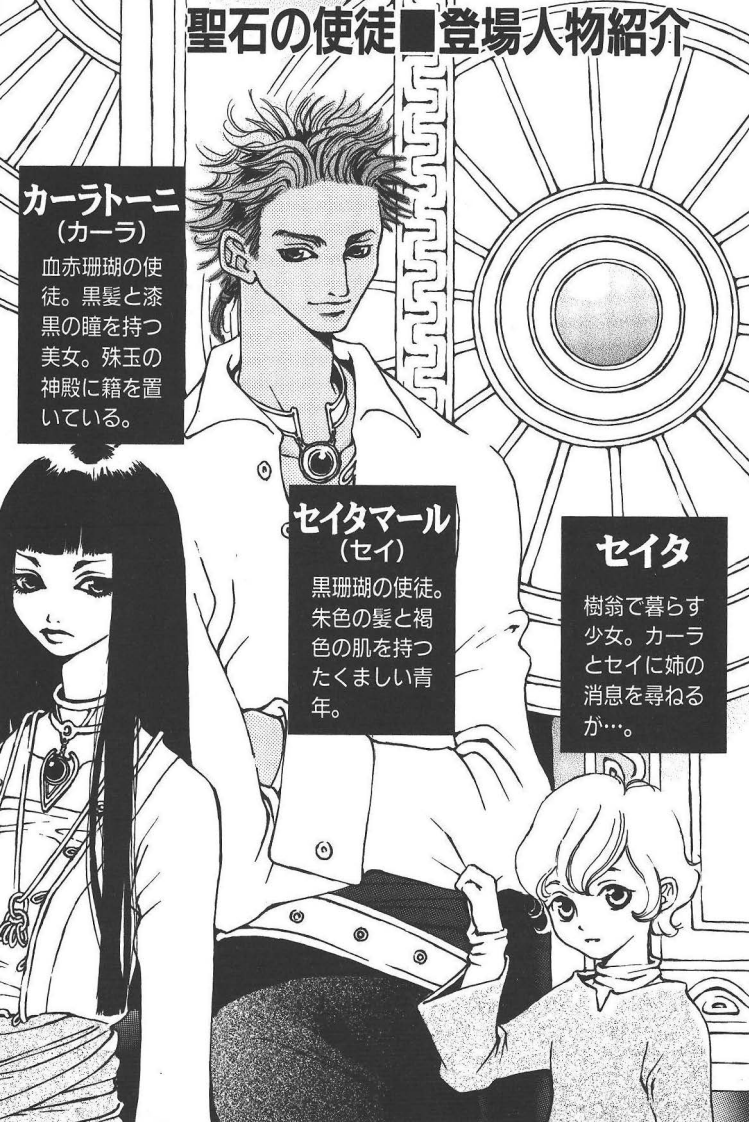
集英社

目　次

聖石の使徒
其は焔をまとう者
バルヴァローズ創世神話……7
其は焔をまとう者……15
瘴の女神を癒す者……129
あとがき……220


ソラミイノ
(ミイノ)
アクラセイトのルームメイトで、最も成績がいい少女。砂金水晶の子供。
ライランテ
アラクセイトのルームメイトで蛍石の子供。
アラクセイト
(アーク)
石墨を抱いて生まれた聖石の子供。神殿で学んでいるが、自分の能力を制御できない。

聖石の使徒■登場人物紹介



カーラトーニ
（カーラ）

血赤珊瑚の使徒。黒髪と漆黒の瞳を持つ美女。殊玉の神殿に籍を置いている。

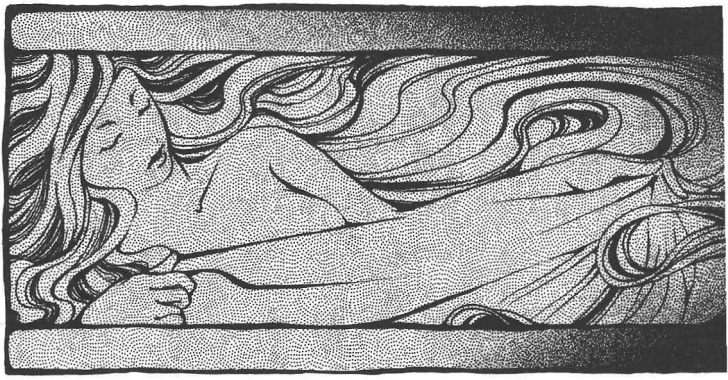
セイタマール
（セイ）

黒珊瑚の使徒。朱色の髪と褐色の肌を持つたくましい青年。

セイタ

樹翁で暮らす少女。カーラとセイに姉の消息を尋ねるが…。

イラスト／山本鳥尾



バルヴァローズ創世神話

麗しき、万能の至高神セイトーリ――。

恵み豊かにして美しいこの世界――バルヴァローズはかの女神の手により生まれた。

女神はまた、この世界のために、多くの神々を産み落とした。

最初に生まれたのは太陽女神ライアトーリ。

セイトーリの両手の間に太陽が生じた瞬間、彼女は生まれた。

次いで生まれたのは三つの月を司る、三つ子の月神――シイムタール、サイサロール、サラムトーリたちだった。

女神の左の瞳から、不意に三粒の涙がこぼれ、月となると同時に三人は誕生したのだ。シイムタールとサイサロールは、バルヴァローズのために生まれた、初めての男神だった。

女神の右の瞳からこぼれた涙は海となり、その吐息は風となり、ひと雫の血は大地となった。

それと同時に海神アイルトーリと空神パルムローリ、地神アスカニーリが生まれいでた。

セイトーリはバルヴァローズに生きるであろう者たちのために、やさしい静寂と暗闇を与えてやりたいと願い、歌を歌った――その歌声は女神の願いそのものの姿となり、世界に夜が生

まれ、夜神タイナトーリも誕生した。

女神はバルヴァローズをとても愛していたから、考えられ得るすべての豊かさと美しさと愛情をこの世界に贈りたいと思い、同時に子供たちにもこの世界を愛してほしいと願った。

だから、この世界を作る手伝いをしてくれぬものかと問い、祝福を与えてほしいと子供たちに告げたのだ。

子供たちである神々は、もちろん母神であるセイトーリに言われるまでもなく、バルヴァローズを愛していたものだから、喜んでこの世界を共に作る手伝いに応じた。

海神アイルトーリは真水の神カンラタールを生み、カンラタールも多くの子供たちを誕生させた。かくして水は海以外にも居場所を得たのである。

空神バルムローリは空を吹き渡る風の神イーオダールを生み、イーオダールも多くの子供たちを作った。

彼らの誕生により、空間はさまざまな表情を持つこととなり、気象や天候が生じた。

太陽神ライアトーリは、自らの光と温もりを伝える者として、火神イイタールを生み出し、イイタールもまた多くの子供を持ったが、彼らはしばしば大きすぎる傷をバルヴァローズにもたらしたため、しばらくのあいだライアトーリの監督下に置かれた。いささか気性が激しい神々揃いだったのかもしれない。

さて、地神であるアスカニーリは、子供神を生まなかった。甥である水神カンラタールと協

調することで、やがて生まれてくるであろうバルヴァローズの住人たちをやさしく包みこむ環境を作ろうと思ったのかもしれない。

セイトーリの産み落とした子供神は、ほかに四神……三つ子の月神と夜神との間で、小さないさかいが起こったのはこのころだった。

三つ子の月神たちはみな、自分と夜神が組むことで、星神を生み出したいと思ったのだ。三人の神から同時に同じことを申しこまれ、夜神はたいそう困ってしまった。

結局、夜神が申し出を受けたのは、三つ子の末っ子であるサラムトーリに対してだった。ほかのふたり——シイムタールとサイサロール——が我こそと強く主張したのに対して、サラムトーリだけが夜の空を飾る星々の数や光量、闇との均衡に心砕く気遣いをみせたからだった。

こうして雲のない夜空には、小さな星のきらめきが生まれることとなった。

だが、一層美しくなったバルヴァローズに、穏やかならぬものが生じはじめたのもこのころのことだった。

タイナトーリに選ばれなかったふたりの月神の不満や憤りが、澱のごとく世界に溜まり始めたのだ。

ふたりの月神たちは、自分たちが選ばれなかったことにのみ心捕らわれ、やがてほかにできるであろうなにかを見つけ、行使する道ではなく、どこまでも原因を掘り下げ、その原因となった存在を含むすべてに対して不満を発散する道を選んでしまったのである。

ほかに自分にできることはないのかと、考えるより先に、拒まれたと思いこみ――。
なぜ他者が選ばれたのかと内省するより先に、相手への不満を溜めこみ――。
いつしかふたりの月神は、バルヴァローズを蝕む毒気のみを発するようになってしまった。
瘴気と呼ばれるものは、このふたりによって初めてこの世界に生じたものだった。
セイトーリや姉妹神たちの再三の説得にも耳を傾けぬまま、月神ふたりは瘴気をバルヴァローズに溜めこんでいく。そればかりではない。ふたりの月神は、互いへの敵愾心を抱えたまま、ついにはバルヴァローズそのものへの憎悪まで育て始めてしまったのだ。
セイトーリはふたりの子供神に訴えかけた――それこそ、何度も。
だが、ふたりの行為は改まらなかった。バルヴァローズに集う瘴気は増えていく一方だった。
このままではバルヴァローズ諸共、自らを除くすべての子供神、孫神すべてが滅んでしまう……月神たちの生み出した瘴気によって！
そうと悟ったとき、至高神セイトーリはひとつの決断を下した。
「なんと悲しく情けなく……」
呻きながら、至高の女神は自らの左の瞳から零れた二粒の涙を……その姿を変えたものを消滅させ、嘆きに涙した。
至高の女神の流す涙には万能の力がある。

けれど、それですら浄化できぬほどの瘴気がすでにバルヴァローズには根づいてしまっていたのだ。

残る手段はただひとつ——至高の女神は、ふたりの子供神の生み出した瘴気を抱いて眠りにつくことを決意した。

眠りのなかで、女神は子供神ふたりの生じさせた瘴気のすべてを浄化する。

浄化しきるその時まで、かの至高の女神は眠りつづける。

それは約束されたこと——。

かの女神が瘴気を胸に、大地の奥底に眠りについたそのときに。

その寸前に生み出された誕生の女神と死滅の男神の存在そのものに刻印された、それは絶対の約束だった。

だから、至高の女神であるセイトーリの最後の娘である誕生神カリカトーリと最後の息子である死神ナムラタールは、バルヴァローズに生まれ、いずれは死に行くすべての存在にこう語りかけたのだ。

『瘴(しょう)の女神の眠りを妨(さまた)げてはならぬ——』

と——。

瘴の女神とは、瘴気を封印して眠り続ける至高の女神——。

彼女の眠りを妨げてはならないと。

妨げたとき、訪れるものはひとつきりだと。
つまりは破滅のみなのだと、はっきりとしっかりと、神代の約束には記されている……。

瘴の女神の眠りを妨げてはならない。
瘴の女神を目覚めさせてはならない。
その眠りを守るため……聖石の使徒は生まれたのだ……。

其(そ)は焔(ほむら)をまとう者



プロローグ

子供のころは、ただ純粋に、自分の異能が嬉しかった。

貧しい家だった。

お世辞にも、裕福とは言えない生活のなかで、長い冬という季節は、家族にとって大変な時期だった。

豊珠は世界最北の大陸――。

それでもひとが生きて行けるのは、この大陸から産出される貴石や宝石の潤いあってのことだ。

けれど、彼女の家族は、その恩恵に与るような土地には住んでいなかった。

彼女たちは、なんの大地の恵みもない不毛の土地の片隅に、居を構えているに過ぎぬ家族だった。

なんの恵みもない。

それはこの大陸で生きる者にとって、死活問題でさえあった。

だから、アラクセイトは喜んでさえいたのだ。
自らが生み出すことのできる石が、薪すら絶えた我が家の燃料になることを。
そのおかげで、家族の誰も、凍え死なずにすんだことを――。
自らが、聖石の子供と呼ばれる存在であることさえ知らず、彼女は十の誕生日を迎えるまで生家にあった。
地神神殿よりの使者が、彼女の生家を訪れたのは、彼女が十になって幾日か経ってからのことだった。
最初、アラクセイトは即答できなかった。
豊珠の冬の厳しさは、実際に経験したものにしかわからない。
家族に温もりを与える石を、産み落とすのは自分しかいない。
それを思うと、どんな名誉より、家族の無事が気になった。
だから、一旦は神殿の申し出を断ろうと思った。
思いなおしたのは、神殿からの使者の言い分を聞いたからだ。
「知識と経験を広げることで、いま現在できること以上の可能性を捜したいとは思いませんか……？」
いまでは、誰にでも投げかける誘い文句なのだとわかる。
けれど、実際にそう問いかけられたときには、思わず心が揺らいだのだ。

自分が特別な、貴重な存在であるかのように感じられたのだ。
ただの錯覚だったのだと、いまではわかっているけれど。
けれど、そのころにはわからなかった。
自分が特別な存在だと感じることが、アラクセイトにとって心地よかったこともある。
家族への保護を約束に、彼女は地神神殿に入った。
そこで彼女は初めて知ったのだ——自らが何者であるのか。
聖石の子供——神々の加護と力の一部を与えられた特別な存在。
聞こえはいい。
けれど、それは抱いて生まれた石によって、大きく評価を左右される存在でもあったのだ。
彼女の抱いて生まれてきた石は石墨。
炭を抱いてきた、惨めな娘に過ぎないのだと、神殿での生活は彼女に教えた。
彼女はこのとき、諦めを覚えたのかもしれない。
なにをしても、どれほど努力しようとも、決して『使徒』と呼ばれる存在にはなれないことを、幼くして彼女は受け入れた。そうでなければ耐えられぬほど、神殿にはきらびやかな石に選ばれた子供たちが集っていたのだ。
宝石の大陸——豊珠。
その名の通り、かの大陸の神殿は、多くの使徒を輩出することでも知られていた……。

1

神殿の朝は早い。
まずは夜明けと同時に起床し、着替えると同時に場所を分担しての朝の掃除が始まる。
それを終えた後、一同祈念堂に集まり、朝の祈りを捧げる。
朝食はその後だ。
使徒として認められた者は、朝の掃除は免除され、祈りも自由意志に任されるそうだが、単なる『聖石の子供』ではそうもいかない。
せっせと務めに励むしかないのだ。
季節は冬――。
世界最北の大陸豊珠の、しかもかなり北方に位置する玉濫とあっては、その寒さはなまなかなものではない。
水などない。
凍ってしまうのだ。

だが、乾拭きばかりではおちない汚れがあるのも確かなこと。

「うーん」

とうなって、間もなく十五の誕生日を迎えるアラクセイトは、結局いつもの方法に頼ることにした。

つまり――。

「そのへんに転がってる石をいくつか拾ってきて」

と、友人たちに頼んだ後、神々への祈りを捧げるのだ。

(神さま、神さま……お願いいたします……わたしたちは凍らぬ程度の温もりを持つ水を必要としております。神々を讃えるためのこの場所を美しく清めたいのでございます……お願いします、わたしに力をお貸しくださいませ……)

祈り終えるのとほぼ同時に「拾ってきたわよー」と、同室のライランテが声をかけてきた。彼女は蛍石の子供だ。

アラクセイトの、祈りのために組んだ両手の間には、溢れんばかりの石墨が生じていた。

「火打ち石っ！　誰か持ってない!?　まーずは火をつけないと」

ライランテの言葉に、同じ寮内のひとりが「あたし、持ってる！」と声を上げた。

「よぉぉしっ！　まずはアークの石に火、つけて燃やさないとね。バケツ、木でできてるから火にかけたら燃えちゃうしー」

それができないから、石を焼くのだ。
アラクセイトの生み出した石墨に火をつけて、拾ってきた石が真っ赤になるまで焼くのだ。
そして、その焼けた石を、バケツの中に放りこむ。
真っ赤に焼けた石の持つ熱と、がちがちに凍りついてしまった水とが反応し……氷が溶ける。そして、その日の掃除も無事に終わる……そのはずだったのだけれど……。
その場にいた誰も、想像できないことが、次の瞬間起こったのだ。
なんとか火をつけ、石を焼いた石墨そのものが水桶――というかバケツ――に飛びこみ、周囲は濛々たる水蒸気の嵐になってしまったのだ！
「ちょっとっ！　いまの、なに!?」
「誰が石墨バケツに放りこんだの!?」
「知らないわよ！　あたしじゃないわ！」
わたしもやってない――わたしだって……と、いくつもの声が重なった。
「……ということは……」
と、ひとりだけ冷静な声をあげた者がいた。
アラクセイトと同室で、最も成績のいい『室長』のソラミイノだった。
彼女の髪は白金、瞳は淡く明るい青緑色……その聖石は、砂金水晶――ルームメイトのなかでは、使徒に選ばれる可能性が最も大きいと見なされている少女だった。

「アーク、また、やったね？」

決めつけられて、アークとアラクセイトが慌ててかぶりをふる。

「し、知らない……」

けれど、ソラミイノは容赦ない。

「知らないじゃすまないでしょ、あんたが生み出した子供石なんだから……？　どうせ、手っとり早く氷をとかしたいとか、石を熱する時間が惜しいとか考えてたんでしょ？」

図星だった。

寒がりのアラクセイトは、実のところこの季節、早起きするのも億劫なら、冷たい水に触れるのも遠慮したい体質の主だった。冷え性というわけではないが、とにかく寒いのが苦手で嫌いなのだ。

だから、ついつい怠惰なことを思ってしまったのだ。

（ああ、この凍りついたバケツの中身が、すぐにぬるま湯ぐらいに温まればいいのに……）

と――。

けれど、この場で事実を告白するのは自殺行為だった。

素直にうなずきでもしようものなら、ソラミイノの雷が落ちてくるのは目に見えている。

だからと言って、白を切るのも得策ではない。ソラミイノは非常に精神修養に長けた相手で、滅多なことで怒りに身を任すようなことはしないのだが、不正や欺瞞には厳しいのだ。

「ちらっと、もっと簡単にできないか……とかは思った……ような気がする……けど……」

怒られるのは怖い。

けれど、しらばっくれる自信もない。

たとえしらばっくれたところで、あっさりと見抜かれて、軽蔑されてしまうのがオチだ。それだけは……どうしても、避けたいところだった。

アラクセイトはソラミイノが好きで、彼女の軽蔑を買うようなことだけは、決してしたくなかったのだ。

なぜ、と問われたら、アラクセイトは恐らく困惑しただろう。

恐らくは、自分にはたどり得ない道――聖石の使徒としてのそれ――を歩むに違いない仲間への期待。せめて、そんな相手にだけは、嫌われたり軽蔑されたくないという思い。

さまざまな思いがあって、彼女は小さく「ごめんなさい」とつぶやいた。

対するソラミイノの反応は――。

「だからあなたは短絡的だっていうのよ！　水蒸気爆発って言葉を知らないの!?　あまりに温度差があるふたつのものがぶつかると、爆発だって起こり得るのよっ!?　この寮を破壊するつもりだったの!?」

理詰めで押されては、アラクセイトに勝ち目はなかった。

悄然とうなだれて、「ごめんなさい」を繰り返す彼女に、ソラミイノは仕方なさそうに雑巾

を摑み、宣言した。

「取り敢えずは、わたしたちの義務を果たしましょう。運良く爆発は起こらなかったわけだし、わたしたちにできることも残されてますからね！」

そう告げて、彼女は同室者五人にさっさと号令をかけた。

「この水蒸気のおかげで汚れはずいぶん浮き上がったはずだわ！　乾拭き用の雑巾の用意……いいわね、さあ、ちゃっちゃと拭いて片づけてしまうわよっ！」

さすがのリーダーシップだった。

「はいー」

乾いた雑巾を手に、アラクセイトは床を乾拭きしつづけた。

たかだか石墨を抱いて生まれてきた身にも係わらず、なぜにこうも制御に苦しむ事態を抱え込んでしまうのかという悩みとともに。

石墨の子供――アラクセイト。

貴石ですらない石を抱いて生まれてきたにも係わらず、彼女の成績は非常に……芳しくなかったのである。

修行用の小部屋のひとつに、爆音が響きわたったのは、まだ春には遠い、冬のある日のことだった。

けほけほと、その中心で咳きこむ少女の綺麗な紫紺の髪も、真っ白な肌も、煤と埃まみれになっていた。

床に座りこみ、無残に砕けた茶碗を見つめるその瞳は黄橙色――途方に暮れた色を宿している。

「なんで……」

情けなさを噛みしめながら、少女――アラクセイトは唇を噛みしめた。

せっかく修行室を借りられたというのに、これでは掃除で時間を使い切ってしまうことになる……情けないやら悲しいやら悔しいやらで、それ以上言葉が出て来なかった。

（ちゃんと教えられた通りにやってるつもりなのに……どうしてうまくいかないんだろう!?

自分の子供石を薬湯にすることぐらい、聖石の子供なら、誰だってやってることなのに……）

聖石を抱いて生まれてきた子供には、特別な力がある。

その石と同じ種類の子供石を、祈りや能力を発揮することで生み出すことができるというのがひとつ、そしてもうひとつは、石を液体化させ、薬湯にすることで、その石の持つ効用を、直接口にできる形に変えることができる――というものだ。

もっとも、使徒以外の子供は、自分の生んだ子供石に限ってしか薬湯にすることはできな

い。だがそれは裏返せば、使徒でない子供でも、自分の子供石でなら、誰もがその石の力を生かした薬湯が作れるということだ。

ところが、困ったことにアラクセイトには、これができない。

彼女を選んだ石墨は、非常に柔らかい上にありふれたものであるから、宝飾や……お守りとしての体裁を整えるための細工も難しい。いくら聖石の子供石であろうとも、鉛筆の芯の材料となる石を、好んで欲しがる人間は少なかろう。

燃料としてなら、確かに多少の需要はあるだろうが、仮にも聖石の子供石を、石炭や薪の感覚で扱える人間は……やはり、数は多くはない。

唯一、神殿を出た後でも、生計の支えとなりそうな方法——というのが、石墨を使っての薬湯作りなのだ。

幸いなことに、石墨には体を活性化する力があり、さらには解毒や殺菌の効果もあることが知られている。

これで薬湯を作ることができれば、使徒の資格試験に落ちても、故郷でなんとか家族ともども生きていくだけの収入を見こめると思ったのだけれど——。

それが、うまくいかない。

「もう……いやになっちゃうなぁ……」

自分が特別な存在などではないことは、この神殿に来て、すぐに思い知らされた。

誰もアラクセイトを馬鹿にしたりはしなかった。聖石の子供に上下の差はない。世界に存在するすべてのものは、セイトーリを始めとした神々が生み出した聖なる存在であり、そこに貴賤はないと教えられてきた。

それはその通りだと思う。

けれど、アラクセイトは劣等感を抱かずにはいられなかったのだ。

自らの抱いて生まれてきた石に稀少性がないありふれたものであったことに対してではなく、それすらも自在に扱いきれぬ未熟な自らの能力ゆえに。

（誰でも、自分の子供石ぐらい、簡単に薬湯にできるのに……）

それすらもできない自分はひどく無能な人間に思えてしまう。

もちろん、誰もが簡単に自らの子供石を薬湯にできるとは限らない。

稀少と見なされる聖石を抱いてきた人間などは、作業に苦労することも多いと聞いた覚えがある。前例が少なすぎて、コツを摑みにくいのだという。

殊に稀少性の高い石を抱いて生まれてきた者は、他者の意見を参考に、自らのやり方を学ぶしかないことから、失敗することも多いと聞いた。

だが、アラクセイトは石墨に選ばれた子供だ。

コツもなにも必要としないほど、ありふれた石を抱いて生まれてきた子供だった。

その手の子供は、誰かに教えられるまでもなく、やり方を身の内に刻まれているというのが

普通で……わざわざひとに教えて貰わなければ体得できないというのは、異常な事態なのだ。

それでも神殿は、色々な便宜を図ってくれた。

近隣の神殿に連絡を取り、アラクセイトと同じ石墨を抱いて生まれてきた『先輩』を一時期招き、参考となるような話をしてくれるよう頼んだり、聖石の子供の教育にあっては専門家とまで呼ばれる凄腕の教師を招いたりと……実際、いくら感謝してもしたりないほどに、神殿は彼女によくしてくれていた。

けれど、その結果は……この無残な煤だらけの修行室だ。

薬湯ひとつ満足に作れない。

それどころか、先日などちらっと考えた邪念——怠け心ともいう——のせいで、寮内の一部を水蒸気爆発の危険にさらしてしまった始末だ。

これはもう、辿り着く結論などひとつしかないではないか。

（わたしってば、結局、無能以外の何者でもないってこと……なんだよねえ……）

修行に挫折する度、何度も脳裏に浮かんできて、その都度「そんなことないわ」と否定してきた厳粛なる事実——と、彼女には思えた——が迫ってきた。

認めれば、楽になれる。

わかっていても、認めるのは苦痛だった。

どうせ、わたしは無能なのだから——。

そう思うのが、なにより怖かった。

（できる……できる！　きっとできる！　いまは無理でもいずれは……きっと……っ！）

必死にそう、自分に言い聞かせながら、アラクセイトが砕け散った茶碗の破片に手をのばしたときのこと。

修行室の扉が開いた。

「爆発する音が聞こえたから、どうせあんただろうとは思ってたんだけどね……」

呆れたとばかりに、肩をすくめて見せたのは、ソラミイノだった。

「……にしても、すごい有り様ね。よくこれで火事にならなかったもんだわ」

「ううぅ……」

言葉に詰まったアラクセイトが言い訳を口にするより早く、ソラミイノが意外なことを言いだした。

「……いいけど。いつまでも座りこんでないで、立ってちょうだい。副長がお呼びなんだから……」

副長とは、副神殿長のことだ。

そう告げてから、改めてソラミイノはアラクセイトの姿をしげしげと見つめた。

「……駄目ね。その前に入浴の必要ありだわ。ちょうど今日は入浴予定日だし……湯船には入らないにしても、体を綺麗にするぐらいのお湯を都合してもらいなさいな。寒がりなあんたの

ことだから、湯船につかりたいだろうけど……そうね。体と髪をぴかぴかに洗い終えてからなら文句は出ないでしょうし……わかった!?」

ずずいと指を突きつけられての問い掛けに、アラクセイトが目を白黒させたのは致し方ないことだった。

「ええっと……あの、ミイノ……？」

けれど、ぐだぐだするのが大嫌いな室長は、アラクセイトにもそれを許してはくれなかったのだ。

「返事は!?」

すさまじい勢いで問いかけられ、反射的に「はい！」と答えてしまった。

後は室長の指示どおり、浴場へ向かう道しか、アラクセイトには残されていなかった。

2

アラクセイトとソラミイノのふたりが、指定された部屋に着いたとき、すでにそこには先客がいた。

ひとめ見ただけで忘れられなくなりそうな、印象的なふたり連れである。

ひとりは炎のような朱色の髪と褐色の肌、鍛えあげられた体格の、二十代後半とおぼしき大柄な男性。

もうひとりは、小柄ではないが、男性と並ぶとどうしても小さく見える、つややかな黒髪と漆黒の双眸が透けるような白い肌に恐ろしいほどに映える美女だった。

ひとりずつであっても、街を歩けば目立つに違いない彼らは、ふたり並ぶとなおさらに印象的だった。彼らが連れ立って歩いている姿を一度でも目にしたら、きっと忘れることはできないだろう……そう確信できるほどにはあざやかで強烈な『華』を放つ一対だった。

だが、アラクセイトが彼らを目にするなり息を飲んだのは、そのせいばかりではなかった。彼らふたりの放つ気が、尋常でなく強く……さらには、彼らが特別な存在であることを示すモ

ノを身につけていたせいだった。

それは彼らの喉元を飾る首飾りだった。喉にぴったりとはりつくような意匠は、素材によっては拘束の首輪を連想させてもおかしくないものだったが、決してそうではないことを見る者につきつける程度には贅沢な作りだった。

細かい金を編みこんだかのような幅広のその中心に、半球の聖石が据えられている……周囲を金で縁取られた形で。

朱色の髪の青年の喉元で輝くのは見たこともない深い、深い赤い石。不透明なその石の持つ色彩は、まさしく血の色——紅玉や柘榴石とはまったく違う色合いだった。

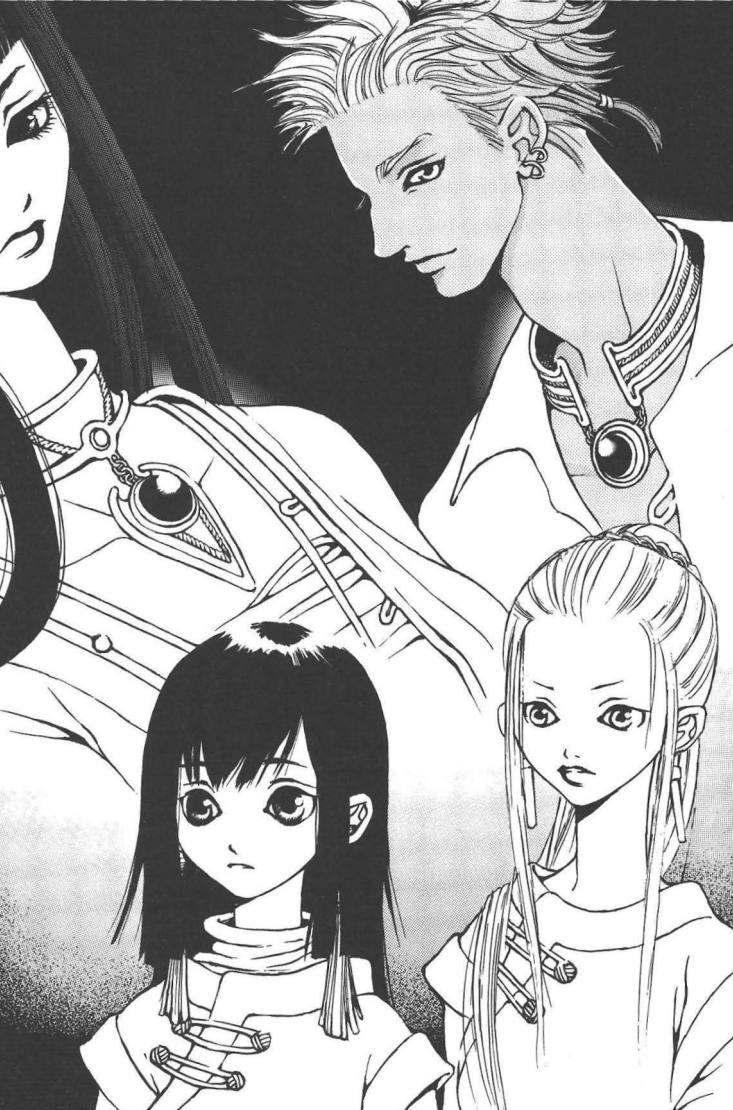
対する黒髪の女性の喉元を飾るのは、漆黒の石だった。

（黒玉……？　黒瑪瑙……？　それとも黒曜石……？）

聖石だとはわかる。

見るだけでそれがなんであるのか見分ける訓練も、アラクセイトは受けていた——豊珠は聖石の子供が数多く生まれるため、半貴石はもちろん、貴石や宝石の聖石の子供石が、神殿には多数保管されており、授業で目にすることも多かったのだ。

けれど……前述した通り、アラクセイトはお世辞にも成績優秀とは言いかねる生徒だった。相手が恐らく使徒だということは見抜けても、何の石に選ばれたそれなのかまでは見抜けなかった。



黒髪の美女の喉元を飾る石に限ったことではない。朱色の髪の男性の聖石がなんであるのかも、このとき、彼女には判別できなかった。

なにしろ、初めて目にする色彩であり、光沢だったのだ。

そんなアラクセイトのすぐそばで、息を飲む気配があった。

ソラミイノだった。

信じられないとでも言いたげに、青緑色の瞳を瞠ったまま、優等生の室長は「まさか……」と掠れた声でつぶやいた。

血赤珊瑚……!?

零れた声を耳にして、アラクセイトはますます目を丸くしてしまった。

珊瑚の聖石――話に聞いたことぐらいはあった。真珠の聖石と同じぐらいには。

だが、それはあくまで南に位置する世界でのことではなかったのか。

なぜ、こんな北の果てとも言える豊珠に、そんな聖石を持つひとたちがいるというのか。

（いえ……きっと、違う……）

豊珠は確かにほかの大陸より多く、聖石の子供が生まれることで有名な大陸だ。

だが、それは大地の生み出す貴石や宝石に限ったことで……海の宝石と呼ばれる聖石の子供は生まれない。

珊瑚も真珠も、ある程度温かい地域――海域と呼ぶべきか――でしか産出されない。

少なくともそう言われているし、アラクセイトはこれまで一度も珊瑚の聖石やその子供石が豊珠にあるとは聞いたことがない。
それはつまり、どういうことなのか。
なにか大変なことに巻きこまれようとしている……そんな気がして、アラクセイトは思わず自分の胸元を摑んだ。
動悸が激しい。
（なに……なんなの……!?）
なぜ自分たちが呼び出されたのか、その先になにが待っているのか。
わからぬ不安を覚えながら、アラクセイトはきつく、きつく唇を噛んだ。

少女間における情報伝達の速さと言えば、目を瞠るものがある。
しかも話題の主が同室者ともなれば、ただでさえ旺盛な好奇心はとどまるところを知らず、せっせと情報収集に励んだ少女四名は、アラクセイトとソラミイノが部屋に戻ってくるなりぐるりを取り囲んで、自分たちでは集めきれなかった情報の提供を求めてきた。
神殿とは言っても、使徒候補でしかない年少者の教育のための区域における生活は、平和と

言えば聞こえはいいが、逆を返せば平凡で退屈な日々の繰り返しだ。

少女たちは日々、刺激を求めている。

正式に認められた使徒――らしいふたりづれ――が、肉親や被保護者がいるわけでもない、いわゆるところの『教育区域』に姿を現したことも事件なら、どうやら自分たちと同じ部屋で寝起きしている友人たちが、そのふたりに会った――らしい――ことも事件だった。

ひとめ見れば忘れられない、印象的なふたりの正体を知りたいやら、友人たちがなんのために呼ばれたのかを知りたいやら……とにかく、少女たちの好奇心には際限がない。

かくして、副神殿長に呼ばれたふたりは、部屋に戻るなり質問責めにあった。

仲間たちの興味の大半はふたつにわかれており、そのひとつは件の聖石の使徒――らしいふたり連れ――が何者なのかということで、もうひとつは、なぜ彼女たちふたりが呼ばれたのか……だった。

まだうまく、自分で理解できていなかったアラクセイトの代わりに、周囲から投げかけられる問いに答えてくれたのはソラミイノだった。

「あのおふたりは血赤珊瑚と黒珊瑚の使徒さまで、セイさまとカーラさまとおっしゃるの。セイさまは幼いころに、カーラさまはまだお生まれになっていないころに豊珠にいらっしゃったそうよ。おふたりとも、殊玉の神殿に籍を置いてらっしゃるのですって。今回、玉濫へいらっしゃったのは、サナイート殿下の要請に応えてのことだという話よ」

するするするり。

ソラミイノは見事に、嘘ではないが事実でもないことを口に乗せて周囲を納得させていく。

「サナイート……って、確か殊玉の王子さま……よね？」

ライランテが、首をかしげながらそうつぶやいた。

これにソラミイノは大きくうなずき、

「殊玉の王太子殿下よ」

殊玉は玉濫と国ひとつ――凍琥という国だ――はさんだ近国のひとつで、来年の春、玉濫の第三王女であるファラライネが嫁ぐことが決まっていたりする。

その相手こそが、サナイートだった。

他国はもちろん、自国であっても、王族など遠い存在なわけだが、ファラライネに関してだけは、少女たちは親近感を抱いている。

なぜなら、いま話題に上がっている自国の第三王女は、使徒となることはなかったが、紅水晶を抱いて生まれてきたことで、十年以上神殿で暮らしていたことが有名だったからだ。

無論、この神殿ではなかった。ここはどちらかと言えば田舎で……神殿としての規模も大きくはない。それでも、同じ神殿で暮らし、修行した相手ということで、なんとなく王女に親近感を抱いてしまうのだ。

そんな王女に関連する話題である――少女たちの瞳は、好奇心できらきら、きらきらと輝い

ていた。

「そ、それで、殊玉の王太子殿下は、使徒さまにどんな要請をなさったのかしら？」

政略結婚という言葉の持つ意味を、敢えて無視しているとしか思えぬほどに、少女たちの頬は紅潮し、声は高ぶっていた。

全員、夢見る夢子ちゃん状態になっていた。

そんな彼女たちに、ソラミイノがあっさりと答える。

「あのおふたりは殊玉の王太子殿下とも親しい間柄であられるのですって……それで、どうやら殊玉のことや、王太子殿下のお人柄とかを詳しくファラライネさまにお伝えするためにいらっしゃったようなの。使徒としてのお務めとは、全然関係なく、王太子殿下の親しい友人として、仲を取り持つおつもりなのですって。なんでも幼いころ、まだ使徒に選ばれてらっしゃらなかったころに、殿下の危難を救われたことがあったとか……」

ああ、それで――。

と、少女たちが一様に納得する様子を認めながら、アラクセイトは室長の器用さに舌を巻いていた。

（よくもまあ、ここまで……）

呆れる以上に感心していた。

自分では、とてもここまで立て板に水とばかりに、すらすらと周囲を納得させるようなこと

は考えつけなかったろう。

（……すごい……）

改めてそう思いながら、同時にこれからソラミイノの笑顔には要注意だと、そう思った。

次いで重ねられた同室の仲間から発せられた問いに答える室長の表情と声と口調と……とにかくすべてをあわせて考えた場合、やはり用心すべしと心に刻んだ。

「それで、どうしてあなたたちは呼ばれたの？」

ソラミイノはにっこり笑って、ぬけぬけと嘘ではないが真実でもないことを口にした。

「おふたりとも、本当のところは南のお方だから、豊珠の寒さに閉口なさったそうよ。殊玉はまだそれほど寒さの厳しい国ではないから、大丈夫だろうと思われたそうだけど、玉濫に入ってここの寒さにうんざりなさったんですって。それで、火神と相性のいい星の下に生まれた子供がそばにいたらと思って、取り敢えず一番近かったこの神殿に駆けこまれたのですって。わたしとアークが火の宮生まれなのは知ってるでしょう？　……どうもねえ、わたしたち、寒さに耐性のないおふたりのカイロ代わり、みたいよ……？」

お見事――の一語に尽きた。

友人たちはこの説明に、大いに納得してしまったのだから！

これが人徳というものなのかもしれない――と、アラクセイトはこっそり思った。

実のところ、アラクセイトとソラミイノが呼ばれた用件は、珊瑚の使徒ふたりのカイロ代わりなどではなかった。

そもそもあのふたりは、王都である六華を目指してなどいないのだ。

呼び出された部屋で、他言無用を約束された後、教えてもらった事情は深刻だった。

『瘴の女神のことは知っているかい？』

あまりにも基本的なことを尋ねられ、アラクセイトは一瞬自分はそれほどの劣等生だと見なされているのかと思ったほどだ。

一方優秀すぎるぐらい優秀なソラミイノは、逆に不安そうな顔になっていた。

『バルヴァローズ創世神話でしたら、暗唱できる程度には入ってますけれど……もしかして、神話には記されていない秘密があるのでしょうか？』

もちろん、現実に暗唱などしたことはありませんが——との彼女の言葉に、漆黒の髪の美しい女性は、小さく笑って『これからも是非そうしてほしい』と言った。

世間に出回っているものと違い、神殿所蔵の神話には、瘴の女神の真名が記されている。真名を口にするということは、女神に語りかけることであり、その眠りを妨げることになりかねない。だから神殿に入った者は、決して瘴の女神の名を口にしないという誓いを立てた上で、

暗記するほどに神話を頭にたたきこむのだ……もっとも、文語体で綴られた文章は難解なため、アラクセイトは暗唱する自信はない。

さて、話は少しずれたが、そんな問いを口にしたソラミイノに、いくつかの質問をした後、今度はセイと名乗った男性がこう告げた。

『悪かったな、試すような真似をして。国によって神話が勝手に改ざんされていることもあるもんでな。そういった土地の神殿じゃ、間違った認識で罷り通っていたりするわけだ。それを確かめる上でも、最初にこの質問をすることにしてるんだ。だが、さすがに豊珠だ……教育が行き渡ってる。最も多くの使徒を輩出する大陸なだけあるな』

本気で感心するセイの様子に、アラクセイトは彼らがやはり、豊珠以外の大陸の出身者であることを確信した。

前にも記した通り、珊瑚は南の海でしか産出されず、自然、南の大陸でその使徒の多くは生まれるのだ。

おおごとだと思った。

普通、聖石の子供であれ使徒であれ、そのほとんどは祖国内で活動するものだ。

国を越えて――つまりは自国の使徒では手に余るような事態が生じた場合、神殿が他国のそれに要請するわけだが――活動する使徒もいるが、その数は決して多くない。つまり、よほどの実力と功績の持ち主でなければ、他国からの要請を受けて派遣されることはないということ

だ。

ましてや、他大陸からの招聘を受けるなど……尋常な実力の主ではないなによりの証明である。

だが、それ以上に気になることがあった。

そんな彼らが呼ばれたということは、それだけ大変な事態が、この豊珠で……それも、恐らくはこの玉濫で起こっているということだ。

使徒に選ばれたわけでもない一介の見習いの耳に入って来ないのは無理からぬことだとしても、休日には近くの街に出掛けることも許されている自分たちが、なんら不安な噂ひとつ耳にしたことがないというのが気になった。

瘴の女神の眠りを妨げる可能性のある事象だとすぐにわかるよう、神殿の者は常に気を配っている。他大陸から助っ人を呼ぶほどのおおごとなら、噂のひとつにもなっていなければおかしい。

にも係わらず、アラクセイトは一度もそんな噂を聞いたことがなかった。

ならば……考えられることはふたつ。

厳重に隠し通されてきたのか、あるいは噂にする者すら残されなかったほどの事態が生じたか……。

実技関係におけるほぼ絶望的な成績のせいで、同期生のなかでは下から数えたほうが早い領

域に入っているアラクセイトだったが、頭の働き自体は悪くない。だからつきあえるのよ――などと、ソラミイノあたりは冗談めかして言うぐらいだ。

そんなアラクセイトの不安な顔に、やはり同感だとばかりに、室長である優等生が目配せしてきた。どうやら他言無用の念押しは伊達ではないらしいわね――とでも言わんばかりに。

そして、そんなふたりを見つめていた――観察していたのかもしれない――カーラと名乗った女性は、納得したようにうなずいた。

『なるほど、この神殿の上層部の人選は確かなようだね。これだけでそこまで読み取れるのなら、同行してもらっても大丈夫だろう』

そう言って、真摯な眼差しをふたりに向けた黒珊瑚の使徒は、厳しくさえ聞こえる声で、目的地と事情を簡潔に告げた。

『想矢湖のことは？』

もちろん知っていた。

この玉濫において、唯一一年中凍ることのない不凍湖なのだから。

『その不凍湖が凍ったんだよ。しかも近隣の集落は全滅した……逃げる間もなかったってことだ。偶然そのころ、余所に出掛けていた男が、戻ろうにも戻れないと神殿に駆けこんで事態が明るみに出た。あたしらが呼ばれたのはそのためだ。で、なんであんたたちを呼んだかと言うとだ……』

カーラがすべてを言い切る前に、ソラミイノが口を開いた。
『わたしたちが、イイタールの加護を受けた星の下に生まれてきたから……ですか？』
イイタールは火の神――象徴する色彩は赤と緑。
砂金水晶を抱いて生まれてきたソラミイノは、火神の愛し児だった。
けれど、アラクセイトは違う。確かに火神の加護を受ける日と刻に、生まれ落ちはしたものの、抱いてきたのは石墨だったし、黒という色彩は、水神カンラタールの加護を約束するものだった。
（なら……どうしてわたしが呼ばれたんだろう……？）
そんなアラクセイトの内心の疑問に答えるように、口を開いたのはセイだった。
『もちろんそれもある……あるが……もうひとつ、大事なことがある。火神の加護を受けた人間ぐらいいくらだっている。聖石の子供だって……いいや、使徒にだってな。だが、発火能力を与えられるぐらいの加護をもらったやつは滅多にいない。使徒の認定さえ受けていないお前さんたちを、いきなりこんな大仕事に巻きこむのは多少気が引けるが……どうしても、つきあってもらわにゃあならん。お前さんらだって祖国が凍りついてひとの住めない土地になるどころか、世界破滅のきっかけになるのは遠慮したいんじゃないか？』
ごくごくさらっと――いともあっさりと……凄まじいことを言われて、アラクセイトの頭は一瞬思考停止した。

最初に覚えた驚愕は、これまで誰にも告げたことのない、自らの発火能力――もっとも、歳を重ねるごとに制御が難しくなってきて、いまではほとんど自在に操れなくなってしまっているのだけれど――を相手が知っていたということに対するそれ。

次には、世界の存亡などという、あまりにも大きなことをあっさりと言い切られ……しかもそれが事実だと、直感でわかってしまったという事実。

第三のそれが、実のところ一番大きかった。

だからこそ、珊瑚の使徒ふたりは、自分たちを巻きこむのだと――そう宣言したのだ。

世界存亡の危機にあって、使徒ですらないふたりの少女に『そういうわけで、お前たちふたりは切り札だから、拒否権なしね』と言わんばかりに、勝手にさっさと巻きこんで、しかも逃げ道ひとつ、残してくれなかったのだ！

（ひどい……ひどすぎる……！）

内心滂沱の涙を流しながら、嗚咽ひとつ洩らすことも許されず、アラクセイトは世界の破滅をかけた事件に引っ張りだされることになった。

（わたしは……っ！　どうせ使徒になんかなれっこないんだから……石墨の薬湯と、この火付けの力利用して、故郷の山でいっぱい採れる雑木だとかなんとかで炭とか作って、それ売って……木酢液なんか肥料にして野菜とかある程度自給自足できたらいいなー……ってっ！　それぐらいのささやかな望みしか抱いてないってのに……どうして……っ!?）

どうして――こんなおおごとになってしまったのだろう……？

わからなかった。

わからなかったけれど……思わず大粒の涙が溢れ出した。

そんな彼女の肩を、ぽん、と叩く相手がいた。

ソラミイノだった。

てっきり、『しっかりしなさい』だの『がんばりましょう』だのという言葉がでてくると思っていたアラクセイトは、次の瞬間唖然とした。

『平穏な暮らしのためにも、完璧に隠してたつもりだったのに……神殿の調査部ってば侮れないわね。仕方ないけど、放浪の民にはなりたくないから、取り敢えず頑張りましょ。どうやら大仕事みたいだし、うまく行けば、この一件で力のすべてを燃焼し尽くすこともあるだろうし、そうでなくてもそういうことにすることはできるでしょうし……ね』

非常に清々しい笑顔で、非常に清々しくないことを言われたような気がして、アラクセイトは目をぱちぱちさせた。

（ソラミイノ……？　違う……これ、わたしの知ってるソラミイノと違う……）

そんなことを思いながらも、アラクセイトは事実を受け入れざるを得なかった。

自分たちは、癖の女神の眠りを妨げるかもしれない騒ぎの起こった想矢湖へ向かうのだ……向かわざるを得ないのだ。

そうして、その先に待っているのは――。
（いったい、なにが待ってるっていうのーっっ!?）
アラクセイトの脳裏に描いていた未来設計図は、この瞬間から先、ずれにずれまくり、元の姿に戻ることはなかった。
誰もが願って伝説になるわけではないのだ……。

3

想矢湖への、四人だけの旅が始まった。

だがそれは、アラクセイトにとっては、学院で過ごす日々以上に過酷なものだった。

足が痛むだの、体がくたくたに疲れるから——ではない。

問題の発火能力の制御に関して、同行している他の三人から、極めて厳しい訓練を移動途中に受けることになったせいだ。

火の属性を持ち、ほぼ完璧に炎を操ることのできるソラミイノが教師役にあたり、珊瑚の使徒ふたりは、万が一——と言えたなら良かったのだが、実のところはほぼ毎回だった——アラクセイトが暴走させてしまった炎を鎮火する役割を分担していた。

その日も、小休止中にやった指導時間に……あわや大惨事という失敗をしてしまった。

ソラミイノの誘導に従って、思いどおりに炎を生み出すことには成功したものの、制御に失敗してしまったのだ。

周囲は一面の雪だ。

だから、少々の炎が生じたところで問題はなさそうに思われがちだが、これが大変な間違いであることは、北国出身の能力者は知っている。空気中の水分までもが凍りつき、大地に積もってしまった場所では、大気は乾燥しきっているのだ。

そういう場所で、制御を失った炎が暴れ回ったらどうなるか――考えるまでもないことである。

あっという間に大火事だ――なにしろ周囲には、極寒の地にも係わらず、生命力溢れる針葉樹が森をなしているのだから。

幸いにもそのような事態にはならずにすんでいるが、恐ろしいのはそれがすべて紙一重のタイミングで阻止されているということだ。

調和と制御に長けたソラミイノの誘導と、稀有なる珊瑚の使徒ふたりが揃っていることで、なんとか無事におさめているのだ。元凶であるアラクセイトが弱音のひとつやふたつやみっつやよっつ、吐きたくなったとしても無理からぬことと言えよう。

「だから……もう、やめましょうよぅ」

緊張と不安と自己嫌悪とで、滂沱の涙垂れ流し状態となったアラクセイトは必死に同行者三人に訴えた。

（どうせ、わたしの力なんて大したものじゃないんだし……第一、子供のころにしかうまく扱えなかった力だし……いまじゃ、無意識で火事騒ぎ起こすんじゃないかって不安に思っちゃう

ぐらいなのに……！）

だから、やめてほしかった。

怖かった。

つまり、自分のことを誰より信じられずにいたのはアラクセイトだったのだ。

もう少しだけ頑張ろう——とか、もう少しだ——とか……そういう言葉は神殿で聞き飽きていた。石墨を抱いて生まれてきた先輩たちも、さんざん助言してくれたり、親身になって考えてくれたりしたけれど、結局なんの進歩も見られなかった。

つまるところ自分には、聖石の子供としての資質がないのだと思わざるを得ないではないか。

もちろん、この特技でもって、使徒資格選別試験に洩れた後——落ちることを彼女は確信して疑っていなかった——家族を養うためにも、せめて薬湯作りのコツぐらいは摑んでおかないとまずいとは思っていたが、それでも、こんな、やればやるだけ自分の無能ぶりが明らかになる修行なんて、つづけたくはなかった。

だから、つい、爆発してしまったのだ。

「もうっ！　いい加減にして！　できないもんはできないのっ！　できるはずだなんて簡単に言えるひとたちにはわからないだろうけどっ！　できないのにやれって言われるのは本当に辛いの！　息も出来ないぐらいに苦しくなるのっ！　わたしだって頑張ってるのよ……でも、ど

んなに頑張っても出来ないこと、出来るはずだって言われて……言われつづけて……もう、いいかげんにして欲しいの！」

癇癪大爆発だった。

そう叫んでだーっと走り出したアラクセイトは、実のところ、自分がどこを目指しているのかも、なにを求めているのかもわかってはいなかった。

ただ、ただ夢中に走って――そして。

気がついたとき、彼女は凍りついた池のほとりにいた。

追ってくる者の気配はない。

そのことにまた、ちょっぴり落胆を覚えながら、アラクセイトはふう、と息をついた。

「だめだなあ……わたし……」

皆が自分のために――あるいはこの先一番足手まといになりそうな存在だからという理由からだとしても――鍛えようとしてくれているのはわかっているのに、なのに癇癪を起こしてしまう。

（本当に、わたしったら……）

救いようのない馬鹿だ……。

そう思ったときのこと――。

耳を通じるのではない、意識に直接訴えかけてくる声……というか想念を、彼女は感じ取っ

た。

〔おいで、おいで、おいで、おいで……〕

強力な、引き寄せる力に満ちた『声』だった。

声は誘惑する。

〔おいで、おいで、おいで……ここでは誰もお前に無理強いしない……〕

この声に、ぐらりと来たのは……事実だった。

〔おいで、おいで、おいで……みんな、お前が頑張っているのはよく知っているよ……。それでもできないことは仕方ない。みんな、そんなことはわかってる。お前にはお前にしかできないことがある……そんなこともわからずに、できないことを求める奴らの声になど、耳を傾ける必要はない……！〕

だから、おいで――。

自分たちの元へ来れば、絶対に苦しい思いも焦りや嫉妬も感じることはなくなるのだと……その誘惑を、アラクセイトは受けた。

だが、次の瞬間、そんな印象を払拭させられるような衝撃を覚えた。

叩きつけられた――と言うべきか。

池の水の一部が砕け散り、大きな穴があいていた。

「耳を貸すんじゃないよっ！」



背後から聞こえてきたのはカーラの声――では、この破壊はカーラによるものなのだ。

（す、すごい力……）

正直なところ、なにが起こったのかもわからなかった。

けれど、そのせいで、あの声ならぬ声がふつりと消えたのは確かだった。

「あ……」

声を失い、ぱくぱくと口を開閉させるアラクセイトの目に、近づいてくるカーラの姿が映った。

長い黒髪――漆黒の双眸。

なのになぜだか真紅の炎を身に纏っているような……そんな錯覚に、アラクセイトは目を瞬かせた……。

カーラトーニは、本当に美しい女性だった。

顔だちだけではない、内的な美を感じさせる女性……いや、人物だった。

稀有で強大な力の資質を持つ者が、たやすくそれを開花させられるかといえば、必ずしもそうとは限らない。無論天才肌の人物もなかにはいるだろうが、資質が大きければ大きいほど、

制御するには相当な精神力が必要だと聞いた。
　珊瑚自体、非常に珍しい宝石なのだ。そのなかでも――血赤珊瑚ほどではないにしても――黒珊瑚は珍しいとされている。そんな聖石を抱いて生まれてきたカーラが、どれほどの努力をしてその力を使いこなせるようになったのか……考えるだけで、アラクセイトは自分が恥ずかしくなる。
（ことあるごとに癇癪大爆発……だもんなあ。きっと呆れてらっしゃるだろうなあ……）
　なんてことを思いながら、ぼんやりカーラを見つめていたアラクセイトは、だから、不意に相手が「すまなかったね」と謝ってきたのにびっくりした。
「え、え……!?　ど、どうしてですか!?」
　謝られる理由が、まったくわからなかったのだ。
　目を白黒させてしまったアラクセイトに、カーラはすっと手を差し出した――先程の衝撃で、彼女は雪の上に尻餅をついていたのだ。
「あ、ありがとうございます」
　と礼を言って立ち上がった彼女に、カーラはもう一度「すまなかった」と繰り返した。
　どうにもわからなくて、首をかしげてしまったアラクセイトに、黒珊瑚の使徒は苦笑まじりにこう答えた。
「瘴気の強い地域に入ったことに気づいてたのに、ひとりで飛び出させるなんて、あたしらが

考えなしだった。せめてお守りぐらいは渡しとくんだったよ……あんたみたいに敏感なタチの子が、あっちの声を拾わないはずがないってのにね」

相変わらず、よくわからない言葉だった。

（あっちの声ってなに？　大体、わたしが敏感だなんて話、いったいどこから出てきたわけ!?）

自慢ではないが、霊感だのその手の体験だのとは、とことん無縁に過ごしてきたアラクセイトだった。

「ええっとー、カーラさま？　わたしが敏感だなんて話、どこからお聞きになったんでしょうか……自慢じゃありませんけど、わたし、鈍感なことでは多分人後に落ちないと思ってるんですけどー……？」

霊感ないし、金縛りにだってあったことないし、ぞわぞわするって体験すらないし……などと、もごもごと説明する彼女に、カーラは小さく笑って告げた。

「ああ、その程度のやつらは怖がってあんたには近づけないだろうからね」

そうは言われても、得心がいかない。

そういった存在を怖がらせるようななにを、自分が持っているというのか。

きょとんと首をかしげた彼女に、黒髪の使徒は困ったように息を洩らし、仕方なさそうに説明してくれた。

「あんたは自分のこと、落ちこぼれだと信じこんでるみたいだけどねえ、あんたの生み出す炎は、実のところ普通の炎なんかじゃない。多少の瘴気ぐらい焼き尽くすだけの力を持ってるんだ……もちろん、悪意のある幽霊とかにも有効な力がね。下手に手を出して焼き尽くされちゃたまらないって、やつらが思う程度にはね。火の宮に生まれた子供のなかには、発火能力を持つ者がたまに生まれるけど、大抵はそこまでの力はない。あんたの力は、かなり桁外れなんだよ。そのせいで、自分のことを鈍感だなんて思いこんでたってわけだ。だけど、あたしたちがいま向かってる場所に巣喰ってる瘴気は、ちょいとタチが悪くてね。あたしらがついている間は、さすがに手出しはしてこないけど、ひとりになったあんたを狙うことぐらいは、ちゃんと見抜いて対策を練っとくべきだった。本当にすまなかった」

そう言って、カーラは律儀に頭を下げた。

「そ、そ、そんな……っ！」

困惑と自分よりずっと高位にある女性の真摯な謝罪に対する居心地の悪さと、話の内容からつい覚えてしまった不安とで、半ば混乱しかけたアラクセイトは頭を抱えこんでしまった。

（ええーっと……？　つまり……どういうことなんだろう……？）

アラクセイトは混乱したなりに、一所懸命告げられた内容を整理しようとした。

（最近じゃ全然制御できないけど……まあ、この発火能力のおかげで、悪霊やらなんやらはこれまでわたしに近づこうともしてなかったんだけど、でもわたしたちが向かってる想矢湖に巣

喰ってるらしい瘴気は、まったくそんなこと気にせずにわたしにちょっかいかけてくる気満々だってことで……ってことは、さっきの声は、ソレだったってことで……？　ちょっと待ってよ。まだ想矢湖まではけっこう距離があるはず……なのに……？）

思わず、上目遣いでカーラを見つめてしまったアラクセイトだった。

「あの……ここから想矢湖って、まだ……かなり遠い……ですよね……？」

「徒歩で一日進める距離を考えりゃ、遠いねえ」

他人事のようなカーラの同意の言葉に、アラクセイトはどっと冷や汗が噴き出すのを感じた。

「ええっと……それってつまり、これから近づいて行けば行くだけ、どんどん影響力とかも大きくなるってこと、なんですよね……？」

「そういうことになるねえ」

冗談ではなかった。

（あんな甘い声で、あんな甘い言葉で、これからずっと誘われつづけるの、わたし!?　絶対無理、逆らえっこない！　さっきだって、カーラさまが来てくださらなきゃ、ふらふらついて行ってたわ！）

そして、自分を呼ぶのは瘴気だ。

他大陸から有力な使徒を招かねば解決できぬほどの。

そんなモノに取りこまれようものなら、末路は見えているではないか！

（本当にっ！　冗談じゃないわっ！　わたしには大事な家族がいるのよっ！　父さんと母さんと弟ふたりに妹もひとり……っ！　使徒さまに選ばれるだなんて大望、とっくに捨てたけど……でもっ！　体の弱い父さんに滋養のあるもの食べさせて、まだ小さい弟と妹を無事に育てるのは希望とかじゃなくて決定事項なんだから……っ！）

そうと決まれば話は簡単だった。

（さっさと逃げるに越したことはないわ……！）

そう心を決めた彼女の心中を見抜いたわけでもあるまいが――いや、もしかしたら見抜いたのかもしれないが――固い決意を黄橙色の双眸にたたえ、口を開きかけたアラクセイトに、カーラトーニは惚れ惚れするような笑顔で「却下」と答えた。

「わたし……まだ、なにも言ってませんけど……？」

「言ってないけど、顔に書いてある。さっさと逃げ出そうってね。その気持ちはわからないでもないがね、そいつは無理ってもんさ。あっちはもう、あんたを見つけてしまった。見つけた以上、絶対忘れもしなきゃ、あきらめもしないだろうよ。取りこむか消滅させるかふたつにひとつだ」

観念しな――とばかりの脅迫めいたカーラの台詞に、アラクセイトは涙ぐんだ。

怒りゆえ、だ。

カーラやセイが、なぜソラミイノだけでなく、自分までも同行させたのか——その理由が見えたのだ。

カーラの言葉を鵜呑みにする気はない。

けれど、確かにカーラは……そして、恐らくは彼女の相棒であるセイも、アラクセイト自身把握できていない彼女の能力を駒のように使うつもりで同行を要請したのだ……いまだ教育中の『聖石の子供』には、神殿上層部からの命令に拒否権がないことを知っておりながら！

「卑怯です」

他人の命や運命を道具扱いするだなんて——。

弾劾の響きもあらわに言い切ったアラクセイトに、カーラはうなずいた。

「まったくね、我ながら卑怯だと思うよ」

あまりにもあっさりと返されて、逆にアラクセイトはどうしていいのかわからなくなってしまった。

そんな彼女の混乱につけこむように、カーラは告げた。

「恨みつらみなら、後で幾らだって受けつけるさ。そのぐらいの覚悟はあたしもあいつも抱いてるさ……だけど、同胞を騙してでもやらなきゃならないことがある」

そう言い切ったカーラトーニは、遠く淋しく……けれど厳しい目をしていた。

だから、尋ねるのに勇気が要った。

ぎりぎりまでの勇気を振り絞って、アラクセイトは尋ねた。
「……あっちの声って……どういう意味なんですか？」
カーラはすぐには答えなかった。
まるで焦らすかのように――あるいはこちらの覚悟を試すかのように。
「知りたいかい？」
問われた瞬間にも、反射的にかぶりを振りたくなった。
知ることが怖かった。
知ることで、自身のなかの均衡が崩れ落ちることが怖かった。
恐怖以上の恐怖だった。
けれど、アラクセイトは訊ねずにはいられなかったのだ。
「知りたい……っ！」
はっきりと、彼女は答えた。
それに対して、黒珊瑚の使徒は、誠実に応えたのだ。
「聖石の使徒は瘴の女神の眠りを守るために存在する……そのことはわかっているね？」
言われるまでもないことだったので、アラクセイトはうなずいた。
「瘴の女神が抱いて眠り続けている瘴気の元凶が、かつて三つあった月のうち、自滅したふたりの月神であることは？」

そのことも知っていたからアラクセイトはうなずいた。
「ならば、すでに滅ぼされたふたりの月神の妄執が、いまだに生きつづけているということは……？」
「うそ……」
反射的に迸ってしまった言葉。
三つ子の月神のなかで、生き残ったのはサラムトーリただひとりだった。
ほかのふたりの月神は、すべての生の女神――セイトーリによって命を摘み取られ、その魂の抱えた瘴気を浄化するがために、女神が眠りについた……そのはずだった。
だのに、命を摘み取られた後、それでもふたりの月神が執着や想いを捨てきれずにいるのであれば――。
「そんなことが、可能なんですか!?」
半信半疑の内に問いかけたアラクセイトに、カーラトーニが難しい顔で「多分、可能なんだろうね」と応えた。
（どうしろっていうのーっっ!?）
それはまさに、アラクセイトの魂の叫びだった――。

4

「瘴気に目をつけられた……？」

カーラとともに、一行に戻ったアラクセイトは、まだ半ば混乱した頭を整理する意味も兼ねて、休憩のとき、ソラミイノに先程の出来事を説明し、相談を持ちかけた。

「そうらしいの……どうしよう、ミイノ？」

どうしたらいいと思う？

あのあと、カーラからは『お守り』として小さな革袋をもらったが――なかに入っていたのは青玉と緑柱石の子供石で、その価値を思うと目眩を覚えたのだが――どうにも不安で仕方がなかった。

なにしろ、こんなことは初めてなのだ。いまさら逃げられないと言われたものの、もしかしたら聡明な室長ならうまい方法を知ってはいないかと思ったのだ。

が――。

この数年というもの、同じ部屋で寝起きをしている友人は、こともなげに言ってくれたの

だ。

「どうしようって……カーラさまからお守り、いただいたんでしょう？　ならそんなに心配することはないわよ。だいたい、瘴気かどうかはともかく、タチの悪いのに目をつけられるなんてこと、珍しくもないじゃないの。心をしっかり持っておけば大丈夫だって」

軽ーく言われて、アラクセイトは泣きたくなった。

「ミイノはそうかもしれないけど……わたしは初めてなのよぉうっ！　どういうのが心をしっかり持つってことなのかもわからないのよぉう！　これから想矢湖に近づくってのに、あんな声がもっと大きくなってきたらって思うと、不安で仕方ないのよぉうっ！」

貰ったお守りのおかげか――それともほかの三人と合流したせいか――あれから声が聞こえることはないのだけれど、あの甘い声と甘い言葉を思い出すと、次も無事にすませられるという自信はなかった。そもそも今回だって、カーラのおかげで助かったのだ。

とてもとても、安心などできなかった。

だが、そんなアラクセイトの言葉――弱音大連発ともいう――に、ソラミイノは意外そうに目を瞠った。

「嘘でしょう？　あれだけイイタールの子供たち侍らせといて、ちょっかいかけられたことがないだなんて……そんなはず、ないじゃないの！」

本人、至極真面目な顔でそう言い切ったわけであるが、『侍らす』などという、普通の会話

には登場しにくい言葉を耳にしたアラクセイトはがっくりと脱力してしまった。

「……ミイノ、お願いだから、もう少し、言葉は選んで……」

火神イイタールは瘴の女神にとっては孫にあたる。

そして、『神』と呼ばれるのは、瘴の女神の孫までであり、次の世代は神ではなく精霊と呼ばれる。なんらかの制約あってのことなのか、それともあまりにも数が多すぎるせいなのか、どちらとは知れないが。

「だいたい、わたし見たこともないよ？　そんな……炎の精霊なんて……」

（そりゃあ、発火能力があるってことは、イイタールの子供たちに愛されてる証拠だって話は聞いたことあるけど……それを疑うつもりはないけど……でも、年々制御できなくなってるし、最近じゃ小火騒ぎやら爆発騒ぎしか起こしてないし……制御もできない子供のそばに、精霊たちがくっついてるとも思えないし……）

そんな、否定的なことを、つらつらと思いながら告げたアラクセイトの顔を、ソラミイノはそれこそ穴があくほどじーっくりと見つめてきた。

なんだか……居心地が悪かった。

「ミ、ミイノ……？」

「視たことがない……？　視えてない……？　それだけ炎の精霊侍らせといて!?」

「だ、だから、ミイノ。その侍らすって言葉、やめて……」

再びがっくりと脱力してしまったアラクセイトに、ソラミイノは幾分疑わしげな視線をそそいだ後、まるでようやく得心がいったとばかりの顔でうなずいた。

「……なるほど、ね」

ひどく気になる間の置き方だった。

（あのー、もしもしー、ミイノさん？　そこで自己完結してないで、どうかわかりやすい説明をいただきたいんですけどもー？）

そんなアラクセイトの心中を知ってか知らずか、しばし無言のまま、なにやら考えていたらしいソラミイノは、再び彼女に目を向けると、びしっと指をつきつけた。

「ずっと不思議だったのよ……アークほどの才能があれば、実技であれほどひどい点が取れるはずがないって。最初は向上心がないのかと思ったんだけど、一緒に寝起きするようになって、そうじゃないことはわかったから、なら、集中力が足りないのかとも思ったんだけど、実技以外じゃ、ちゃんと成績上げてるし……ほんと、どうなってるのかわからなかったんだけど……いまの話を聞いてわかったわ！　アーク、あなたは基礎の基礎ができてないのよっ！」

いきなりの断定口調に、アラクセイトは目を瞬かせた。

「ええっと……あのー……？」

つまり、それはどういうことなんでしょう？

上目遣いに室長を見つめる彼女に、砂金水晶の子供は、ようやく得心がいったとばかりに、

何度もうなずいていた。

「あの……ミイノ……？」

恐る恐る声をかけたアラクセイトに、しっかり者で頼りになる室長は、厳しい顔でこう宣うた。

「昔は暴発なんかさせたことなかったって、前に言ってたわよね？」

神殿に来る以前のことを持ち出され、彼女はこくこくとうなずいた——なんというか、ソラミイノの気迫がすごかったのだ。

「なのに、神殿に来てからは失敗つづき……ってことは、考えられるのはひとつだけだわ。多分アークは神殿に来る以前は、視えないまでも、イイタールの子供たちの気配を感じ取っていたんだわ。ところが神殿に来たことで……なにが原因かはわからないけれど、その感覚を閉ざしてしまったのね。実技の成績が振るわないのはそのせいよ。ほかに考えられないわ」

はっきりきっぱりと言い切るソラミイノに、反論するつもりはなかったが、肝心の『不調の理由』が見えなくて、ついアラクセイトは突っこんでしまった。

最初の相談から、ずいぶん話題が離れてしまったが、これはこれで気になったものだから、尋ねずにはいられなかったのだ。

「それで……わたしの実技関係全滅の理由って……なに？」

けれど、返ってきた答えを聞いた瞬間、「聞かなきゃよかった」と思ったのも事実だった。

「拗ねてんのよ」
「はあ？」
「だから、あなたのそばに集まってる精霊たち、せっかくそばにいるのに気づいてもくれないってことで、拗ねちゃってるの。気づいて構ってくれないんなら、気づいて構ってくれるようになるまで悪戯しちゃえーって感じなのかもね。うちで飼ってた猫が、よく似たようなことしてたわ。家族が忙しくて構ってもらえないと、わざと悪戯をして自分に注意が向くようにするのよね……」
大変非常にわかりやすい説明ではあったものの、アラクセイトはなにやら不穏なことを聞いたような気分になった。
（いいのかな……？　飼い猫と精霊を一緒くたに扱っちゃって……？）
答えは出ない。
けれど、はっきりしていることがひとつだけあった。
それは、ソラミイノがやる気ガンガンになったということだ。
「問題点がわかった以上、どんどん鍛えるわよー!?　なんと言ってもあなたにはきりきり頑張ってもらって、わたしの好敵手になってもらわなきゃならないんだから！　優等生なんてもうんざり！　わたしは競い合いながら高めあう相手が欲しいのよ！　問題点も見えたことだし方針は決まったわ！　さあ、頑張ってわたしの好敵手に育ってね」

ある意味、恐ろしいほどに自分勝手な台詞を吐いて、それでもこちらが逆らえない委員長の笑顔をたたえたソラミイノを前に、アラクセイトは言葉に詰まってしまった。

さあ、頑張れ、頑張れ、頑張れ、頑張れ――。

ソラミイノの笑顔には、拒めるような余地は残されていなかった。

「が、頑張り……ます」

そう答えながら、アラクセイトは違和感を覚えていた。

（えっと……最初に相談を持ちかけたのは、こういう話をしたかったからじゃなくて……確か……）

などとは思ったが、いまや後の祭りというものだった。

かくして彼女は初歩の初歩――世界に満ちる気を感じ取り、それがいかなる種類のものかを判別するための訓練を課せられることになったのだ。

彼女は、氷の檻に閉じこめられていた。

一流の職人が彫り刻んだがごとき氷の優美なる牢獄に、彼女は繋がれ、捕らわれていた。

極寒の地にて――けれど、氷も大気も、彼女を凍えさせはしない。

それらはただ、彼女を封じるだけなのだ……彼女の自由と、その能力を。

「いいかげんにして……」

毎日、一度、返事を聞くために訪れる青年に、彼女は息をつきながら告げた。

「こんなことをして、なんになるというの？　あなたは大切な友人よ、だからこの馬鹿馬鹿しい仕掛けをどうにかしてちょうだい。わかるでしょう、嫌いになんかなりたくないのよ、わたしは、あなたのことを……ネイド」

その想いは心底からのものだったから、彼女の薄紅色の瞳に翳りは走らない。

だが、その声は、言葉は、相手には伝わらないのだ。

「だめだよ、シオル」

青年は、歌うようにささやきかける。

「だって君は、一度わたしを拒んだじゃないか……君しか見えない。君しか想えない……だから一生ずっと一緒にいてほしいと頼んだときに……」

だから、こうするしかなかったのだよ——と、灰銀色の双眸に笑みをたたえ、青年は告げた。

「拒んだんじゃないわ、いまのところは考えられないからと言って、申し出を断っただけでしょう!?　あなたとは何度も仕事で組んだし、信用できるし、大切にも思ってるわ。だけど、一生をともにするかどうかとなれば、慎重にもなるわ。わたしはちゃんと、誠実に考えるから、

もう少し時間が欲しいと……そう言ったじゃないの」

そのとき、ネイドは確かにうなずき「わかった」と答えたのだ。

それでほっと安堵したのが……まずかったのか。

自らの性急さを詫び、どうかこれからも避けたりせずに普通につきあってほしいと言われ、もちろん否やはないと、一緒に——念のために言えば、それは互いのどちらの部屋でもない、神殿の喫茶室でのことだった——お茶を飲み、自分はちゃんと自室に戻り、夜着に着替えて、ちゃんと寝台に入った記憶がある。

ところが、次に目覚めたときには、この氷の檻に捕らわれていたのだ。

知らないうちに薬を盛られたか、あるいは術にはめられたかして、こんな場所まで連れて来られたのだろうとは思うが……にしても、ネイドのこの行為が、かなり計画的であったことだけは否めない。

「ネイド……何度も言うけれど、わたしはあなたを嫌いなわけじゃないし、嫌いにもなりたくないのよ」

シオルは必死に訴えかけるが、効果の有無は定かではない。

そんな彼女に、ネイドは困ったように首をかしげながら「だって、仕方ないんだよ」と答えた。

「だって、シオルは綺麗だし、みんながシオルを好きになるんだ……シオルはやさしいし、み

んなのことも好きになる……恋なんかじゃないってわかってても、見るのは辛い……辛いんだよ、シオルがみんなに微笑みかけるのは……だから、ここに連れて来たんだ。ここならわたし以外のだれもシオルを見ないし、シオルもわたし以外のだれのことも見ない。わたしだけのシオルにできる……」

子供の論理だ。

（おかしい……）

そんな青年の様子に、彼女は――シオルリイリは思った。

もともとネイド――ネイドアークは、単純で計算のできない性格の主だった。思い立ったが一直線、猪突猛進、後のことは起こった後で考える……。

そういう傾向の非常に強い性格の主であることはわかっていたから、このとんでもない騒ぎの最中にも、一所懸命、相手を説得すべく言葉を重ねてきたのだけれど。

元々の話は単純なのだ。

紅水晶の使徒として、相棒の月長石の使徒とともに、何度か修羅場をくぐり抜け……そういった経験を積んでいたある日、相棒である青年に求婚されてしまった。

好ましく思っていた相手だったけれど、まだ答えになるものが心のなかに見つからなかったから、一応断った。

相手が単純な性格の主で、しかもかなり思いこみが激しいこともわかっていて、だからこれ

からのつきあいには多少の用心や、教え諭す『注意』が必要だろうなあ……などと思っていた矢先の、この騒ぎだ。

極端から極端に走る青年の性格については、よく、よーく、わかっていた。

それでも腑に落ちない。

なぜ、彼がこの地を選んで、自分を封じるための檻を作ったのか――。

シオルリイリは必死に考える。

そして、ひとつの答えを見つけた。

豊珠は最も太陽の恵みから遠い地――なのだ。

炎の気配から、最も縁遠い場所。

炎に克つ『水』の気を纏う場所。

そして、なにより消えた月神ふたりに通じる『聖石』に選ばれた……彼。

月長石の使徒に選ばれたネイドが、どんな策略を唆されたのか――。

瘴の女神によって消滅させられたふたりの月神によって――。

(まさか……そんな……!?)

信じたくない。

決して、絶対に。

けれど、微笑むネイドの背後に広がる煙にも似た気配に、シオルリイリは自身の感じた懸念

が現実のものであったのだと認めざるを得なくなったのだ。
瘴気は確実に、ネイドを蝕んでいた。
彼の望みを受け入れ、彼の意識を受け入れ……そして、彼の意識を浸食して、かつて月神の意識の一部であったものは、さらに広がろうとしていたのである。
黴さながらに、じわじわと――。
たまらずに、シオルリイリは叫んだ。
「ネイド！」
と――。
けれど、事態は変わらず、彼もまた意識を向き変えようとはしなかった。
「ネイド！」
絶望のなかで、シオルリイリは叫んだ――。

5

遠くで盛大な爆音が響いた。
その音を聞きながら、ため息をつく人物がふたり――。
美女と美少女――カーラトーニとソラミイノだった。
「また制御に失敗したようだね……」
拾ってきた薪から、水分を取り除きながらカーラがつぶやくと、
「そのようですね」
とうなずいて、ソラミイノがそれに火を点ける。
雪をいっぱいに詰めた鍋をそれにかけ、ふたりは干し肉やら乾燥ハーブ、岩塩その他を放りこみながら、ふたたび同時に息をついた。
「……できないはずはないんだけどねえ……」
「ええ」
と、ソラミイノも肩を落とす。

「なまなかな水神の加護じゃ太刀打ちできないぐらいには強力な加護を受けてるんだけどねえ……」

水神と海神の加護をたっぷりと得ているカーラの言葉に、「まったくです」とソラミイノもつぶやいた。

普通、水と火では、水が克つと言われている。

だから、水気の強い場所や事態に、火気を帯びた人間を連れていっても、あまり意味はないのだ……水は火に克つのだから。

ただし、両者の受ける加護に差異があれば話は別だ。焚き火の炎には、バケツ一杯の水があればいい。だが、家一軒を包みこむような炎を前にして、バケツ一杯の水に、どれほどの効果があるだろう。

そういうことだ。

ただし、いま現在抱えている問題は、恐らく尋常ならざる火気を宿した人物――アラクセイトだ――が、ほとんどそれを制御できずにいるということだ……。

気の流れさえ満足に読み解けずにいるのだから……前途は多難だ。

ふうう、と大きく息を洩らして、ソラミイノは実のところ、ずっと気にかかっていた問いを口に出した。

本当は機会さえあれば、最初に聞いておきたいと思っていたことだった。

「あの……カーラさま。カーラさまは黒珊瑚の使徒さまということは、水の加護を受けたお方なんですよね……？」

「ああ」

と、カーラはうなずいた。

「海の宮の年、海の宮の月、水の宮の日の水の宮の刻に生まれた上に黒珊瑚を抱いて生まれてきたっていうんだから、水の加護しか受けていないね」

珊瑚はそもそも海の宝石――更に、色彩的に黒や灰色、あるいは透明といったものは水気を象徴するものだ。

つまりカーラという女性は、人間では稀有なまでの水の加護を得て生まれてきた存在だということだ――恐らく、ちょっとやそっとの水の加護を得た人間などでは太刀打ちできないほどの。

「想矢湖が凍ったって話を聞いてびっくりしたんですけど……でも、あの不凍湖が凍ったってことは、もしかしたら瘴気の原因になった存在って、水に近しい……っていうか、水の加護を得てるんじゃないかって思ったんですけど……」

恐る恐る尋ねたソラミイノに、カーラはあっさりと「うん、そうだよ」と答えた。

「じゃあ……じゃあ、同じ水の加護を得た相手でも、カーラさまにとって、その存在が格下なら……その、わたしたちを連れてくる必要なんかなかったわけじゃないかと……ちょっと、ち

らっと、そんなこと思っちゃったんですけど……？」

いくら発火能力があるからと言って、自分のそれは……認めるのは癪ではあるけれど、あまり大したものではない。

対して、アラクセイトのそれは非常に強大なのだけれど、制御が皆目できないという代物なのだ。

それなのに、わざわざ他大陸から呼ばれるような使徒であるカーラとセイが、自分たちふたりを同行させたことには、いったいどんな意味があるのか……。

実のところ、ソラミイノにはふたつばかり心当たりがあった。

ひとつは、彼女の身内に係わることで、彼女の一族が、代々豊珠の各神殿において重職を占めているという事実だ。一族にさらに箔をつけるために、重大な事件に一族のひとりを同行させたのではないか——ということ。

この一件がうまく行けば、たとえ同行者のひとりに過ぎないにしても、他大陸から使徒を招かざるを得ないような事態を片づけた一員として、ソラミイノの名と存在を、一族は神殿内部に広めることができる。

ソラミイノ自身にとっては非常に不本意なことだったが、一族の面々の性格を鑑みるだに、あり得ないとは断じきれないあたりが……虚しく悲しい。

そして、もうひとつの心当たりといえば……。

今回同行することになったもうひとりの少女――アラクセイトのことだった。
彼女には、類い稀な発火能力がある。
だが、それを制御できずにいる。
このまま、神殿における試験を受けた場合、まず間違いなく使徒に選ばれることはないぐらいには……彼女の実技面の成績は芳しくない。
それが元々であったのなら、神殿の面々も、気にも止めなかったろう。
けれど、ソラミイノは知っている。
アラクセイトは神殿に入って間もないころは、ソラミイノが歯噛みするほどに、実技でも学識でも卓抜した能力の持ち主だったのだ――あの日までは。
それっきり、彼女は変わってしまった。
神殿でも上層部に位置する者は、忘れていないに違いない……あのころの、アラクセイトのあざやかな力！
（だから……もしかしたら神殿は……）
荒療治を……アラクセイトの命すらかけて、やるつもりでいるのではないのか――？
だから、今回の件に、彼女を放りこんだのではないのか――？
それを思うと、胃のあたりに石が詰まったような重苦しい気分になる。
あくまでそれは自分の推論にすぎないと思っていても……やはり重苦しいのだ。

「ソラミイノ？」

気づかうような声をかけられて初めて、彼女は自分が暗い考えに没頭していたことに気づいた。

「あ、すみません」

なにを尋ねようとしていたんだっけ？

慌てて思考を追おうとした彼女の白金の髪に、ふわりと優しく触れてくる指先があった。

「うん。まあ、いろいろ考えることはあるんだろうけどね、考えすぎないようにするこった」

安心させるようにそう告げた後、カーラはため息まじりに愚痴めいたことを口にし始めた。

「まあねえ……あんたの言うとおり、同じ水の加護を得た使徒同士っつったって、あいつとあたしじゃ比較になんないのは確かなんだよね。早い話、あれを片づけるだけだってんなら、本当にあんたたちを巻きこむ必要なんざなかったんだよ。いくらあっちが喪月神の力を借りてたってねえ、一気にカタつけちまえば影響だのなんだのと気にする必要ないんだしねえ……」

そう言うくせに、カーラは気が重そうにため息をついた。

「本音を言えば、あんな馬鹿がどうなろうとあたしとしちゃ知ったことじゃないんだけどね……厄介なことに、あいつ、人質を取ってんだよ。というか、相棒に恋慕したあげく、独占するためにこんな馬鹿なことしでかしてくれたわけでね。しかも具合の悪いことに、その相棒っていうのが紅水晶の使徒でね……」

紅水晶は火気に通じる石だ——水気には弱い。

「つまり、あまり水の力を多用するわけにはいかない……と？」

「そういうことだね」

カーラの答えに、ソラミイノはため息をついた。

そういう事情なら、確かに得意の水の力でがんがんいくわけにはいかないだろう。あるいは自分たちは、その人質にされている使徒の『お守り』代わりかもしれない。

「でも、そういうことなら、土の宮の加護を得てらっしゃる方に協力を仰ぐことはできなかったのですか？」

黄水晶、煙水晶、金鋼玉、黄玉などなど——土気の守護を持つ石も数多い。

金鋼玉や黄玉を抱いて生まれてきた者はまず滅多にはいないが、黄水晶や煙水晶の使徒ならそれほど珍しくはないはずだった。

なにより土は水に克つ。

そういう事情なら、そうした聖石の使徒に頼むのが順当に思えた。

「もっともな話なんだけどね、そうしちまうと、今度はあたしの力まで殺がれる恐れが出てくるんだよねえ。あの娘を助けるために青か紫の聖石の使徒、連れてこようかとも思ったんだけど、どういうわけかあたしの知り合いには男の使徒しかいなくてねえ。独占欲の塊のとこに、まさか野郎を連れていくわけにはいかないだろう？」

それもそうだと納得しながら、それでもソラミイノは思わず顔をしかめた。
「なんか……はた迷惑なひとですね、その独占欲の化身……」
「……まあ、シオルが魅力的すぎるのが悪いって言い方もできるけどね。なんにせよ、思いどおりにならないからって、相手の意思無視してかっ攫うなんて、真っ当な人間のすることじゃない。挙げ句に使徒の身で、瘴の女神を目覚めさせるような真似を働くとはね」
「万死に値しますね」
そう言ったソラミイノに、カーラは意外にもかぶりをふった。
「いいや？　殺しちまったらこの先、こき使えないからね。瀕死の状態ぐらいで、なんとか死なせないように頑張るさ。喪月神の瘴気を知覚できるやつは貴重だしね」
（人権のかけらも相手に認めてないように聞こえるのは気のせいかしら……？　なんだか少しだけ、そのひとが気の毒に思えてきたわ……）
などとソラミイノがちらりと考えた瞬間、またしても爆音が響きわたった。
「……けど、ちょっと大変そうかねえ……」
カーラのぽつりと洩らした言葉にうなずきながら、ソラミイノはため息まじりにつぶやいた。
「……以前は、あんなじゃなかったんですけどねえ……」
「以前？」

カーラの意外そうな顔に、ソラミイノはおや、と思った。
てっきりそのあたりの事情は、神殿の上層部が伝えていたと思いこんでいたのだが、どうやらそうではないらしい。
「ええ、アークは神殿に入ってすぐのころは、すごく成績良かったんです。ただ、一度神隠しにあって以来……その間のことは、本人も覚えてないらしいんですけど、めっきり実技がダメになっちゃって……」
「神隠しだって……？」
「あ、いえ……突然姿が見えなくなって、三日後に戻ってきたものですから、神隠しにでもあってたのかって話でそういう風に……」
カーラの真剣な面持ちを、意外に思いながらそうつづけたソラミイノは、次の瞬間目を瞠った。
「まずいかもしれない……」
そうつぶやいて、カーラがすくっと立ち上がったのだ。
だが、彼女がその場を離れることはなかった——その必要がなかったのだ。
爆音の聞こえた方角から、セイ——セイタマールがひとりで戻ってきた。
そして、彼は告げたのだ。
アラクセイトが『水』に攫われてしまったことを——。

ようやく手に入れた宝物を、奪いにやってくるやつらがいる。
ネイドアークは敏感にもその気配を察知していた。
気配は全部で四人――うちふたりは、彼も見知った相手だった。
ともすれば、相棒である自分以上にシオルリイリと親しくする目障りなふたり――シオルリイリの妹の恩人だと聞いたが、最初からあまり好意は持てなかった。自分以上にシオルリイリと親しい人間など、彼にとっては邪魔でしかなかったのだ。
カーラトーニとセイタマール――黒珊瑚と血赤珊瑚に選ばれた使徒。
普段であれば、決して自分のかなう相手ではない。
だからこそ、尚更に目障りだった。
（けれど、いまは違う……）
自分は強大な力を得たのだ。
もう、あのふたりを恐れる必要はない。現に、自分に力を貸してくれた『声』も、彼らに注意する必要はないと教えてくれた。
ただ、ネイドにとって不思議だったのは、その声が、あのふたりよりずっと小さく不安定な

存在を気にかけたことだ。

ふたりとも、火の宮の加護を持つ小娘だった。

そのうちでも特に出来のよろしくないほうを、声が気にしたのがよくわからない。

それどころか、声は小娘を『隔離』したほうがいいとまで言いだした。

得心がいかなかったが、ネイドは取り敢えず声の勧めに従った。声の言う通りにしてきて、これまで間違いはなかったからだ。

声に導かれるまま、彼は水を操り、火の宮生まれの小娘を攫った。水気の化身であるカーラがそばにいるときは、さすがに手出しできなかったが、セイタマールが相手ならさして難しくはなかった。血赤珊瑚の使徒は、火の力も併せ持つがゆえに、水の力はそれほどではなかったからだ。

攫った後は簡単だった。

声の告げる通り、ネイドは氷の檻を作ればよかったのだから——シオルを封じた檻ほどに繊細なものを作る必要はなかった。

要は娘の火気を封じればいいだけなのだから……冷気から守ってやるつもりなど、ネイドにはなかった。凍死しようがかまわない——声は隔離を指示しただけなのだから。

うまくいった。

声が与えてくれた力のおかげで、誰にも負ける気はしない。

以前は畏怖すら覚えた、ふたりの珊瑚の使徒すら、もはや脅威とは感じない。
素晴らしい……素晴らしい力を得たのだ、自分は。
もはや恐れるものはなにもない。
与えられた力と成果の素晴らしさゆえに、ネイドアークはだから、まだ気づかない。
自分が声によって操られていることに……声の正体を不審がることさえできないほどに、自らが声の傀儡と化していることに。
気づけぬままに、彼は歪んだ幸福に酔っていた。
瘴気は内側から、彼をじわじわと蝕みつづけているというのに……。

6

それは個にして全、全にして個なる意識――。
それは、強大なる歪みの化身。
バルヴァローズを引き裂き、滅ぼすほどの力そのもの。
そしてそれは、いまだ自由にはなり得ずにいる虜囚。
喪月神の瘴気と呼ばれるそれには、確かに意志があったのだ。

「意識を澄ませて、イイタールの子供たちの気配を感じ取るんだ……」
セイタマールの言葉にうなずきながら、内心冷や汗だらだらだったりするアラクセイトだった。
（ううう～、そうは言われても……）

精神を集中する訓練は積んでいる。
平常心なくして、能力の制御はままならない。だから神殿でも瞑想は重要視されている。アラクセイト自身、それを苦手に思ってはいない。
すとんと心を落ちつかせる。
それはどちらかと言えば得意ですらある。意識を周囲に同調させるのは、さほど難しいことではないし、そうしていると心が世界そのものと溶け合ったような感じがして安心できるのだ……とても、心地よい。
ただ、いいのはここまでで、その先にどうしても進めない。
『そこまで出来て、どうして感じ取れないわけ!?』
とは、ソラミイノの言で、アラクセイトとしては、どうしてと問われても答えられない。
本当に、自分でもわからないのだが、周囲と同調するまではすんなり行くのに、その先の一歩を踏み出そうとすると、いつもつまずいてしまうのだ。
『気負いすぎだ』
とは、カーラから受けた注意だ。
気負わずに、耳をすますように——。
受けたアドバイス通りにしようとするのだけれど、どうしてもうまくいかない。
なぜだか突然、巨大な石壁が目の前に出現したような圧迫感を覚えてしまうのだ。

よじ登って乗り越えるか、壊して向こう側に行くか——どちらかしかないような気がして、そうなると緊張してしまい、自然体が崩れてしまう。

「固くなる必要はないよ。あともう一歩なんだから……イイタールの子供たちがきみのことを大好きなのははっきりしてるんだからね」

セイタマールは意外なことに、ほかのふたりに比べてもっともやさしい教師だった。

カーラとソラミイノはふたりとも、非常に敏感な感性の持ち主であるためか、高水準を注文が多いのだ。それに比べて、血赤珊瑚の使徒である青年は、相棒の美女から『鈍い、鈍いよ、鈍すぎる！』とけなされつづけてきたとの話で——なんでも相反する火気と水気を併せ持つせいか、感覚の部分で鋭敏さに欠けているのだそうだ——そのぶん、すんなりとはコツを摑めない相手にも寛容だった。

さんざんカーラとソラミイノから「ぼけ、のろま、鈍ちん！」と罵られつづける日々を送っているアラクセイトにとって、彼と過ごす修行の時間は、涙が出るほど嬉しく、けれど同時に自らの情けなさを思い知らされるものだった。

（でも、でも、できないーっっ！）

どうしても、彼らの言うところの『あと一歩』が踏み出せないのだ。

（カーラさまもミイノもセイさまも……わたしのそばにイイタールの子供たちがいて、わたしに好意を抱いてくれてるって断言してるのに……なんで、肝心のわたしにだけわからないの…

…!?　感じ取れるものなら、わたしだって感じたいのに……だって、それができたら、発火能力が暴走したり、暴発したり、きっと、そういうことなくなるに違いないってわかってるのにいいっ!?)

努力していないわけではない。

これ以上はないぐらいに頑張っているつもりなのだ。

けれど、足が竦んでしまう。あと一歩が踏み出せない。

(どうして……っ!?)

自問した瞬間、脳裏に過るなにかがあった。

その感覚に、アラクセイトは確信した。

その過るものこそが、答えか、それに最も近いなにかだと。

(捕まえなくちゃ……!)

全身全霊をかけて、彼女はそれを追った。

一所懸命にそれを追いかけ、手をのばした。

触れる。

それは、ほんの一瞬の出来事。

けれど、確かに触れたその一瞬で、わかってしまったことがあった。

どくん、と胸が大きく脈打った。

彼女が感じたそれは——触れた瞬間、衝撃のあまり目を瞠ってしまったその元凶は——。

（怖い……見たくない！）

ただ純粋な恐怖と拒絶感だった！

（なに……!?　なんで、こんなに怖いの!?　なんで、こんなに見たくないの……!?）

わからない。

思い当たるものはない。

けれども、全身を縛りつけるこの恐ろしさ、この嫌悪感、そして拒絶感は真実だった。

（な、なんで……!?）

困惑しきった彼女は、だから周囲の変化に気づくのが遅れた。

「アラクセイト！」

セイタマールの声に、ようやく意識を現実に引き戻したアラクセイトは、すでに手遅れとなった事態を目の当たりにし、目を瞠るのみだった。

大気中の水分までも、瞬時に凍りつかせるような冷気のなかで、彼女のそばにあった雪が、まるで生き物でもあるかのように融け、うねり、彼女を飲みこもうとしていた。

それは、さながら水の蛇——。

巨大な顎が自分を捕らえる。

否応もない力で引きずりこまれる。



「アラクセイト！」
必死に自分の名を呼び、手を伸ばしてくれるひとがいた。
（セイさま……）
その手に必死に手を伸ばしたけれど……届かない。
息ができない。
苦しい。
水に飲みこまれてしまう。口から、鼻から、水だけが体内に入りこんでくる。
息が、できない――。
真っ黒な世界が、アラクセイトの意識を染め抜こうとしていた。
（苦しい……）
思ったきり、彼女は封印された過去の闇に飲みこまれた。
死ぬ――と、その時、彼女は確信していた……。

「このぼけ、のろま、鈍ちん！」
カーラの、相棒である青年に対する非難、怒号は容赦のかけらもないものだった。

これが別の機会であれば、少なからぬ同情を覚えただろうなあ……などと思ったソラミイノだったが、目に見える結果が結果だっただけに、血赤珊瑚の使徒である青年に対するそれはかなり冷やかなものとなった。

つまり、目の前で修行中の弟子を攫われた間抜けを相手に、かけらとて同情をかける必要なしと見なしたわけである。

「あたしも間抜けだったけどねっ！」

そう叫ぶように言った後、カーラは息を整えた。

そこに、無視しがたいなにかを感じ取り、ソラミイノは思わず問いかけた。

「カーラさま？」

黒珊瑚の使徒は、きり、と唇を噛みしめた。

呻くように、つぶやいた。

「まさか、『神隠し』になんてあってただなんて……思いもしなかった……」

思いもかけぬ……というか、なにを言われているのかもわからなくて、ソラミイノは首をかしげてしまった。

「カーラさま？」

「あいつらの……喪月神のよくやる手口なんだよ。才能のある……あいつらが脅威を覚える才能のある子供を隙を突いて攫って抹殺する……ってね。アラクセイトが神隠しにあって、その

間のことを覚えてないんだっていうんなら……まず、間違いない。あいつらはあの子を一度攫って殺そうとしたんだ。だけど、あの子は無事に生き延びた……奇跡みたいなもんだ。けど、あんまり酷いものを見せられたか味わわされたかして、あの子は記憶ごと、感覚の一部まで封じこめてしまったんだ。あの子が全感性を外に広げるのを怖がってたのはそのせいだったんだ……ちくしょう！　当然だよ。あいつらは、あの子がそうしたら、否応なく視える怖いものや恐ろしいものや醜いものを見せつけてたんだ！　あたしは……あたしは、なんて馬鹿な真似をしちまったんだ!?　そうまでしてやつらから逃げ延びたあの子を、むざむざこんな場所に連れこむような真似をしちまって……！」

ぎりぎりと、歯噛みする音が聞こえてこないことこそ不思議に思えるようなカーラの形相を前にして、ソラミイノは自身の疑問を口にした。

「喪月神……って、カーラさま？　瘴の女神のお力で、サラムトーリ神を除くおふたりは、砕かれ形もなくなったと聞いておりますが？」

言葉には力が宿る――それを言霊と呼ぶ。

そして、名前は最強の言霊を宿す。神々の名前となれば尚更に。

だから、バルヴァローズの民は封じられた神の名を口にはしない。できない。

それが言霊の宿す力によって、相手を刺激することを知っているからだ。

たとえ――それが滅ぼされたと信じられている存在であったとしても。

カーラは苦い笑みを浮かべた。
「確かに、ふたりの月神は喪われた……形代はすでになく、残る瘴気も女神の腕に抱かれて浄化を待つのみだ」
けどね、と彼女は続けた。
「宿る器を無くしたせいで、うつろいやすくはなっているけれど……その執着は生きてるんだ。あいつらの望みは目覚め――瘴の女神の腕からの解放だ。女神が目覚めれば、やつらもまた復活する。あいつらは瘴の女神を目覚めさせるために人間を刺激すると同時に、自分たちの邪魔となる存在を効率よく封じこめようとしてきたんだよ」
そのことは、教えられていた。
だから、知っていたはずなのに――と、カーラは悔しげに唇を噛みしめた。
「だのに……こんなことになるだなんて……！」
「大丈夫です！」
ソラミイノはなぜかその瞬間、そう叫んでしまっていた。
根拠もなにもない。
けれど、そう叫ばずにはいられなかったのだ。
「大丈夫……です！　アークは負けません。わたしが負けさせません。なにがあっても絶対に、わたしがあの子に負けさせません！」

きっぱり、はっきり、しっかりと言い切って、ソラミイノはカーラの顔を正面から見つめた。

揶揄するようにカーラが笑った。

「絶対に？」

「絶対に」

「必ず？」

「必ず」

誓います、とソラミイノは告げた。

答えた。

だって、自分は知っている。

あの神隠しの前に、アラクセイトが放っていたあざやかすぎるほどの光輝を。

そして、再びあれを目にしたいと願っている自分自身を。

あの光輝を再び目にすることができるのならば——。

あの光輝のために、一かけらなりとも力を尽くすことができるのならば——。

（迷い、はないわ）

と、ソラミイノは思った。

心からの思いだった。

それは歓喜していた。
かつて一度取り逃がしてしまった危険な存在を、ふたたび手に入れることができたからだ。
浄化の焔を統べ、操る者。
それにとって目障りこの上ない存在は、以前の力を忘れたまま、他愛もなくその手に落ちた。
浄化の力を纏う者は、多くはないが稀少というわけではない。
だが、それが目障りに思うほどに力に溢れた存在は、数えるほどしかいない。
実のところ、近づきつつある珊瑚に選ばれたふたりも、そのなかに入っている。彼らを抹殺するために、それは愚かな男を唆したのだ。
恋と独占欲に支配された男は、呆気ないほど簡単に陥ちた。
後は男にとって都合のいい夢をささやき、方法を示唆してやるだけで、たやすくそれの傀儡となった。
男はなぜ、舞台を世界最北の大陸――豊珠を選んだのかもわかっていない。
南洋の恵みである珊瑚に宿る力を殺ぐために、それが教示した事実さえ忘れている。

豊珠は世界中で一番宝石を産出する大陸であり、最も多くの使徒を輩出することで知られている。だが同時に、豊珠では決して生まれない使徒がいる。

珊瑚と真珠の使徒だ。

それゆえに、このふたつの聖石を抱いて生まれてきた者は、豊珠にあってはその能力を半減される。どれほど稀有にして強大な力を持っておろうとも、彼らだけは、この地にあっては十全に力をふるうことができないのだ。

だからそれは、ここを選んだ。

かつて取り逃がした気配に気づいたのは偶然だった。

気づいた瞬間、それは恐怖した。

一度その気配の主を取り逃がした際、その子供から受けた痛手を思い出したのだ。

すさまじい猛火だった。

それの一部を焼き尽くした焔は、いまでも痛みと恐れを、それに忘れさせてはくれない。焼かれた部分を個として切り捨てなければ、傷はもっと広がっていただろう。

恐ろしい、浄化の焔——それを操る子供が、抹殺するために呼び寄せたふたりと行動をともにしていると知ったとき、一度は計画を断念しかけたほどだ。

注意深く、用心深く、それは子供を観察しはじめた。

同じ轍を踏むわけにはいかなかった。

決して気取られぬよう、それは子供を見つめつづけた。
そうしているうちに、意外なことに気がついた。
イイタールの娘は、以前からは考えられぬほど、無力で鈍感になっていた。
イイタールの子供は変わらず娘のそばにいるというのに、彼らを感じ取ることもできない様子なのだ。
こちらを油断させるための罠かとも思ったが、見ているうちに、どうやらそうではないらしいことがわかってきた。
なにが理由かはわからぬが、イイタールの娘は、その稀有な力のほとんどを忘れ去ったとしか思えなかった。
それが歓喜を覚えたのはそのときだった。
（今度こそ……）
あの恐ろしい娘を殺せるかもしれない。
そう思うだけでそれは、興奮のあまりぶるぶると震えた。
（イイタールの娘を殺す……）
甘美な思いを噛みしめながら、それは傀儡にささやきかけた。
これは絶対に必要なことなのだからと……疑う必要などないのだと、これまで通り、自分の告げる通りにすれば、お前の望みはかなうのだと……。

はたして男はやってのけた。

イイタールの娘は、すでに手のなかだ。

（殺してしまおう、殺してしまおう、殺してしまおう……が、……す前に……）

なにか、引っ掛かるものを覚えたが、それはすぐに忘れてしまった。

傀儡となすため、ネイドアークの意識と同調しているがために、彼の性格の影響を一部受けていることを、それは見落としていた。

7

夢を、見た。
ずっと忘れていた、忘れていたかった昔の――夢を。
（見たくない……思い出したく……ないっ！）
そう思うのに、夢は正確にあのときの記憶を再現する。
（見たくない……っ！）
アラクセイトは叫んだが、それは声にはならず、そして夢はつづくのだ。

その夜、空には月がなかった。
いや、限られた一刻ほど、月が姿を隠したのだ。
触（しょく）の夜――。

月神サラムトーリの加護の届かぬあの夜に、十一歳だったアラクセイトは攫われた——人間ならぬ、なにか恐ろしいものに。

なにが起こったのか、わからなかった。

ただ本能的な恐怖を覚えた。

息苦しくて、指先から少しずつ、熱が奪われていくような錯覚に見舞われた。

いや、それは錯覚などではなく、現実に彼女の体温を奪いとっていったのだ。まるで水につけた指先から熱が失われていくように……けれど、その感触は水などではなかった。風とも違う。

あえて例えるなら湯気のようなものか。

だがそれは現実の湯気などとは違い、毒を孕んでいた。

それを感じるたびに、肌がちりちりと痛んだ。気づかぬうちに火傷していくのにも似て、なんとも奇妙で気味の悪い感じだった。

周囲には明かりひとつなかった。

深い、深い闇がどこまでも広がっていた。

明かりを求めて、アラクセイトはイイタールの子供たちを呼んだ。

いつもそばにいてくれるはずの炎の子供たちは、けれどそのとき、そばにいなかった。いや、そばにはいたのだ。

けれど、目に見えない膜のようなものがアラクセイトを包みこんでいたために、近くにいたのに隔てられていたのだ。
膜が邪魔だとアラクセイトは思った。
膜さえなければ、明かりをつけられるのに――そう思った瞬間、彼女の意識を読んだかのように、膜が狭まってきた。
『いやだ……なに……!?』
思わず手をのばしかけたアラクセイトの指先が、それに触れた。
その瞬間、全身を言いようのない恐怖と嫌悪が走った。
先程から自分の体温を徐々に奪い取っていく湯気のようなもの――それの凝縮したものが膜の正体だと感じ取ったのだ。
『やだ……やだ、やだっ！』
その膜がイヤだった。
触れたくなかった。破いてしまいたかった。
けれど、膜はすこしずつ、小さくなっていく。
体温は奪われつづけ、息も少しずつ苦しくなってきた。
アラクセイトが弱気になっていくのを面白がるように、膜は彼女の体すれすれまで縮んだかと思えば、急に広がったりもした。

彼女が一喜一憂するさまを、楽しんでいるとしか思えなかった。

アラクセイトは気丈な子供だったが、時間の流れも感じられない、漆黒の闇のなかにただひとりきりの状態で、いつまでも気丈ではいられなかった。平常心を保とうとも、体温を奪われつづけた体にはうまく力が入らず、眠気にさらわれないようにするのが精一杯だった。

(怖い……イヤだ、なに、これは……)

自問しても答えは出ない。

そんななかで、彼女はただひとつだけ確信していることがあった。

眠っては、いけない。

眠ったら、最後なのだと。

熱とともに体力も奪われていく。目を開けているのも辛くなったころ、アラクセイトの頑張りを嘲笑するかのように、膜が別のことを仕掛けてきた。

恐ろしい幻を、彼女に見せつけたのだ。

最初アラクセイトは、自分が堪えきれずに眠ってしまったせいで悪夢にさらされたのかと思った。膜に完全に飲みこまれ、じわじわと殺されようとしているのか、と。

だがそうではなかった。彼女は試しに自分の手の甲に爪をたてた。熱の失せた両手の感覚は鈍っていたが、血が出るまで掻きむしったら、じんわりと痛みを感じた。

(痛い……だから、夢じゃない……)

一所懸命、そう自分に言い聞かせ、彼女は幻を睨みつけた。
それは蛇や虫の姿をとっては、彼女に近づいてくる。
反射的に振り払おうとすると、とたんにあの痺れとも痛みともつかない感覚が襲ってくるのだ……しばらくそのことを考えて、彼女はひとつの結論にたどりついた。
（多分……取ってる姿は幻なんだけど、正体はアレなんだわ……あの膜を作ってる湯気みたいなモノ……）
そして恐らく、幻そのものは自分の意識から読み取ったものを利用しているのだ。
そうでなければ、自分が――図鑑や標本でとはいえ――見知った蛇や虫ばかりが襲ってくるのはおかしい。
ぞっとするほどあざやかな、薄緑色の羽をした、両掌ほどもある巨大な蛾や、油をぬったようなぬめぬめと光る黒く長い体に数えきれないほどの足のついた虫――それらの標本を目にしたとき、アラクセイトはそれが実際に動くさまを想像して身震いしたのだ。
虫たちの動きは、彼女の想像した通りのものだった。
間違いない。明らかに自分を嬲るために、アレはこの幻を見せているのだ。
（あれは幻なんだから……必要以上に構っちゃだめ。わたしが疲れ果てるのを、アレは待ってるに違いないんだから……）
本当は目を瞑ってしまいたかった。

けれど、この疲れきった状態で、目を閉じる勇気はなかった。
視覚という刺激があるおかげで——非常に気持ち悪く、不快なものだったけれど——なんとか眠らずにいられるのだ。目を閉じたら……自分はもう、睡魔に抗えないかもしれない。
（けれど、いつまで我慢すればいいんだろう……!?）
訓練だというのなら、我慢できる。
訓練には終わりがあるのだから。終わりの声を聞くまで耐えればいいだけの話なのだから。
けれど、これは……。
本当に終わりはくるのか。我慢したところで無駄ではないのか。自分がこんな場所に連れてこられたことを、ほかのひとたちは気づいているのだろうか。彼らはちゃんと自分を見つけてくれるだろうか……。
一度覚えた不安は、みるみる大きく膨らんでいった。
（誰も気づいてなかったら……？　たとえ気づいてても、捜してくれなかったら？　捜してくれてても、ここにいるのを見つけてもらえなかったら……？　もしも……間に合わなかったら……もしも、もしも、もしも……）
大きく育ちすぎた不安に、長時間極度の緊張を強いられた心は耐えられなかった。
突然に、その瞬間は訪れた。
『出して……ここから出してっ！　イヤよ、ここはイヤっ！　出してっ！　わたしをここから

……誰か！　誰か、出してちょうだいっ！』

恐慌状態に陥ったアラクセイトは、叫びながら駆けだした。

深闇のなかを――目指すべき標すらなく。

もしも彼女を攫った人間ならぬものが、そのままに彼女の自滅していくさまを見守っていたならば、彼女は確実に命を落としたことだろう。

だが、それは予想外に長引いた事態に焦りを覚えていた。

万が一にも失敗すまいとの思いが、逆効果を生んだのだと言えるかもしれない。

それはとどめとばかりに、瘴気の蛇にアラクセイトの喉元を襲わせたのだ。

毒の滴る牙が、幼いアラクセイトの喉に埋まった。

その刹那――そこから流れこんできた、彼女の意識を読み取ってつくったのではない、人間には不可視の真実の光景が彼女の脳裏に浮かび上がった。

『きゃあああっっっ！』

アラクセイトが叫ぶのと同時に、彼女の本能がそれを払いのける力を呼び起こした。

なにが起こったのか、彼女自身は理解できずにいたのだけれど……。

「きゃあああっっっ！」

自らの放った悲鳴で目覚めたアラクセイトは、すぐにはそこがどこなのか、なぜ自分がそこにいるのかわからなかった。

夢のつづきかとも思ったのだけれど、周囲は淡い光に包まれている。あの夢のようなどこまでも底の知れぬ闇のなかではなかった。

ただ、手足の感覚が鈍くなっていたのは、夢と同じだった。

（どうして……？）

のろのろと起き上がり、自らの両手を目にして、彼女はやっとその理由を知った。

両手は黒っぽい紫に変色しかけていた。

そっと両頬にあてると、氷のように冷たかった。

幸い凍傷にはなっていなかったが、指先の感覚が戻るまで、ずいぶんと時間がかかった。

そうしてようやく、彼女は自分が氷の檻に閉じこめられていることに気づいた。

ただの氷ではない。

（ああ、なるほど）

と、苦虫を噛み潰したような顔で、アラクセイトは納得した。

ずっと思い出しもしなかった、あの時のことを、夢に見たのは偶然ではなかったのだ。

なぜなら、ここに充満する気配は、あの夜自分を包みこみ、じわじわと嬲り殺そうとしたそ

れと同じものだったのだから！

思い出さずにすむものならば、決して思い出したくなどなかった。

あの恐怖、あの嫌悪、あの絶望――！

二度とあんなものに近づきたくない。

二度とあんなものを感じたくない。

だから、アラクセイトは意識と感覚の一部を自ら封じたのだ――あんなモノと関わり合わずにすませるために。

能力を封じ、気配を封じ――そうすることで、あの恐ろしくもおぞましい存在から身を隠そうとしたのだ。

だが、それはほとんど意味を持たない行為だったのだ。

現実にいま、アレは自分を再び見つけ、そうして同じように殺そうとしているのだから。対する自分と言えば、力のほとんどをずっと封じつづけてきたせいで、実力的にはあのころからほとんど進歩していないときた。

（絶対、忘れたりしないで日々努力と精進を重ねてたほうが、実になってたはず……よねえ）

との感想は、あくまで思い出し、さらにこの状況に置かれたからこそ出てくるもので、あの直後、全身全霊で記憶と力を封じたのは……自分でもある意味仕方ない選択だったと思うのだ。

蛇やら巨大な蛾やら百足やらに襲われる幻はともかく、最後に見せられた——真実の光景は、とても子供の心に受け止められるようなものではなかった。

いや、あのイメージさえ、真実そのものかどうかはわからないのだ。

人間に過ぎぬ身に、創世に係わる神々の真実を正確に把握できるとも思えない。あれは……あの光景は、以前読んだかなにかして得た知識の上で、連想させられたものなのかもしれないのだ。

だが、たとえそうだとしても、思い出したことを後悔するぐらいには、醜悪で恐ろしい光景だった。

細い筋で繋がれた、脈打つ瘤に包まれて……いや、半ば筋や瘤と融合するように……埋もれ且つ融けるように、女性が眠っていた。

それでいて、瘤と女性は戦っていた。

瘤は彼女を飲みこむために、女性は自らの眠りに誘うことで瘤を小さくしようとしていた。

あれがなにを意味する光景であったのか、いまのアラクセイトにはわかる。

けれど、あの当時の彼女にはわからなかった。なにより衝撃的すぎて、恐ろしすぎて、とても意識を保てなかったのだ。

けれど、あの時と今とでは、違うことがひとつだけあった。

あのころほど、自分は無知ではない。

神殿を退いた後、家計を助けるためにもと、必死であれこれ知識は詰めこんできたのだ。
いまなら、きっとそれを有効に活用できる。
（つっても、圧倒的に修行不足だから、ミイノとかカーラさまたちの助力がないと勝算立たないってあたり、かなり情けないんだけど……ね）
でもまあ、わけもわからず攫われた、あの夜ほどに無力ではない。
「おし。取り敢えずは殺されない程度に頑張って……」
などとつぶやいた瞬間のことだった。
彼女を包みこむ、氷の檻がめきめきと音をたてながら圧縮しはじめたのは！
「ちょっと待ってよ！」
待ってくれるはずもないことなど百も承知で、それでもアラクセイトは叫ばずにはいられなかった。
「問答無用ってわけ!?」
彼女の声に答える声はなかった。
その反応のなさが、彼女に心を決めさせた。
「そっちがそういうつもりなのなら……ねえ！」
黄橙色の双眸をきらきらと輝かせながら、アラクセイトはずっと忘れていた、最強の味方の名を口にした。

「イイタール！　あなたが名を授け、あなたの真名を与えられた……イイタールの娘の声！
聞こえるなら……助力を求める思いが伝わったなら……！」
我を封じ、我を凍えさすこの氷を破砕したまえ――！
瘴の女神の女神から数えて二代までは神と呼ばれる。
その次の世代は精霊と呼ばれる。
だが、たかだか人間の身にして、神の息子――あるいは娘と呼ばれる存在がある。
それが、神自らが名付け親となり、同時に自らの真名……神名を与えた人間である。
アラクセイトは火神イイタールによって名付けられ、火神の神名を与えられたイイタールの娘だった。
爆発が起こった。
想矢湖の半分ほども吹き飛ばす――地形すら変える大爆発だった。
それを狼煙と言い切った強者も、いるにはいたのだけれど――。

8

北の空に、突然光の乱舞が現れたのは、アラクセイトの行方が知れなくなって三日ほどたったころのことだった。

見たことも聞いたこともない現象を前に、ソラミイノが息を呑んだまえで、平然としていたのは黒珊瑚の使徒だった。

「狼煙代わりってやつだね」

あっさりと言い切って、彼女は身につけていた服の襟元を解きはじめた。

（なにやってるのかしら……このひと……？）

つい好奇心を覚えて、覗きこんだソラミイノは、そのほどいた襟元から、ころころころ、とカーラトーニの掌に転がり落ちてきたものを目にして絶句した。

極上の青玉、杉石、紫水晶、瑠璃、菫青石、青月長石――などなど。

極上の――しかも聖石の子供石ばかり取り出すではないか！

「カ、カーラさま……？」

なに、なさるおつもりなんですか――？

と、尋ねたソラミイノに、彼女はあっさりと答えた。

「なにって……このままちんたら地上移動してたら、向こうの騒ぎに間に合いそうにないだろう？　なら、手っとり早く風の精霊たちの助けを借りたほうがいいだろう？　これだけ彼らの好きな石を積んで頼めば、多少相性のわるいあたしらだって運んでくれるだろうからね」

「そんな裏技、あるんですかー!?」

目を白黒させながら尋ねたソラミイノに、やはりごくごくあっさりと「あるんだよ」とカーラは答えた。

そして、それが嘘ではない証拠に、風神イーオダールの子供たちの力によって、問題の場所まで無事に運んでもらった形になった事実に、ソラミイノはなにやら考えるものを覚えたらしいのだが……まあ、それは別の問題である。

ソラミイノにはわからぬ領域で、カーラトーニがなにやらを感じ取り、すっと表情を引き締めた。

「来たね」

彼女がつぶやくと同時に、すさまじい殺気を感じた。

「な……!?」

驚いて、飛びのいた――カーラもセイも、同様だった。

そんな三人の目の前に現れたのは――。
「なぜ、邪魔をするんだ!?」
ぎらぎらと、憎悪に燃える眼差しをカーラに向けた青年だった。
その髪は黒、双眸は不思議な灰銀色。
「ネイド……」
とカーラが苦々しげに口にした。
それを聞いた瞬間に、ソラミイノは理解した。
この青年こそが、今回の元凶なのだと――不凍湖として知られる想矢湖を凍らせ、袖にされた紅水晶の使徒たる女性の力を封じ、閉じこめた……。
（そして、喪月神に操られたあげく、アークまで手に掛けようとした……）
許しがたい男だった。
もしアラクセイトにもしものことがあったら、決して許せはしないだろう。
けれど、いまは――。
彼の相手をするのは自分ではない――それはカーラとセイの役目だ。
「カーラさま、セイさま……わたしはなにをすればいいんでしょう？」
尋ねたソラミイノにセイが嬉しそうに微笑んだ。
「人質ふたりの居場所を突き止めてほしい……シオルはカーラも気に入ってるから、無茶なこ

とはしないと思うが……万が一、暴走でもされたら怖いからな」

「……暴走、ですか……？」

「ああ。以前あいつ、道を踏み外した黒真珠の使徒を溺死させかけちまってな……以来、相手が水の性のやつでもおれは安心しないようにしてるんだ」

真珠は珊瑚と同じ海の宝石――そのなかでも黒真珠は、最高の海と水の加護をうけた石のはずだった。

そんな黒真珠の使徒を、溺死させかけるとは……カーラの力が尋常でない証拠である。

（確かにそんなひとが暴走でもしたら、火の性の人間はたまったもんじゃないわね）

と、考えて、ソラミイノは指示通り、人質発見のために意識を集中することにした。

君子危うきに近寄らず――である。

カーラは、怒っていた。

困った騒ぎを引き起こしてくれたネイドアークに対してだけではなく、自分も含めてあらゆることに怒りを覚えていた。

だから、元凶が姿を現したときも、ほとんど表情を変えなかった。激しい感情に身をまかせ

たときほど、彼女は無表情になる――相棒であるセイタマールが、ソラミイノに手出しさせないよう別の指示を出したのは、なるほど賢明なことだったのだ。

「ネイド」

もう一度、しっかりと相手の顔を見つめながら、カーラは告げた。

「ふたりをお返し。こんなことをしたって、結局は虚しいだけだって、本当はお前だってわかっているんだろう？　自由を奪って閉じこめて……そのために喪月神の力まで引き出して、そんなことをしたからって、あの娘がお前を愛するようになるはずがないじゃないか」

一見説得にみえる光景だったが、実のところは違った。

人間、図星を指されたときほど激怒するものだ――そう、カーラはネイドアークを挑発したのである。

「うるさい、うるさい、うるさいっ！」

案の定、怒りを満面に、ネイドアークが叫び、攻撃を仕掛けてきた。

無数の氷の礫による攻撃は、より強い水の加護を持つカーラには一筋の傷すらもたらさない……はずだった。

が。

ありえないはずのことが起こった。確かに礫のほとんどはカーラを避けるように外れたのだが、いくつかがざっくりと、彼女の肌を引き裂いたのだ。

その事実の意味を、すぐにカーラは解きあかした。

「なるほど……だから、豊珠を選んだってわけだ……」

珊瑚は南洋にしか産出しない宝珠――ひとつぶなりと産出しないこの大陸での加護は薄くなる。

ネイドアークが笑った。

「そうだ、いくらお前たちが絶対の水の加護を得ているといっても、それは南でのことだ……ここでなら、わたしは負けない。それに、あんたの力じゃ、この地に宿る瘴気は浄化できない……知らないとでも思っているのか？　あんたは確かに瘴気の憑代になることで……それをあんたの相棒が両断することで浄化する。だけど、それは人間の生み出した瘴気に限ってのことだ……ここにあるのは、人間の生み出した瘴気ばかりじゃない。神と呼ばれた存在の息吹に、あんたは同調できない……あんたはここを浄化することはできないんだよ！」

自分の力でもないというのに、勝ち誇って見せるネイドの態度は不愉快なものだった。

虎の威を借りまくる青年の態度にも苛立ったし、それ以上に状況が青年の言うとおりなことにむかついた。

相棒や、ごくごく親しい友人たちしか知らぬことではあったのだが――カーラトーニは、根が単純で、非常に負けず嫌いな性格の主だった。

そんな彼女が、この状況でどう動くか――。

極寒の地であるにも係わらず、凍えた様子も見せぬあざやかな朱唇に、あでやかな笑みを刻み、彼女は告げた。

「なんでも、人間ってもんは、出来ないって決めた瞬間に出来なくなるもんなんだってさ。確かにね、これまでやったことはないよ……やってみたこともね。だからって、出来ないって決めつけられるっていうのも……なんだかねえ……？」

挑発的な笑みをたたえ、カーラはこうつづけた。

「ネイド、賭をしようか。本当に、あんたの言った通り、あたしには人間以外の生み出した瘴気を浄化することができないのか……それともできるのか」

「で、できるものか……！」

答えるネイドの声はかすれ、震えていた。

「できるはずがない……！」

それは悲鳴に近かった。

けれど、カーラは退かなかった。

「だから――試してみようってね」

にやりと笑った彼女の本気を悟ったのか、ネイドアークが顔色を失った。

不穏な空気に気づいたのか、背後から、勘のいい相棒の声が聞こえてきた。

「カーラ……っ!?」

けれど、ここまで来て退くようなカーラではなかった。
「お前の腐った性根ごと……ネイド」
ちらりと青年に一瞥をくれて。
「セイの太刀で浄化してやるよ――」
そうして――。
瘴気という瘴気――すべてに意識の波長をあわせようと、彼女が半眼を閉じたその瞬間……
その刹那に。
それは、起こった。
無数の――喪月神の瘴気のみを焼き尽くす火柱が、想矢湖の周辺に出現したのである！

炎と氷のぶつかりあいで、周囲にはもうもうと水蒸気がたちこめた。
想像だにしなかった事態を前に、半ば呆然とするソラミイノたちの前に、突然に彼女たちは現れた。
ひとりは、薄紅色の双眸が印象的な二十歳前後のたおやかな美女――そしてもうひとりは、紫紺の髪と黄橙色の瞳の組み合わせがなんとも不思議な感じを醸しだす少女。

「シオル……」

と、つぶやいたのはネイドアークだった――とても信じられないという顔で。

もうひとりの少女の名を口にしたのはソラミイノだった。

やはり、信じられない想いで。

なぜなら、ふたりを守るように彼女たちを包みこむように、場を支えている石が、いくつもの色をたたえたものだったから……だ。

綺麗な薄紅色、南の海を思わせる青色、柔らかな黄色――。

透明で、硬質な輝きを放つそんな石を、ソラミイノはこれまで見たことがなかったのだ。

最初は、カーラが『お守り』としてくれた聖石の子供石かな、と思った。

けれど、すぐにそうでないことに気づいた。

なぜなら、ふたりを守るためのそれらの石は……聖石の子供石は、淡く輝くアラクセイトから生まれていたのだから！

（アークは石墨の子供なのに……そのはずなのに……!?）

なのに、あの美しく輝く硬質な光を放つさまざまな色彩に溢れた石はなんなのか。

話には、聞いたことがあった。

最高の宝石でありながら、それを抱いて生まれてきた子供はいないと伝えられる……最も稀少で、最も強力な宝石。

征服されざるもの――との異名を持つ、地上最強の、宝石。
それでいて、さまざまな色彩を纏う、無敵の石。
金剛石――。
「そんなことがあるのーッッ!?」
思わず絶叫してしまったソラミイノだったが、どうやら驚いているのは彼女に限ったことではなかったらしい。
「アラクセイト……？」
かすれた声でセイタマールがつぶやけば、カーラも漆黒の双眸を大きく瞠って少女を見つめていた。
そんな彼らを前にして、本人、どうやら事態をよくわかっていないような顔で――後で確認を取ったところ、本当に無我夢中で頑張ったあげく、そのときは実際なにがなにやらよくわかっていなかったのだという――一同を見渡した後、アラクセイトはカーラに申し訳無さそうにぺこりと頭を下げて告げた。
「ええっと、よくわからないんですが、タチの悪いのは、あれで撃退できたらしいです……シオルリイダさん……じゃなくて！　シオルリイリさんから伺ったんですけど！　わたし、ただ夢中で気持ち悪いのがイヤで、殺されるのもイヤだったから……昔のこと思い出せたことだし、できるだけのことはしようって思っただけなんですけど……」

あれ、焼いちゃってもよかったんでしょうか――？
非常に不安げに問いかけたアラクセイトに、黒珊瑚の使徒はあざやかすぎる笑顔で応じた。
「もちろんだとも！」
カーラの双眸が伏せられる。
そして、それと同時に彼女に吸いよせられるかのごとく集まる瘴気、瘴気、瘴気――。
相棒の血肉を決して傷つけることはない、セイタマールの振るう血赤珊瑚の刃が振り下ろされ、瘴気は浄化された。
一件落着。
残ったのは、解放された紅水晶の使徒である美女と、彼女の温情のおかげで抹殺されずにすんだ月長石の使徒と――そして。
ことが終わった途端、まるで冬眠するかのように、昏々と眠りこんでしまったアラクセイトだった。
なにがどうしてこうなったのか――。
絶対に聞き出さずにはおられない――という、ソラミイノの努力はこの後水泡に帰す。
多少の事情を除いて、アラクセイトがすっかり忘れてしまっていたせいだ。

エピローグ

いったい、あれは何だったのだろう？
玉藻ヘ戻る道すがら、何度もソラミイノは考えた。
あの最後の決着の時、事態を左右したのはアラクセイトだった。
絶対的な決定権を握っていたのは彼女だったのだ。
なのに――なのに……なのに、だ。
「このタコっ！　あの時のこと、なんにも覚えてないだなんて、いったいどういうつもりなのよっ!?」
思わずびしびしべしべしぶん殴りたくもなるものである。
「そ、そ、そんなこと言われたってぇぇっ！　覚えてないもんは覚えてないってしか言えないし……っ！」
（冗談じゃないわよう！　あん時、火柱を背景に、あんたが現れた時、思わず一生ついてくとか心に誓ったあの純情、無にするなんて許さないんだからぁぁっ！）

……とは、思うものの、いまのぽややーんなアラクセイトを前にすると、あの時の決意も崩れかけてくる。

なにしろ、あれから正気を取り戻した学友は、以前よりかは飲みこみは早くなったし、以前ほどの劣等生ではなくなったとはいえ、あの輝かしさが嘘にしか思えぬ成長の遅さを誇っているのである。

（うーん？　もしかして、あれってば、あたしの錯覚だったとか……？）

そんなことを考えている矢先に、黒珊瑚の使徒であるカーラトーニが、こんな提案をしてきたのだ。

修行中の聖石の子供に対してのものとしては破格の申し出だった。

「よかったら、修行がてら、あたしらと一緒にあちこちうろつかないかい？」

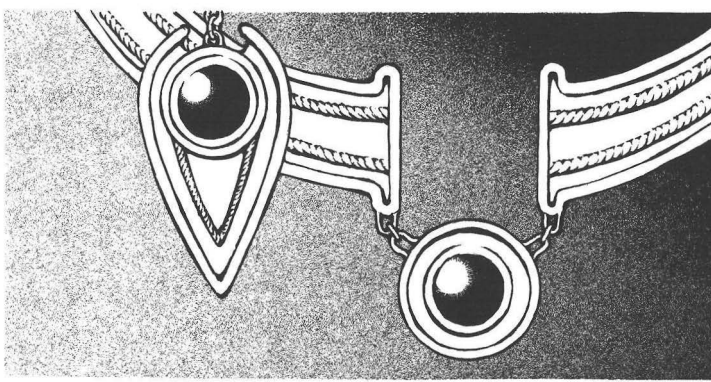
一も二もなくソラミイノはうなずいた。

もちろん、アラクセイトも引きずり込んだ。

アラクセイトという存在の謎を解きあかすためにも、それは必要なことに思えた。

もちろん、本人に対しては——事後承諾だった。

瘴(しょう)の女神を癒(いや)す者



プロローグ

聖石の使徒――と呼ばれる人間がバルヴァローズには存在する。

その手に石を握りしめて生まれてきた人間のことだ。正確に言うなら、石を抱いて生まれてきた人間のなかでも、特に貴重な石を持って生まれてきた者がそう呼ばれる。

彼らは神々に選ばれた存在と言われており、事実、通常の人間が持ち得ぬ特殊な能力を持っている。

彼らのなかには、病人をたちどころに癒してしまう能力を持つ者もいるという。またある者は痩せた貧しい土地を生き返らせたこともあると。

聖石の使徒の数は少ない。

だが、世界中の誰も、その力を疑うことはない。なぜなら、使徒と呼ばれるほどの能力には恵まれずとも、それに準じる力を持つ者は――貴重とは呼べない石を握って生まれてきた者は、珍しくはあっても稀有というほどではなかったので――それなりにいたからである。

使徒と呼ばれるほどの力ある人物は稀にしか出現せずとも、バルヴァローズの人間はみな、

石を握って生まれてきた者が、神々の力の一部を授けられた存在であることを知っている。
そして、そんな存在のなかにあって、貴石以上と見なされる石を手に生まれてきた者が、いかに強大な力を有しているのか……どれほど神々に愛されているのか、疑う者など皆無と言えた。
聖石の使徒――それは特別な存在であり、飛び抜けた存在であり……そして重き責を担う存在であったのだ。

ある国の権力者の屋敷のなかで、それはひっそりと行われていた。
集うのは国の政治と経済を担う者たちばかり――そんな男たちの前には数人の神官と、ぼんやりとした少女たちがたたずんでいた。
神官たちの顔には翳りがある。
不快げに部屋の隅に置かれた香炉に目をやる者もいた。
そこから立ちのぼる薄紫の煙が、少女たちの精神に与える影響を知っているからだろう。
だが、それでも神官たちは誰も、香炉を取り除こうとはしない。できないのかもしれない。
複雑な顔のまま、神官たちは男たちの望むがままの言葉を口にした。

「彼女たちに……聖なる使徒たる証は認められませぬ――」

苦々しい口調でそう告げた神官に、男たちは満足そうにうなずいた。

少女たちのなかに『聖石の使徒』はいない。

事実は問題ではない。神官たちがそう判断したことが問題なのだ――神の僕たる神官がそう口にしたことこそが、なによりも重要だった。

どれほどに権力を握ろうと、聖石の使徒を自由にはできないのだから。

だが、それが聖石の子供にすぎぬ存在なら話は別だ。

彼ら……彼女たちなら、手に入れようが雇おうが利用しようが問題はない。

なにより彼女たちの異能は現世でこそ役に立つ。なにより彼女たちの大半は、非常に魅力的な容姿の主である。

神殿だけに独占させておく法はない。

そう、聖石を抱いて生まれてくるのは、なにも女性に限ったことではないのだから……。

くつくつと喉を鳴らしながら、男のひとりが少女に近づいた。

値踏むような視線を少女たちに投げかけた後、ひとりの肩に手を置いた。

所有の印だ。

使徒に選ばれなかったその少女は、男のものとされたのだ。

彼女はこの先男の妻とされるかもしれない。あるいは養女として男に都合のいい相手に嫁が

されるかもしれない。あるいは男の評判を高めるための看板に持ち上げられるかもしれない。彼女たちの多くは貧しい家の出身であり、これからの家族への援助と引き換えにこの申し出を受けたわけだから、一応は合法とされる……たとえその実が人身売買にほかならぬこととわかっていても……だ。

籤で決められた順番で、男たちが次々に少女たちを選ぶ。

虚ろな目をした少女たちは、この先自分たちを待つ運命から目を背け、夢を見させる煙に酔っていた。

酷いことだと、神官のひとりは思った。

だが、彼にしてもこの不正を明らかにすることはできないのだ――そうはできぬ弱みをすでに、彼は男たち……いや、男たちを中心で動かす権力者に握られてしまっていたのだから。

その男の順番は、いつも最後だ。

ほかのどの男より強い立場にありながら、美味しいところは全部ほかに譲った上で、ごく稀に残った少女についても手に入れようとはせず、神殿に戻しさえする――二度とこのような場に連れ出さぬよう神殿に言い含めた上で、だ。

この歪んだ場所の提供者であるにも係わらずだ。

なんとも矛盾に満ちた男だった。

だが、神官たちはなにも言えない。

我が身が大事なら、その男には決して逆らうべきではないからだ。
その日も、ひとり残った少女を無表情に見つめたまま、男は少女を神官に委ねた。
せめてもの良心のつもりなのか……少女に本当になんの値打ちも認めていないためなのか——神官たちにはわからなかった。
ただ、皆が怯えていた。
このような不正が続くはずがない……神々が見逃されるはずがない。
だが、それが明るみに出たとき、自分たちの罪もまた露顕するのだ。
そのときが恐ろしい。
だが、同時に待ち遠しい。
矛盾する願いと祈りを胸に抱いているのは、神官たちにしても同じだった。
なぜなら彼女たちにははっきりと、聖石の使徒に選ばれた印が刻まれていたのだから……。

客たちの去った屋敷で、男は葡萄酒を満たしたグラスを手に、忠実な配下を相手につぶやいた。

「心配はいらん」
やや蜜色を帯びた透明な酒を口に運びながら、男は告げる。
「足などつかん……ちゃんとそういう娘を選んでおる。八年前のような面倒は起こらんよ……十二分に、懲りたからな」
二度と御免だと思う程度には――。
そうつぶやいて、苦い笑みをたたえる男に、異能を武器とする忠実な配下は「そうではございません」と答えた。
「歪みが大きく育っております……なにが原因かまでは、わたしごときではかりかねますが……確実に瘴気がこの都を中心に渦を巻いております。神殿の差し向けた使徒がすでにふたりも消息知れずとなっております。あるいは他国から秘密裡に送られてきた使徒すらも例外ではないかもしれませぬ。もしやすると、他大陸からより強い使徒を呼び寄せ、すべてを明らかにするつもりやも……」
「強い、使徒か……」
揶揄するように、男は笑った。
「そんなものが本当にいるのなら、是非送りこんでもらいたいものだな。絶対なる神々の加護を得た人間などというものが、真実この世界に存在するのなら……」
言って、男はこくりと喉を潤した。

どこか歪みを感じさせる男の態度に、配下は不安げに顔をしかめ、そうして最後にこう告げた。

「八年前の事情を知る者どもが、奪われし娘に焦点を定めし様子が見て取れますが……？」

いかがいたしましょう――？

その言葉に、初めて男は反応した。

だが、その口を突いて出てきた言葉はどうでもいいと言わんばかりのものだった。

「放っておけ」

言い切って、彼は一言つけ加えた。

「ただし、監視の目は緩めるな」

「御意」

と答えた昔なじみに、男はため息まじりにこう告げた。

「返す返すもあれは失敗だったな……」

相手はなにも返さない。

男もそれ以上言葉を重ねはしなかった。

神妙にして哀しい空気が、室内を満たしただけのことだった――。

一

バルヴァローズには七つの大陸がある。
かつてはひとつの広大な大陸だったという言い伝えもあるが、なぜそれが七つに分かれてしまったのかまでは伝えられていない。
さて、その七つの大陸のひとつに、樹翁というものがあった。
じゅおう、と読む。
大陸はもちろん国や土地の名は、すべて神々の管轄にあり、ひとびとは勝手に土地に名付ける権利を持たなかった。
これは地神アイルトーリが、人間が生まれて間もないころに言いつけたもので、記す際には難解な神象文字と呼ばれるものが用いられた。
神殿でもごく高位にある者しか学ぶことすら許されぬその文字は――一般の人間には記号か模様にしか見えなかったが――神々の加護の力を封じたものだと伝えられている。
疑問を覚えた者が出たか否かはともかくとして、それだけはずっと守られている。

神々の名付けた土地の名は、最初決められたときから変わっていない。
その樹翁大陸のなかに、璃楽という国があり、その国の持つ港のなかに招外と呼ばれるものがあった。
外よりの者を招くという意味を持つ神象文字で綴られた港だというが、詳しいところはわからない。ただ、港としての立地条件をも含め、考えたとき、かの港がほかのそれより多くの外からの船を迎え入れている事実は打ち消しようもない事実であった。
いまも多くのひとびとが、入港した船から下船しようとしていた。
どうやら他の大陸からの旅人らしく、みな、樹翁では目にしない衣装に身を包んでいる。
港で働く者たちは、とうに、そんなひとびとに対する物珍しさは忘れていたのだろうが、そうでない者もいた。
セイタもそのひとりだった。
セイタは七歳——外から来た船をこっそり見るために、忍びこんできた子供たちのなかでも最年少の子供だった。
「おい、見てみろよ……あの一行！　外套で隠してるつもりかもしれねえけど、体の線がばっちり出た服を着てるぜ？　ああいうの、はしたないとか言われるんだぜ？　にしても、ずいぶんな荷物だな……よっぽど格の高い店にでも雇われたのかな……なあ、セイタ、どう思う？」
ここまで連れ出してきてくれた、五つほど年長の少年の問い掛けに、セイタは「きっと違う

よ」と答えた。
「樹翁じゃ、体の線をはっきり見せるような服を着るのは、卑しいことだって言われてるけど、他の大陸じゃそうじゃないところもたくさんあるって聞いたし……それに、あのひとの服には、小さいけれど本物の宝石が縫いつけてあるよ。多分、あのひとは別の大陸の偉いひと、なんじゃないのかな？」
「そうなのか？」
問い返されて、セイタは反応に困った。
セイタ自身、そんなに世間のことを知っているわけではないのだ。
文字書きができたり、少しだけ樹翁の外のことを知っていたりするだけで、なにもかもわかっているわけでは決してないのだ。
「……多分」
そう答えて、すぐに他に気づくことがあって、セイタは自分をここまで連れ出してくれた相手にこう言った。
「でも、あのひとたちを狙うのは……多分、とってもまずいと思うよ？　ほら、気づかない？　あの女の人のそばにいるひとたち……油断しないで、でもさりげなく、周囲に気を配ってる。絶対、襲ったりしないほうがいいと思う」
その言葉に年長の少年はセイタをねめつけてきた。

「なにもそんなこと言ってないだろ!?　人聞きの悪いこと言うな！」

怒鳴りつけられて、セイタは小さく首をすくめた。

少年が、意外に短気でかっとなるとすぐ手をあげる癖があることを知っていたのだ。

だから、反論する代わりに「ごめん」と小さくつぶやいた。

本当は、少年が口には出さなくても、あの女性の荷物を狙うつもりでいたことはわかっていたのだけれど。

そんなセイタの様子に、少年はバツの悪い顔で「わかったんならいいよ」とぶっきらぼうに答えてきた。これまでセイタの『勘のよさ』に、何度か助けられたことを思い出したのかもしれない。

そのまま、気まずい沈黙に支配されたまま、子供たちは船に目を戻した。

少年たちは適当な獲物を物色するため、セイタは知識でしか知らない外の世界のひとびとを観察するために。

そして、セイタを除く子供たちが、そろそろ抜け出そうと――本当は、手続きなしに港に入ってはいけないのだ――したころ、セイタは不意に息を飲んだ。

船から最後に下りてきたふたり連れに、目を奪われてしまったのだ。

目立つふたり連れだった。

ひとりはいかにも屈強そうな長身の男性だった。最初に目を引くのは、なんといってもその

燃え上がるような朱色の髪だ。肌は話に聞く砂漠の民のように褐色だった。瞳は少しだけ赤みがかった琥珀色で、全身炎のような男性だった。

そのひとだけでも目立つというのに、その連れらしい女性は、対照的な姿をしていた。背の半ばまで届く黒髪は真っ直ぐでつやつやと輝いている。北国の出身なのだろうか、透けるような白い肌をしている。長い睫毛に縁取られた瞼の奥に輝くのは、髪と同じ……いや、髪以上に深い、黒――だった。

セイタはこれまで、彼女ほど美しい女性を見たことがなかった。

けれど、息が詰まって、胸がどきどきするのはそのせいではなかった。

そんなことのせいではなかったのだ。

「使徒さま……だ……」

思わずつぶやいた言葉は、声が小さすぎて、ほかの子供たちには聞こえなかったようだった。

「おい、セイタ？」

いつまでも、その場を離れようとしないセイタに、年長の少年が声をかけてきたその瞬間、セイタは素早く身を起こし、駆けだしていた。

「お、おい、セイタ!?」

何事かとばかりに、問いかけてくる声を背中に聞きながら、セイタは振り向く時間すら惜し

くて、「ごめん！」と叫んで……走りつづけた。

セイタの脳裏には、たったひとつのことしかなかった。

（使徒さまだ……間違いない、きっとあのひとたちは使徒さまだ……！）

胸がはち切れんばかりの期待を抱いて、セイタは港と街をつなぐ、唯一の門へと急いだ。

あのふたりの『使徒さま』を、どうしても街に入る前に捕まえなければならない、と思った——宿か、どこかのお屋敷にあのふたりが入ってしまう前に、どうしても話を聞いてもらわなければならないと、セイタは切実に思っていた……。

セイタは一所懸命走った。

内緒で港に入りこむための抜け道を逆走し、見つからないよう門までたどりつくには、幼い子供の足ではけっこうな時間がかかった。

どきどきしていた。

必死に走ってきたけれど、間に合わなかったのじゃあないかと思うと、それだけで胸の動悸が倍は激しくなった。

（お願い……お願いだから、まだ門をくぐらないでいて……！）

もう、使徒さまにしか尋ねられないのだ。
ほかのひとには尋けないのだ。
お父さんも、お母さんも……ほかの、ひとたちも――。
みんな、そのことを尋くと不機嫌になってしまう。
いいかげんにしなさいと悲しそうに言い諭す。
それがあんまり悲しそうなので、セイタはいつも、それ以上言葉を重ねることができなくなってしまう。
だから、セイタはもう、あの『使徒さま』たちに尋ねるしかないと思ってしまったのだ……使徒さまなら、きっと知っているだろうことについて。
だから、ずっと思っていた。
お願い、お願い、お願い、お願い……お願いだから、わたしが門に着くまで、どうか、使徒さまたち、門を出ないで――と。
必死に、必死に祈っていた。
だから――。
胸が破れるような思いで、港と街を繋ぐ門にたどり着いて……そうして、それを待っていたかのように、あのふたりの姿が見えたときには、涙が出るほど嬉しくなったのだ。
（ああ、神さま……！）

叫んでセイタはふたりに駆け寄った。
そうして、頼んだのだ。
「使徒さまっ！　お願いします……どうか、どうか、教えてくださいっ！　お姉ちゃん……お姉ちゃんは元気なんでしょうかっ!?　使徒さまならご存じじゃありませんか!?　どうか……どうか、お姉ちゃんのこと……」
教えてください――。
あんまり走り回った後だった上に、興奮しきっていたセイタは、結局のところ、台詞のすべてを相手に伝えることはできなかった。
お姉ちゃん、使徒さまの候補になって、雷牙の……あ、雷牙ってこのへんで一番大きな街なんですけど、そこにある使徒さまになるための修行をするっていう学院にいったんです……。でも、それから全然連絡ないし……でも、お姉ちゃんなら絶対使徒さまになったと思うんです。
なのに、でも、全然連絡はないし……心配で……。
「だから、教えてください！　お姉ちゃん、元気なんですよね……!?」
相手が異邦からの訪問者であることも忘れ、そう主張したセイタは――言うだけ言うと意識の糸が切れたかのようにがくりとくずおれた。
「ええっと……」



間抜けな声をあげたのは、朱色の髪と褐色の肌を持つ、炎の化身のような偉丈夫だった。

「つまり、この子の『お姉ちゃん』とやらは、使徒候補になってもおかしくない人物だったって……ことだよな？」

結果的に確認を求められる形になった黒髪の女性は――『不機嫌』とくっきり顔に描いてうなずいた。

「でもって現在、その行方が知れないってことらしいわね」

「それって、大事じゃないか？」

呑気にそんな感想を、いまさら洩らした相棒に、黒髪の女性は吐き捨てるように言い切った。

「だからっ！　あたしらがっ！　ここまで来たんでしょうがっ！」

その声と怒りとが、招外に雷神を呼んだ――とは、後に囁かれた他愛ない噂ではあったのだけれど。

あながち外れてはおるまいと、憤った女性のことをよく知る人物たちが思ったとしても、それは無理からぬことかもしれなかった。

詳しい話を聞かせてもらえるだろうかと――石畳に座りこんでしまったセイタに手をさしのべてくれたのは、黒髪の使徒さまだった。

遠目に見てもすごい綺麗なひとだと思っていたけれど、間近で見たら、胸がどきどきするほどだった。

（こんな綺麗なひと、見たことない……）

心からそう、セイタは思った。

手を貸してもらって立ち上がりはしたものの、いまさらながらに緊張して、セイタはうまく歩けなかった。

そんな様子に気づいたらしい、もうひとりの――大きくて、ちょっとだけ怖い感じのする――男のひとの使徒さまが、ひょい、とセイタを抱き上げた。

びっくりして目を丸くしてしまったセイタに、そのひとは――真っ白い歯を見せて笑って言った。

「そんなに驚くなって。怯えなくても大丈夫だ……さしあたり、飯と酒の美味い宿屋を教えてもらうつもりなんだしな」

そんな男のひとの後頭部に、綺麗で綺麗で夢見たいに綺麗な黒髪の使徒さまが、こぶしを見舞うのを目にして、さらにはそのひとの口から意外な言葉が飛び出したのを聞いて、二重の意味でセイタはますます目を瞠った。

「馬鹿セイタ。お前のような大男に突然抱き上げられれば、誰だって驚くし怯えるに決まっているじゃないの。周囲に威圧感を与える外見だって自覚、そろそろ持ちな。おまけによりにもよって酒のこと、尋くなんて……常識ってやつが、あんたの頭にはないのかい？」

こぶしで頭を殴られたはずの大きな男のひとは、顔を顰めて「痛ぇな」とぼやいたものの、どこまで本気なのか、セイタにはわからなかった。

だってそのひとの瞳には、笑いの色が浮かんでいたのだ。

なんだろう……不思議な感じがした。

「驚かせて悪かったね」

こいつの代わりに謝るよ——と、綺麗な黒髪の使徒さまがそう言ったとき、セイタはぶんぶんとかぶりをふった。

「違います……その、びっくりしたのは確かだけれど……その、ぼく……」

と、言いかけて、ふたりの顔を見た途端、いつものように男の子のふりをしても無駄だし……する必要もないように思えて——そう、セイタは女の子なのだ——彼女は言葉を改めた。

「その、わたし……。わたしも同じ、セイタって呼ばれてるから、びっくりしてしまって……」

そう答えるのがようやくのセイタに、黒髪の女性が艶やかな笑顔でうなずいた。

「そうか、それは奇遇だったね」

そこで自分たちが名乗っていないことを思い出したように、ふたりは次々に名乗ってくれた。

「私はカーラトーニ……カーラと呼んでくれればいい」

セイタを抱き上げたままの大きなひとも、思わずつられてしまいそうな笑顔でこう言った。

「おれはセイタマールだ。セイタが呼びにくけりゃ、セイでもマールでもいいぞ？」

本当なら、マールのほうを選びたかった。

けれど何となく……本当に、何となくなのだけれど、そう呼ばれるのがイヤなんじゃないかという気がして……結局セイタはこう呼びかけた。

「カーラさまと、セイさま……？」

さまはいらないとすぐに注意されたけれど、どうしてもそれだけは省けなくて……ふたりには勘弁してもらうことにした。

この後すぐ、彼らは招外の外街の宿に移動することになった。

その際、セイタが「お酒はわからないけれど……」との注釈のもと、心当たりを軒並み並べた情報がものを言ったことは言うまでもない……。

「お姉ちゃんは紅水晶を握って生まれたんです。小さいころ、何度か見せてもらったんだけど、とても綺麗なピンク色の石だったのを覚えてます……」

宿屋に落ちついて少し経ってから、セイタはそう語り始めた。

カーラとセイのふたりが、彼女の姉のことを知らないと言ったときには、がっかりしてしまったのだけれど、この先会えたら、必ずセイタが心配していることを伝えるからと言われて、だから色々なことを説明することにしたのだ——もしもふたりが会ったとき、すぐにそれが『お姉ちゃん』だとわかるように。

「紅水晶……ね」

考えこむような顔で、カーラがつぶやいた。

「お姉さんは……だったら、とても綺麗なひとだったんじゃない？」

尋ねられて、セイタはびっくりしてしまった。

本当にその通りだったからだ。

目を丸くした彼女に、カーラが悪戯っぽく笑って答える。

「聖石に宿る力はそれぞれ違ってね。紅水晶は慈愛とかやさしさの波動と力を放ってるんだよ。おまけに美容の効果も持ってね……そういうわけで、紅水晶の使徒は、たいていが綺麗な上にいい顔をしてるもんなんだ。まあ、女性がほとんどだけどね」

綺麗でいい顔——という言葉に、ちょっとだけ首をかしげたセイタだったが、カーラの言う

通り、『お姉ちゃん』が綺麗でやさしい笑顔の持ち主だったことを思い出して、きっとそういうことなんだろうと納得した。

「それで、そのお姉さんが雷牙……だっけ？　そこにある学院に行ったのは何年前のことだって？　ついでに、当時姉さんが何歳だったかも教えてもらえるとありがたいな」

「あ、はい。二年前です……お姉ちゃんは十三歳でした」

セイタの答えに、なぜかふたりは顔を見合わせた。

「それは……ずいぶん遅いお迎えだな」

ぽつりとそう洩らしたのはセイだった。

カーラもうなずく。

「確かに。普通、真贋の見極めも含めて、もっと早くに選定の使者が派遣されそうなものだけど……ね」

ふたりの言葉にかちんとくるものを覚えて、セイタは叫んでいた。

「お姉ちゃんは偽物なんかじゃありませんっ！　ほんとに、ほんとに、聖石に選ばれたひとだったんだからっ！　綺麗なだけじゃなくって、ほんとに力を持ってたんだからっ！　……そりゃあ、重病人を治したりとかはできなかったけど、ちょっとした怪我とか病気なら、簡単に治してたんだから……」

大好きなお姉ちゃんを馬鹿にされたような気がして、つい声を荒らげてしまったセイタ

は、すぐにはっと息を飲んだ。

せっかく、お姉ちゃんを捜してくれると言ってくれたひとたちを、怒らせてしまったのではないかと心配になったのだ。

けれど、それはセイタの杞憂だった。

それどころか、ふたりは、小さなセイタが相手なのに、「誤解を招くようなことを言って悪かった」と頭を下げたのだ。

「すまなかった。もちろん、そういう例だってあるんだ……子供のころは眠っていた能力が、ある程度の年齢になってから目覚めるということはな。セイタの姉さんを侮辱するつもりはなかったんだ。許してほしい」

真面目な顔でセイがそう言うと、カーラもうなずいて謝ってきた。

「あたしも悪かったよ。セイタの言うことを疑うつもりはなかったんだ……ただ、言い訳させてもらうなら、そういうことなら、その雷牙からの迎えの使者がおかしいっていうことなんだよ。セイタは、その使者だってひとに会ったのかい？」

まさか、使徒さまの口から、こんな言葉が飛び出すとは想像もしていなかっただけに、セイタは目をぱちぱちと瞬かせた。

彼女にとって、雷牙の学院からの使者さまは、当然使徒さまのおひとりで……だからそんな方を疑うことなど論外で、これまで考えたこともなかったのだ。

（そんな……この方たちは使徒さまなのに……どうしてこんなことを言うのかしら？）

わけがわからなかった。

けれど、改めて尋ねられたことで、思い出したこともあった。

そういえば……お姉ちゃんの雷牙からのお迎えはずいぶん急なことで、夜も遅くのことだったのだ。

眠っていたのを揺り起こされて、「元気でね」と抱きしめられた。ぽかんとして、満足に言葉が出なかったことを覚えている。

（あのとき……あのとき、学院の使者さまは……）

「見てない……」

半ば呆然として、セイタは答えた。

「突然起こされて……お姉ちゃんはこれから雷牙の学院に出発することになったから、お別れの挨拶をしなさいってお母さんに言われて……それで……」

これは、どういうことなのだろう……？

困惑のあまり、セイタは泣きそうになった。

なにが本当で、なにが嘘なのかわからなくなってしまった。

偽物かもしれない使者さまに、お姉ちゃんが連れて行かれたのだとしたら……それはイヤだ。絶対にいや。

けれど、使者さまのお迎えが来たのだと、両親が嘘をついて……そしてお姉ちゃんをどこか遠くにやってしまったのだとしたら……？

「ど……どういうこと……？」

混乱しかけたセイタの淡い金の髪を、カーラがやさしく撫でたのはそのときだった。

「あー……変なこと言っちゃってすまなかったね。ただ、世の中には悪いやつもいるからね、まず真先にそういうやつらがからんでるんじゃないかって考えるクセがついちまってるんだよ」

ますます不安にさせられるような言葉だったにも拘らず、セイタはその声を聞いたとたん、すとん、と気分が落ちつくのを感じた。

呆れたようなセイの声が重なったときも、同じ感じがした。

「おいおい、ますます不安がらせるようなこと言ってどうするよ？」

「うるさいね。話の腰を折るんじゃないよ！」

不機嫌そうに言い切ったカーラが、嘘のようなやさしい笑顔を自分に向けてきたとき、セイタはなぜだか、ふたりと話しているうちに感じた不安や怖さが、ずっと前から自分のなかにあったものだったことを悟った。

ずっと、本当は不安だった。本当は……疑っていた。

けれどそれを認めるのは、あまりにも恐ろしすぎることだったから、気づかぬふりをしてい

たのだ。

「……使徒さま……」

もう、怖くはなかった――不安でも。

なのに、涙が溢れてくる。セイタ自身、なぜなのかわからなかった。

「ああ、もう、泣かない！　大丈夫だって！　セイタの姉さんは、騙されたりひどい目にあったりなんかしてないから……あたしにはそれがわかるから！　安心していい、明日にでも……ってのはちょっと無理だけど、絶対近いうちに、姉さんと会えるようしてあげるから……ね？」

だから泣き止んでほしいと、カーラは困りきった顔で口にした。

根拠もなにもないはずの言葉だったけれど、彼女がそう断言した瞬間に、それは確実な未来だと……いや、確実な未来になったのだと、セイタは感じた。

「……はい」

しゃっくりが出そうになるのを堪えながら、ようやくそう答えると、今度はセイの大きな手が彼女の頭を乱暴に撫でた。

「いい子だ」

なぜだか、とっても安心した。

もう大丈夫なのだと、頭の奥から聞こえたような気がした。

2

「どう思う？」

切り出したのはカーラだった。

セイタに教えてもらった宿の一室――そばには相棒であるセイがいる。

真紅の髪と褐色の肌を持つ、ふたつ年上の相棒は、ひとの悪い笑みをたたえたまま問い返してくる。

「なにを、だ？」

ふたりが借りた部屋はひとつ――寝台こそふたつ並んでいるものの、相部屋を取った男女の間に流れそうな甘やかな空気は両者からは無縁だった。

それは、ふたりがともに戦士であるせいかもしれない。

「とぼけるんじゃないよ。鈍いお前と違って、こっちは招外に入って以来、ずっと頭痛に悩まされてるんだよ？　それもこれも、色濃く立ちこめた瘴気のせいだよ……まったく、タチの悪いこと……よりにもよって、聖石の子供を食い物にしようだなんて……」

そんなやからが出現するとは嘆かわしいことこの上ない。
大仰に息をついて、カーラは乱暴に自らの黒髪をかきあげた。
「唯一の救いは、少なくともあの子の姉さんとやらが、その毒牙から逃れたらしいってことかね……もっとも、一般の人間がそうと悟れるほどに腐敗が広がっていることのほうが問題なんだけれどね」
「だから、おれたちが呼ばれたんだろうが」
どこか皮肉げに、どこか面白げに、軽口をたたく相棒を軽く睨みつけて、カーラは肩をすくめた。
「わかってるんなら、多少は骨を折ってもらいたいもんだね」
「心外だな。充分粉骨砕身しているつもりだが？」
「よくも言う」
短く切り捨てて、カーラは双眸を細めた。
笑っているのではない。思い出すときの、それは彼女の癖なのだ。
「あの子の……セイタが最後に答えたあの言葉の意味が、わからぬお前でもないだろうが……」
日が暮れてきたからと、帰宅しようとしたセイタに、何気ないふりを装ってカーラが投げかけた問いはひとつ。

『ところで、ちょっと不思議に思ったんだけれどね、セイタはどうしてあたしらが聖石の使徒だとわかったんだい？』

対する少女の答えは簡潔だった。

心底不思議そうに、少女はこう口にしたのだ。

『そんなの、見ればわかるでしょう？』

普通――見ただけではわからない。

聖石を握って生まれた子供にすら、完全にその気配を殺した同輩のことを見抜くことは至難なのだ。

事実、カーラたちは今回、聖石の使徒であることを証明する品を、厳重に封じた形で樹翁を訪れた。

それを看破するなど、通常の人間はおろか、よほど気配に敏感な者にしかかなわぬことだった。

なのに、あの少女はこともなげにそう答えた。

間違いない。

彼女は彼らふたりの同輩なのだ。

聖石の子供――あるいは使徒と呼ばれてもおかしくないほどの資質と能力を生来与えられた存在なのだ。そうでもない限り、説明できない。

なのに、自覚がない。自身もまた聖石の子供である事実を、彼女自身が知らない。
だとしたら……その事実の意味するところは……？
聖石を握って生まれてきた子供は、神々の祝福を受けた者。
瘴の女神の眠りを約束のときまで守るべき力と務めを負った者。
同時に世界中のひとびとの規範となるべく選ばれた者。
そう見なされる存在が隠される。
隠されなければならない。
しかも、セイタのあの身なりと……髪。
樹翁に限らず、バルヴァローズの女性は子供のころから髪をのばすのが普通だった。鋏を入れてはならないわけではなかったが、七歳の女児としては、セイタの髪は短すぎた。いくら巻き毛だからと言っても、肩にすら届かない長さで揃えるなど、普通では考えられない。
しかも、セイタの身につけていた衣服は、貫頭衣と釦のない……つまりは合わせの部分のないものばかりだったのだ。あれではセイタは、一見しただけでは男女どちらなのかわからない……というか、どちらとも取れる子供ということになってしまう。しかも彼女は明らかに、男児を装うことに慣れていた。
恐らくは、そうするよう、言いつけられ、育てられてきたのに違いない。
それは……その事実は、いったいなにを意味するのか。

「あの子の両親から、詳しい事情を聞き出す必要があるね……」
「だな」
素っ気なく、セイがうなずいた。
「なんにしても、ここいらは異常だ」
そうだね、とカーラもうなずいた。
まったくもって同感だった。

翌日——。
カーラとセイは、セイタの両親を訪れた。
セイタはいない。前もって、セイタを外に出しておいてくれるよう、宿の者に頼んで文を届けておいたのだ。
セイタの家は、招外の中央区に屋敷を構える、なかなか裕福な貿易商だった。
持ち船は一隻だが、幾人かの商人同士で出資しあって作った船が二隻、顔の広さと人望で、頼めば多少の荷物の運搬ぐらいは引き受けてもらえる船なら十隻近くツテを持っているのだという。

なるほど、とカーラは胸中、納得した。
それだけのツテと財力があるなら、我が子を逃がすことは可能だったろう、と。
だが同時に悲しくもあった。そこまでの人脈と財を持つ商人ですら、娘を逃がすぐらいのことしかできないという……この璃楽の現状が。
宿からここまで来る間に、あれこれ算段を考えていたカーラだったが、不意にこのときになってつまらないことに思えてしまった。勘を頼りに暴走するのは彼女の悪い癖のひとつで、そのせいで相棒が大変な苦労を背負いこむことはわかっていたが、それでも止まらないのが彼女の性格だった。
外見からは想像できないが、実のところ猪突猛進型はカーラの方だったりするのだ。
「最初に身分を明かしておきますが――」
そう告げて、彼女は懐から小さな革袋を取り出した。
その中には、彼女が生まれ持って来た黒珊瑚を使った首飾りが入っている。
なんら加工もしていないというのに、真円の形をしたその玉を、カーラは左手に握って生まれてきたのである。
「あたしは、樹翁生まれの使徒ではない。樹翁はすでに甚大な被害を受けている……このままでは、滅びてしまうかもしれないほどに。だからあたしは……あたしたちは来たんだ。樹翁で……いいや、この璃楽で起こっていることを、教えていただきたい」

駆け引きもなにもない第一声に、セイタの両親は目を丸くするばかりだった。
単刀直入にすぎる。
こんなやり方で、事態がうまく進むはずがない。
にも拘らず、相棒であるセイは、結局一言も口を挟まなかった。
セイタの両親は、まるで見えない糸か鎖に縛られたかのように、ほんの数瞬、動くことを忘れた人形のようになった。
別段カーラが特別な能力を揮ったわけではない。
彼女の放った真実と真意と迫力に、ふたりは呑まれてしまったのだ。
海……と、縁を持つ者だったから、なおさらだったかもしれない。
珊瑚は海に係わる者たちにとって絶対の守護を意味していたのだから。
怖い、怖い——とは、セイの内心の声である。
この美貌、この気性……それにもし、珊瑚のなかでも最高級とされる血赤珊瑚の守護までもが加わっていたならば……。
そのことを思うと、寒けすら覚える。
黒珊瑚ですら、こうなのだから——。
だが、セイのそんな思いをよそに、事態は進んでいく。
カーラの存在と率直な言葉が、セイタの両親から頑さを取り除いたのだ。

先に口を開いたのはセイタの母親だった。
「お話しましょう、あなた」
隣に座る夫に向かって、彼女は毅然とした態度でそう言った。
「このままでは、聖石に選ばれながら、使徒さまになる道を絶たれる者ばかりが増えていくだけですわ。わたくしはもう、誰にもサラナのようにはなってほしくありません……けれど、いまこのときも、あの子のような子は、増えつづけているのですわ」
カーラが、首をかしげながら問いかけた。
「失礼だが、そのサラナというのは、もしかしてセイタ嬢の姉……」
のことなのか、と――言葉を終えるより先に、セイタの父親がかぶりをふった。
「いいえ。リイダ……シオルリイダは我々の手で、馴染みの船に乗せて逃がしました。使徒さまは、この璃楽に、女性の使徒さまがほとんどいらっしゃらないことをご存じでしょうか？」
セイが静かにうなずいた。
「そういう話なら、確かに聞いた。おかしなことだ。普通、使徒ってのは男女半々いるもんだ。それだけが均衡を保つ条件じゃないが、この国の比率は異常すぎる。いくら他の条件が満たされたって、これじゃあ均衡がとれるわけがない」
均衡とは、世界を保つための不可欠の条件だ。
不均衡から生じる歪みは、たやすく瘴気と結びつく。結びついたあげくに、ひとの心のあり

ようで、瞬く間に成長してしまうのだ。

育ち過ぎた瘴気は、刺激となって、眠れる瘴の女神に届く。

いまはない、ふたつの月の神々――シイムタールとサイサロールの生み出した瘴気のすべてを浄化し終えるまで目覚めるはずのない女神に――。

もし、その刺激によって、瘴の女神が目覚めてしまったとしたら――そうなれば、世界は終わる。浄化されずに残っている、神々の生み出した瘴気が世界中に溢れれば、命などたやすく消え失せてしまうだろう。

そうさせないために、聖石の使徒はいる。

均衡を保つ者――それが聖石の使徒なのだから。

だが、使徒自身、人間にすぎぬことも確かな事実なのだ。

今回のことのように、男女の数の圧倒的な差異から、不均衡を生み出すこともある。

ただし、これは偶然ではない。

偶然にこんなことが起こるはずがない。

人為的に、何者かが手を加えているのだ――その行為が、世界をも危険にさらしていることに気づいているか否かは別として。

「わたくしどもも不思議には思っておりました。聖石の子供は……そう多くはないとは言え、普通に男女変わりなく生まれてくるのですから」

半眼を伏せ、かすかに唇を噛みしめる様子を見せながら、そう言ったのはセイタの母親である女性だった。

「実際、わたくしの妹も……サラナも聖石の子供として生まれました。赤瑪瑙を抱いて生まれてきたあの子は、わたくしたち家族すべての誇りであり喜びでしたわ。あの子が八つのとき、雷牙の学院からの迎えが来たときも、わたくしたちは喜びこそすれ、疑うこともしなかったのですわ……サラナが気が進まぬ様子だったことに気づいておりながら、わたくしたち家族は、あの子を雷牙に送ることで、彼女がより素晴らしい存在になってくれるに違いないと信じて……あの子がただ家族と離れるのを淋しがっているだけなのだと思いこんで、雷牙からの使者にあの子を委ねてしまったのですわ……」

そこまで話したところで、彼女は堪えきれずに嗚咽を洩らした。

「あの子の不幸を決めてしまったのは、わたくしたちなのですわ……！」

喉も裂けんばかりの声をあげて、セイタの母親は泣き崩れてしまった。

当惑するカーラとセイに、告げたのはセイタの父親である男性だった。

「詳しく、ご説明いたしましょう」

ふたりはうなずいた。

聞くよりほかに、術がなかったからである。

「わたくしどもは、サラナ……サラナゲイダが無事に学院にたどりつき、そうして使徒さまになるべく修行を積んでいたものだと思っておりました」

語られる内容は過去形――つまりはそうではなかったということだ。

語るセイタの母親の顔色は優れない。だが彼女は語るのをやめようとはしなかった。

「けれど、それは違ったのです……ずいぶんと後になるまで、それがどういうことなのか、わたくしどもは知らないままでした。ただ、不審に思ったのは事実です……サラナは……妹は、十四になると同時に使徒に認められる試験を受け、落ちました。それだけなら、多少残念に思うことはあっても、仕方のないことだと思っておりました。不審など覚えはしなかったのです……けれど」

告げられた言葉は、衝撃的だった。

サラナが試験に落ち、その衝撃のせいか、雷牙の学院から姿を消したのだと――学院側から知らせがもたらされたのだ。

「わたくしたちは、必死に学院にあの子の行方を捜してくれるよう頼みこみました。学院側ももちろんだと請け合ってくれたのです。けれど……成果は上がりませんでした」

それどころか――と、セイタの母親は吐き捨てるようにつづけた。

「半年ほどの捜索の結果、どうにもサラナが見つからないと言って、学院は捜索の打ち切りを告げてきたのですわ。それでもわたくしどもは、学院や行政の真心を疑ってはおりませんでした……サラナのことをあきらめたわけではありませんでした。私財を投じてでも、あの子は絶対に捜し出すことを、家族全員が決めていたのですわ……そのころにはわたくしはすでにこちらに嫁ぎ、義理とはいえシオルリイダという娘を得ておりましたが……それでも、たったひとりの妹です。心配せずにはいられなかったのですわ」

妙に思いはじめたのは、そのころからだった――と彼女は言った。

「人捜しなどを専門としている評判の者を雇って、わたくしたち……いいえ、違いますわね、あの時点ではわたくしの両親のなしたことだったのですから……サラナの行方を捜そうといたしましたの。けれど、頼んでしばらく経ったころに、みなが捜査の続行が不可能になったのだと言いだすのですわ。しかも、こちらにも、深入りするなというようなことを告げて、二度と接触が持てないようになってしまったのです。一度や二度ならばともかく、三度目も同じことになったときに、わたくしどもも認めるしかなくなりましたわ……サラナの行方を捜そうとする者に対して、意図的な妨害がなされていることを」

それでも……どれほどの汚濁が隠されているのかまでは、わたくしどもには知りようがありませんでした……。

セイタの母親は、きつく唇を噛みしめて、絞り出すような声をあげた。

「あの日……までは……！」

嵐の日でした――と、彼女はつぶやいた。

望んでやまぬ妹との再会が、あまりにも無残な形で実現された一部始終を、彼女は苦痛を堪えて語ってくれた。

聞いているだけで胸が塞がれるような……それは悲惨な話だった。

3

男は思い出す。
神殿と政治の世界と――どちらがどれだけ高潔なものかと疑問に思わざるを得なかったあの瞬間を。
神殿の中枢部はすでに腐敗していた。
だからこそ、その内の何人かを取りこむことに抵抗も苦労もなかった。
神々の意図を反映する清らかにして美しい世界など、彼の予想通り、この世にありはしなかったのだ。
この世にあるのは汚濁と利欲――。
そればかり。
そう思って足を踏み入れた神殿で、男はひとりの少女に出会った。
歳にして、一回り以上も違う、だがこれまで彼が出会ったこともない特別な異性に。
最初、少女は男に怯えた――身を隠せるほどの場所もない、生け垣に身を隠してしまうほど

に。

混乱していたのだろう。

声を和らげ、出てくるように告げると、少女はこっそりと生け垣の合間から顔を出してきた。

可愛らしく、愛しかった。

その少女が、道具扱いすることにとうに慣れた存在のひとりだとわかってからも、男は混乱させられた。

無条件に愛しいと思わせる存在――。

そんなものが例外的にいても……在ったとしてもいいのではないか。

自分でも矛盾していることはわかっていた。

一般に聖石の子供と呼ばれている存在を、彼はこの時まで……いや、その出会いを果たした後も、役に立つ道具としか見なせなかった。

ただ、少女ひとりだけが、その範疇から外れるのだ。

恋ではなかった。いまでもそうはっきりと言い切れる。

だが、ではどういう存在だったのかと聞かれれば……いまでも答えに詰まる。

父が娘に向ける想い――あるいは兄が妹に向ける想い……そういったものに近いと言えば近かったかもしれない。だが、それらとも微妙に違う心の交流ゆえに、逆に男は持て余してい

た。

利用するのではなく、手に入れるのでもなく、ただ彼女とときおり会うことで、やさしい時間を過ごしたかった。

それは、彼女との間にしか求め得ぬものであったから。

彼女は彼にとって、かけがえのない存在であり、彼女だけは守りたいと、男は本気で思っていたのだ……あの日までは。

偶然、自分とともに神殿の庭を散策する彼女を、この国の王子が見初めてしまうまでは！

その王子は、三人いる王子のなかで、男が次代の王にと後押ししている少年であり――いまではこの国の玉座にある人物だった。

単なる好奇心や興味半分で、彼女を欲しいと言われたのなら、男は曖昧に誤魔化すこともできたろう。

そうではなかったから……タチが悪いのだ。

男がなんとか少女を守ろうと工作している間に、あまり頭脳派とは呼べない少年は、極めて単純にして強引な手口で少女を神殿から略奪した。

しかも、少女を攫ったやり方に意見した男を煙たがり、王子は男ではなく周囲に集う者たちの意見に従った。

結果として、かの少女の命は奪われた……二年を待たずして。

（せめてあの男が、彼女を利用しようなどという気を起こさなければ……）

言っても詮ないことだとよくわかっている。

それでも男は、そう思わずにはいられない。

王子であったあの男が、最初に覚えた純粋な恋情を忘れず、自らの野心のために、彼女の能力を利用しようなどと思わなかったら……周囲からそう唆されたとしても、彼女への愛ゆえに、きっぱりとそれを拒絶できたなら……。

（もしも、そうであったなら……）

あの悲劇は防げたのだろうか。

少女は命を落とす危険を冒すような真似をせずにすんだのだろうか。

自らが幸福になれる道を捜そうとしたのだろうか。

いまとなっては永遠の謎だ。

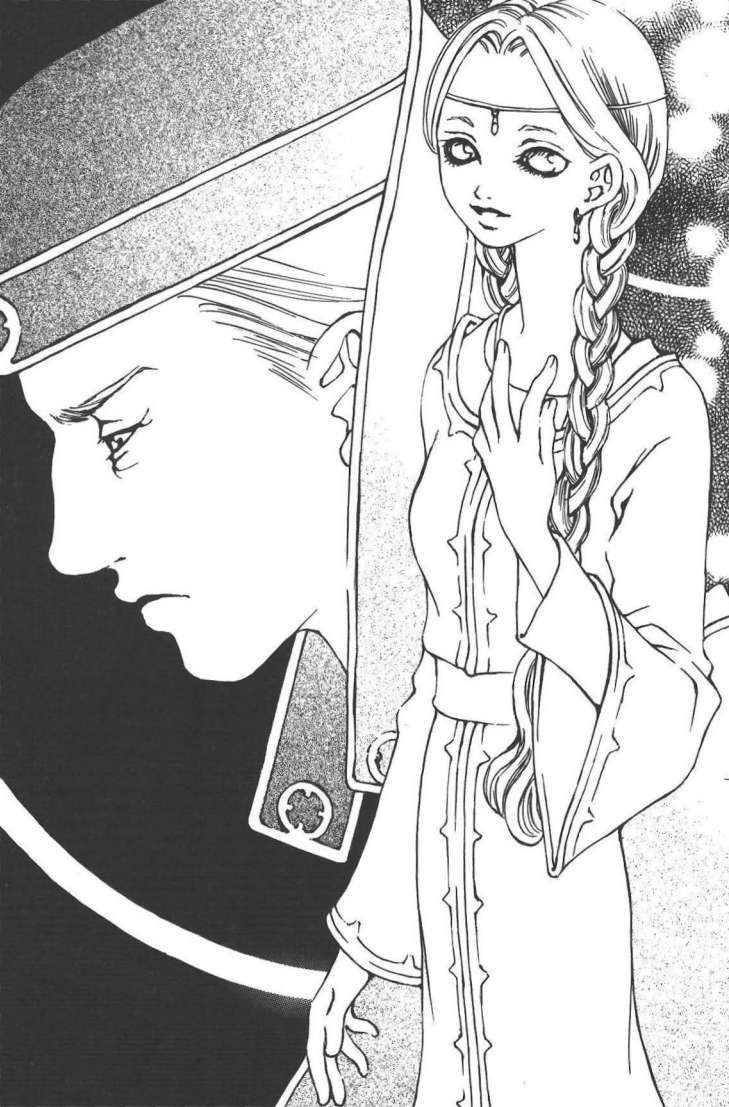
男の脳裏には、いまもあざやかに少女の笑顔と言葉が刻みこまれている。

『とても、大変なことをなさってらっしゃるお方なのですね。あなたに神々の祝福がもたらされますよう……そして、心穏やかに国を導いてくださいますよう……』

わたし、毎日お祈りしますわ。

晴れやかに笑うその顔――寸分の迷いもなく言い切る言葉。

彼女は……サラナゲイダには、確かにそう言い切った言葉を相手に納得させるだけの力があ



り、余裕があった。
その強さに惹かれたのかもしれない。
だが、現実として、自らが彼女に与えた負担はなんと大きいことか――！
だからこそ、彼女の残した子供だけは守りたかった。
事実、その子供が死んだように偽装し、追手の目を晦ませたのは彼だった。子供は無事にかの王子たちの目から逃げおおせられるはずだった……。その子供が聖石の子供でさえなかったら。
だが、その子供が抱いて生まれてきた聖石ゆえに、追手たちは子供の生存を確信し、行方を捜しはじめたのだ――聖石の子供が生きている限り、半身たる聖石も消えぬという絶対の真理ゆえに。
（今度こそ、この悪しき因縁を断ち切ってやろう……）
そう声なくつぶやきながら、男は目を閉じた。
保身に走るつもりは皆目なかった……。

いまから数えて七年前の……嵐の夜のことだった。

風神イーオダールとその子供たちの全員が、この地に集い、猛威を奮っているかのようなひどい嵐の夜だった。

ドン、ドン、ドン、と――。

屋敷のドアを叩く音も、そうした風が運んだなにかがぶつかる音に聞こえた。

ドン、ドン、ドン。

ドン、ドン、ドン。

カザルゼイタ――セイタの母親であるひとの名前である――がその音を耳にしたのも偶然だった。

そのころ、彼女は現在の夫である貿易商、ノイリーズ・バルタガン氏に嫁いで一年が経ったばかりだった。

最初に決められた相手ではなかった。サラナの捜索を何度も繰り返し神殿に申請したがために、カザルゼイタの実家は神殿の不興を買ってしまい、それを理由に最初の婚約を相手から破棄されてしまったのだ。

それでもカザルゼイタは、二度目の相手との生活を受け入れていた。

年こそ離れてはおり、彼にとっては二度目の結婚で、しかも亡くなった先妻との間に生まれた娘――これがシオルリイダだ――もいたが、ノイリーズは理解も想像力もある伴侶で、一般的には使徒になれなかったせいで行方をくらますなどという、はた迷惑な行為に走ったとされ

るサラナに対しても、決して見下すような態度を示さなかったためだ。

また、シオルリイダもカザルゼイタを慕ってくれた。紅水晶を抱いて生まれた子供の持つ資質として、少女は大変に優しく、思いやり深く、しかも柔軟な心を持っていた上に、ふたりは大変気が合ったのだ。さらにつけ加えるなら、聖石の子供がいわゆるところの聖者、聖女とは違うことを、カザルゼイタが身をもって知っていたこと——その結果、シオルリイダに対する深い理解を示したことが大きな意味をもって作用したのかもしれない。

だから、この夜も、自分を呼ぶような声が聞こえたと感じたのは、シオルリイダの寝台で、添い寝しながら、古い物語を話して聞かせている途中のことだった。

（呼ばれている……？）

理屈もなにもなく、そう感じ取り、むくりと彼女が身を起こしたとき、義理の娘であるシオルリイダは、不思議そうに首をかしげて見上げてきた。

「どうしたの？」

呼ばれているような気がするのだとは、答えられなかった……そこまで言い切れるほどの確信はなかったのだ。

ただ、気になって仕方なかった。引き寄せられるような気がして、仕方なかったのだ。

焦点は、ただのひとつ——一点。

呼ばれている——玄関！

「わたくしを……呼んでいる……！」
熱烈に、必死に、真摯に――。
「わたくしを……」
聞こえそうで聞こえない、不可聴な、それでいて絶対の声。
「お義母さま……？」
不思議そうに自分に声をかけてくるシオルリイダに、ごめんなさいとつぶやいて、彼女は部屋着の上掛けを羽織って立ち上がった。
「ちょっと……玄関のほうで音がするから見てくるわ。もしかしたら、お父さまがお帰りになったのかもしれないから……普通なら、こんな嵐の夜にわざわざ急いで帰って来られるような方はいないはずなのだけれど……」
くすくすと、シオルリイダが笑いながらうなずいた。
「そうね、お父さまはわたしとお義母さまに会うためなら、嵐のなかだって平気で帰ってらっしゃいますものね。せっかくの上等のお召し物が、そのせいで何度駄目になったことかしら……ラーナたちは、そんなことになるぐらいなら、慌てて帰ってくることはないとか言っているけれど、それは仕方のないことよね？　だってお父さまはお義母さまとわたしのことを、世界で一番かけがえなく大切に思ってらっしゃるんですものね」
「そうね、その通りだわ」

答えながら、カザルゼイタは継子である娘に、すまないと思った。
彼女はそれが、決して夫であるノイリーズでないことを確信していたからだ。
「お父さまが帰ってらっしゃったのなら……わたしもお出迎えしたいわ。……駄目？」
上目遣いに、シオルリイダにそう問いかけられ、カザルゼイタは小首をかしげて微笑んだ。
「本当に、それがお父さまだったら……ね。そのときは、ラーナに知らせるわ。彼女はわたくしたち以上に、お父さまに甘いから、きっとお父さまの言葉には逆らえないことだし……」
くすくす、とシオルリイダが笑いながら言葉をつづけた。
「そのお父さまの泣きどころがわたしたちふたり、なんですものね」
「そういうことよ」
茶目っ気たっぷりに、軽く片目を閉じて見せると、シオルリイダは悪戯をたくらむ子供のようにくすくす、くすくすと笑った。
「じゃあ、ちょっと行ってくるわね」
カザルゼイタの演技に気づくことなく、少女は「はい」とうなずいた。
気取られぬよう、ゆっくりと寝室の扉の把手に手をかけた。
指先が……ぶるぶると震えていた。
恐ろしいもの、そして冷たいもの……。
そうとしか表現できないなにかが、近づいていることを感じながら、カザルゼイタは後ろ手

にシオルリイダの寝室の扉を閉めた。
感じるもの、そこから導き出される答え――。
なにもかもが、怖かった。

4

間違いない、とカザルゼイタは思った。
間違うはずがない。間違えるはずもない。
そんなことができるはずもない。
わかりきっている……間違いない……あれは、あの声はサラナだ！
ほかには考えられない！
彼女は玄関に走った。
そうして、扉を開けたのだ。
そして、確かに自分を訪ねてきたその人物の様子を目にしたとたん、衝撃のあまり、彼女は全身から力という力が脱けてしまったかと思った……。
そこに立っていたのは、彼女のよく知る妹——いや、彼女がよく知っていた当時のサラナゲイダではなかったのだ。
美しくまろやかであった体は、まるで枯れ枝のようにやせ細っていた。肌の色も尋常でなく

悪かった。つややかであったはずの蜜色の髪の半分近くは、灰色を思わせる艶のない白に変わっていた。

詳しいことを尋ねずとも、いかに過酷な運命が彼女の身を襲ったのか――その姿だけで充分すぎるほどにわかった。

「姉さま……姉さま、姉さま……っ！」

痩せ衰えたその体のどこに――と思うほどの力で、サラナゲイダはカザルゼイタの両手を摑んで叫んだ。

「あの子を助けてっ！　あのひとたち……同じことを繰り返そうとしてる……っ！　わたしのように道具として扱おうとしてるの……お願い、お願い、助けて……っ！」

正気を手放す一歩手前の者特有の迫力で迫られ、カザルゼイタは妹を落ちつかせるためにうなずいた。

「わかったわ……わかったから、すこし落ちつきなさい」

サラナゲイダに休養が必要なことは明らかだった。

そうして、ようやくのことでそこまでたどりついたことで、サラナゲイダ自身安堵を覚えたのだろう、やせ細った少女は――当時、彼女はまだ十六だったのだ――がくりと脱力した。

カザルゼイタが悲鳴をあげたのは、意識を失った妹のそばに駆け寄ったときのことだった。嵐のせいで、サラナゲイダの身につけている長衣は泥にまみれ、汚れきっていた。だから、

すぐには気づけなかったのだ。

激しい雨が、それを洗い流していたのも原因のひとつと言えたかもしれない。

だが、そんなことは言い訳にはならない。

サラナゲイダは大量に出血していた——それも、両足の間から。

バルタガン家の主治医を急ぎ呼び出した結果、それが産後の充分な休養を取るべき時期に体に無理な負担をかけた結果なのだと知れた。

そして、医師はこうも言った。

ここまで衰弱しきった体では、完全に回復することは不可能だ、と。

事実、意識を取り戻したサラナゲイダもそのことは承知しているようだった。

自分が助からないことを厳然たる事実として受け止め、その上で彼女は姉であるカザルゼイタに自分の知ったこの国……璃楽の裏側の事情を語ったのである。

「姉さま……この国は間違ってしまったわ……聖石の子供はすべからく、神々の……この世界のために生まれて生きるはずなのに、あのひとたちは、そうは思わないの……自分たちの持ち物だと思ってるの……。世界のためではなく、あのひとたちの役に立つ駒に仕立てようとしているの……」

衰弱しきった体のせいで、頻繁に発作を起こしながら、サラナゲイダは姉に訴えた。

「あのひとたちは……聖石の子供を利用できると思ってるの……自分たちに都合よいことを教

えこんで、それでいいように操れるんだって……でも、使徒と認められてしまったら自分たちでは手出しができなくなってしまうから、だから……っ！　姉さま！　わたしのことではないわ！　でも、わたしなんかよりずっと、尊い使命を持って、使徒として働くべきひとたちはいるのだと思うわっ！　けれど、あのひとたちは、そんなひとたちまで支配下において操ろうとしているの……！」

お願い――と、サラナゲイダがささやいた。

「お願い、どうかそれだけは止めて……いいえ、それが無理なら、その事実を姉さまたちだけでも知っておいて……」

もちろん誓う、とカザルゼイタが答えた瞬間、サラナゲイダは心底からの嬉しそうな笑顔で礼を述べ、そうして数刻後、息を引き取った。

弔いのために、妹の様子を整えたカザルゼイタは、骨が浮き出るほどにやせ細った妹の体に絶句し、次いで憤激の涙を流した。

その年頃の少女とは、到底思えぬほどに、サラナゲイダは衰弱しきっていたのだ。

「憎しみでひとを殺せるものならば、と……あの時ほど願ったことはありませんでしたわ」

両目に浮かんだ涙をそっと拭いながら、カザルゼイタがそう話を結んだ。

「だから上のお嬢さんを船に乗せて逃がし、セイタ嬢に至っては、聖石の子供であることすら隠されたわけですね？」

うなずきながら、そう問いかけたセイに、答えたのはノイリーズだった。

「最初からそうしようと思っていたわけではありません。サラナの言葉が真実なら、大変なことです……我々はそれを調べ、事実であれば公表しようと思いました。ですが……」

言葉をとぎらせた彼の表情は暗かった。

一権力者が相手ならともかく、国を相手に、そんなことがかなうはずがない。

「妨害されたのでしょう？　それとも、もっとはっきり脅迫でもされましたか？」

問いかけるというより、事実を確認するための言葉を口にしたのもセイだった。

カーラは無言のままだ。

真白の面に感情の色はなく、漆黒の双眸は冷やかな光をたたえるばかりだ。

それでも――伊達に彼女と組んでいるわけではない。セイにはカーラが心底怒り狂っているのがわかった。

彼女はかつて、似たような事情で幼なじみの少女を喪ったことがある。

穏便な解決法が、今回用いられることはないだろう――などと考えていたセイに、カザルゼイタが縋るような目を向けて頼みこんできた。

「使徒さま……どうか、このことを、一刻も早く樹翁のほかの国へお伝えください！　わたくしどもではだめなのです……信じてもらえない……他国がわたくしどもの言うことを信じたりしないよう、すでに璃楽は根回しをすませているのです……ですが、使徒さまのお言葉であればきっと……ですからっ！」

お願いします――。

「わたしからもお願いいたします」

ノイリーズはそう言い、さらにつづけた。

「さらにお願いさせていただけるなら、その際、どうかセイタを一緒に連れて行っていただきたいのです……」

「それは……あの子が聖石の子供だからですか？」

セイの問いに、一瞬目を瞠ったノイリーズは、しかしすぐにうなずいた。

「そうです……ですが、あの子をシオルリイダと同じ方法で逃がすことはできないのです……あの子は、樹翁の外に出ることができないのですから……」

悄然とうなだれた様子で、ノイリーズは告げた。

「あの子が持って生まれた聖石は、わたしどもの手元にはありません……あの子を何とか取り戻すことが出来たとき、すでにあの子の聖石は、取り上げられ、どこかに隠されてしまっていたのですから……！」

最初の聖石――その手に握って生まれた石との絆ほど、強いものはないと言われる。事実、聖石の子供は聖石を『握って』生まれてくるわけではない。それは体の一部と融合した形でその子供がそうであることを示すのだ。

真実の愛情をその子供に注ぐ者の手によってのみ、聖石は肉体になんの傷も残すことなく取り上げられる。

だが、そうではない者には、決して無傷で赤子と聖石を切り離すことはできない。

そう、無傷では。

「ひょっとして、セイタ嬢は……？」

セイの放った言外の問いに、カザルゼイタがこくりとうなずいた。

「サラナの子供です……あの子の右腕の付け根には、肉ごとえぐり取られた傷痕が残ってます……わたくしどもがどれほど隠していても、向こうはその絆を利用して、いつあの子を呼び寄せるかわからないのですわ……」

ですから、お願いするのです――と彼女は重ねて言った。

「あの子が樹翁を離れられないのは……仕方ないかと思います。けれど、サラナゲイダと同じ轍だけは踏ませたくありません……結局は肉親の無事を優先するのかと言われれば、その通りだとしか答えられませんが……それでも……」

あの子までもを不幸にするわけにはいかない。

せめてあの子には幸せになってもらいたい。
きっと、他にも、同じ理由で不幸になっている子供たちは数えきれないほどにいるのだろうけれど――それでも。
「おかしくなんかない」
言い切ったのはセイではなく、カーラだった。
ずっと沈黙を守っていた美女は、冷やかな表情のままこう宣言した。
「女子供を道具扱いするようなやからが権力を握ることほど、タチの悪いことはない……心配は要らない。あたしたちは、そのためにいるんだから」
大丈夫――そう言い切って、カーラは初めてにこりと笑った。
あでやかで美しいはずのその笑みに、バルタガン夫妻はなぜか困惑したような顔になり、次いで慌てて「よろしくお願いします」と頭を下げた。
一方セイは、胸中で息を洩らしていた。
（……大騒ぎになりそうだな……）
カーラと組んで以来、この手の予感が外れたためしがない事実を噛みしめながら、彼はそっと目を閉じた。

「一例だけで判断するのは危険だぞ？」

歯止めになるとは思えなかったが、一応セイはそう忠告した。

「一例で充分だろう？　こういうのはアブラムシと一緒で、ひとつ見つかればその三十倍は被害があるもんだし」

真理である。

ついでに言えば、自分たちに話が回ってきた時点で、それどころではない被害が生じているに違いないことがわかっている。聖石の使徒のなかにあって、自分たちは特殊な立場に置かれており、大きな事件――ことによれば、瘴の女神が目覚めかねないほどのそれ――にしか係わらないのだ。

聖石の使徒は国には束縛されないが、だからといって完全に自由な身の上ではない。貴石を生み出す大地の女神――アスカニーリを司る神殿に籍を持つ。ただし、彼らの場合、籍を置いているのはアスカニーリのそればかりではない。珊瑚の使徒ということで、海神アイルトーリの神殿の一員でもあるのだ。

ふたつの神殿に籍を持つのは、珊瑚と真珠の使徒のみである。

そんな彼らに命令が下るのは、派遣の必要ありと両神殿が認めた場合に限られる。ほかの聖石の使徒に比べ、数の少ない彼らは、それに反比例してか、強大且つ特殊な能力を持っている

ことが多いせいでもある。
　そのなかにあってすら、カーラとセイは特殊な人物と見なされている。治癒系の能力を持つ者が多い珊瑚の使徒のなかにあって、ふたりは優れた攻撃力を誇っているのだ。
「そいつはわかってるが、さすがに一例だけってのはまずかろうよ。後で面倒が起こらないとも限らない。私情に走っただのなんだのと難癖をつけられるのはお前も遠慮したいだろう？」
　セイの言葉に、カーラは小さく笑って答える。
「そんなに心配するこたあないよ。あたしだって、査問会にかけられるのは御免だからね……心配しなくても、ちゃあんと考えてるさ」
　どうだか、とはセイの内なる声であったが、彼は賢明にもそれを声に出して相棒に伝えることは控えた。
　そんな彼の前で、カーラは懐から小さな革の袋を取り出した。
　紐で縛った口を開け、彼女はその中から米粒より少し大きい程度の、楕円に近いものをつまみ上げる。
　淡水真珠だ。
　しかも、ただの真珠ではない。
　セイは呆れて肩をすくめた。
「お前……それ、『聖石の子供石』だろう……？　袋の中身が全部それか？　よくケチな神殿

が放出してくれたもんだな」

聖石の使徒は、その能力を発揮する際、抱いて生まれてきた貴石と同じ種類の石を生み出すことができる。

それを『聖石の子供石』と呼ぶ。

生まれるときに抱いてきた石ほどではないが、この子供石にも、通常では考えられないほどの力が宿っているため、お守りとして高額で売買されることも多い。実のところ、これらの売り上げが、神殿の財政を半分程度は助けていたりする。

聖石の子供を集め、教育するための施設が各地で整えられているのも、この財源あってのことだ。

それだけに、神殿は子供石の管理に厳しい。お守り以外の用途で用いた場合、まず子供石は消失してしまうものだから、なおさらと言える。もっとも、お守り以外の用途があるからこそ、使徒たちが子供石を必要とすることも多いわけだが。

「神殿がこんな大盤振る舞いしてくれるわけないでしょうが。これはマウリザーニからの餞別だよ」

けろりとして答えるカーラに、セイは呆れた。

聖石の使徒は、神殿から依頼された仕事をこなすことで報酬を得る代わりに、子供石についての所有権を――事実上――放棄することになっている。つまり、自らの能力を発揮する際に

生じる副産物である子供石は、自らが必要だと認めた数量を除いて、神殿にしか買い取りを望めないのだ。

早い話、カーラの言うところの『餞別』とは、真珠の使徒マウリザーニからの、規約に反した横流し品ということになるのだ。

「お前……そんなあっさりと……」

思わず脱力してしまったセイの心中を知ってか知らずか、カーラはくすくす笑いながら、なおもこうつづけた。

「別に金子を払って買い取ったわけじゃないよ。ちゃあんとあたしの子供石と交換したんだ。ただ、あたしらの無事と仕事の完遂と璃楽の平和を祈って、盛大に泣いてくれたからね、あの子は。涙もろいあのこの涙が真珠になるだなんて、本当によくできたもんだよねえ」

そこで笑ってすませるな――と、セイは言いたかったが、すでに起こってしまったことをなかったことにはできない。

「まったく、お前ときたら……なんだってわざわざいたいけな子供に、罪を唆すような真似ばかりするんだ？」

この言葉には、さすがにカーラもかちんときたらしく、思い切り顔をしかめた。

「人聞きの悪い……誰がなにを唆してるっていうんだい？　あたしはただ、綺麗で可愛い子が好きで、だからそういう子の世話をしてるだけじゃないか。これだって、多すぎるって言った

んだけどね……お守りに貰ったようなもんだ、あんまりうるさく言うんじゃないよ」

開き直ったとしか思えない、遵法精神皆無な台詞――いや、あくまでこれは神殿の規約であって法ではないわけだから、この言葉は当てはまらないのかもしれないが――を耳にして、セイは思わず大きく息をついた。

言ってもどうしようもないこととというのは、現実に存在するのだ。

「……水を、用意してくる」

あきらめて、そう告げたセイに、カーラは「わかってるじゃないか」とでも言いたげな笑みを浮かべて「頼むよ」と答えた。

セイが用意した真水をたたえた容器のなかに、カーラは『聖石の子供石』である淡水真珠を沈める。

そうして彼女は海の女神アイルトーリを通じて、その子供神たる水神カンラタールへの助力を祈り、願った。

祈りと願いは神に届き――神々としても、璃楽における不正を許しがたく思っていた証と言えるかもしれないが――清水を張った陶製の器のなかで、聖石の子供を食い物にするための合

議を固める璃楽の中枢の者たちの姿と言葉が再現される。
「最低」
冷やかにつぶやきながら、カーラがちらりとセイに目を向けた。
「わかったよ」
うなずきながら、彼が容器に放りこんだのは、血赤珊瑚の小さなかけら……セイタマールが抱いて生まれてきた聖石――血赤珊瑚の子供石とさえ呼べない、小さな、小さなかけらだった。
すべての珊瑚のなかで最高と称される血赤珊瑚には、かけらとはいえ、充分すぎる力が与えられている。
それがたとえ、かけらに過ぎなかったとしても、だ。
すべてが終わったとき、カーラは確信犯の笑顔でこう言い切った。
「ほうら、証拠は揃ったじゃないか。これでうるさい爺どもの口は封じたね……結構」
そうして彼女は晴々と笑った。
それが、破壊神の笑みであると、悟ったのが相棒であるセイひとりだったという事実は、はたして幸運だったのか、それとも不運だったのか。
それは、誰も知らない。

5

翌日にも、璃楽の首都――青藍を目指して出立しようとしていた夜、騒ぎが起こった。

前触れもなにもなく、セイとカーラの宿に、カザルゼイタが訪れたのだ。

招外で有名な貿易商であるバルタガン家の夫人は、なぜか周囲を憚るように、頭巾を深く被り、顔が見えない装いで彼らを訪ねてきた。

近づいてくる気配でもって、それが誰かを看破していたカーラとセイは、しかしカザルゼイタを目にしたとたん、眉宇をひそめ、すぐさま部屋に招じ入れた。

彼女は濃厚な、血臭を放っていたのだ。

部屋に入るなり、彼女の体からがくんと力が抜け、その場に倒れこむ――のを、止めたのはセイの屈強な腕だった。

「寝台を」

短く告げるセイの言葉を待つまでもなく、カーラが安静になれるよう、自分が使っていたそこの毛布をめくる。

カザルゼイタを寝台に横たえると同時に、なにかが音をたてて飛来するのを察したセイが、空中でそれを受け止める。

カーラが貰ったという『餞別』の入った革袋だった。

「傷の具合はあたしが見るよ。あんたはそっから取り敢えず赤瑪瑙と……そうだね、念のために真珠を何粒か選んでくれ」

「お前……」

と、セイは呆れたように言いかけたが、結局それ以上言葉にはしなかった。

いったい何人の友人やら知人から、どれだけの不正な『餞別』を貰ったのかと尋ねるのは、確かにこの場にあっては無意味なことだったからだろう。

一方、カーラはその間にもさっさとカザルゼイタの外套の前を開き、その傷の状態を確認していた。

あちこちに走る切り傷は、いずれも致命傷ではなかった。だが、唯一危険な傷があった。カザルゼイタの下腹部には、短刀が深々と突き刺さっていたのだ。

それを抜かぬままに、外套で隠したまま、この宿まで駆けつけたという一点からも、カザルゼイタが大変な胆力の持ち主であることがわかる。

刺し傷の場合、凶器である刃は抜かずにおくことが肝要なのだ。内蔵が傷つけられてしまった場合はどうしようもないが、そうでなければ、抜かないことで、大量の出血を防ぐことがで

きる。

だが、知識でそうと知っていたとしても、自らの肉体に刃が突きたてられたままでいることは難しい。よほどに戦い慣れた者でもなければ、恐慌状態に陥り、自らの命を縮めるとも知らず、必死に刃を抜き取ってしまおうとするものだからだ。

しかも、それを隠したまま、ここまで来るとは……。

尋常な精神力ではない。動くことで刃が内蔵を傷つけることだってあるのだから。

屈強な戦士なら、筋肉を緊張させることによって、刀身を固定することもできたろう……それができたとしても、動くたびに襲う激痛は逃れ得ようはなかったが。

カザルゼイタは戦士ではない。鍛え上げた肉体も、修羅場をくぐりぬけた経験も持たない。

それでも、彼女は戦士なのだと——カーラは思った。

守ると決めた相手を守りきるためには、自らの命を削ってでも戦いつづける——武器を持つことだけが戦いではない。

カーラは感じ取っていた——カザルゼイタを包む死臭の気配に。

それは彼女の死を予感させるものではない。すでに死してしまった誰かのそれが、彼女に付着しているのだ。

それが誰のものであるのか——考えるまでもなかった。

ノイリーズ・バルタガン。

壮年のあの男は、すでに黄泉路をたどっている。
なぜ、こんなことになってしまったのか――それすらも……たやすく読み取れる。
きり、と唇を噛みしめながら、カーラは相棒の名を呼んだ。
「セイ！」
「わかってるよ」
そう答えながら、男が差し出してきたのは部屋においてあった安物の茶碗だ。
それを満たすのは、なんとも不可思議な色彩と光沢を放つ液体だった。
真珠と赤瑪瑙を溶かした薬湯――本来ありえぬそれは、聖石の子供石を用い、使徒が作った場合にのみ実現する。
受け取り、カーラはカザルゼイタに声をかけた。
「ちょっと苦しいけど、我慢して」
そうして彼女は湯飲みの中身を口に含み、次の瞬間、カザルゼイタの下腹部に突き刺さっていた短刀を引き抜き――その傷口に薬湯……いや、霊薬と呼ぶべきか……を送りこんだのだ。
赤瑪瑙には、止血の力がある。
真珠には、解毒と浄化の力がある。
聖石の子供石に宿る力を思えば、その効果のほどは……覿面である。
意識を失う寸前、カザルゼイタはふたりにこう告げた。

「セイタを……シャラクセイタをどうか……あの子はなにも知らないのに……なにひとつ修行だって積んではいないのに……璃楽を包む瘴気を浄化させるためにはあの子が必要だと……そう言って……あの男たち……っ！」

「わかった」

短く言い切り、カーラはカザルゼイタの手をそっと握った。

「絶対に、セイタはそいつらの好きにはさせない……必ず無事に、あの子は連れ戻してみせる。だから、あなたは、ここで養生しながら、あの子が帰って来るのを待っていなければならない……わかるな？」

問いかけられて、カザルゼイタはきょとんとした顔になった。

極度の貧血状態のせいで、正常に思考が働かなかったのかもしれない。

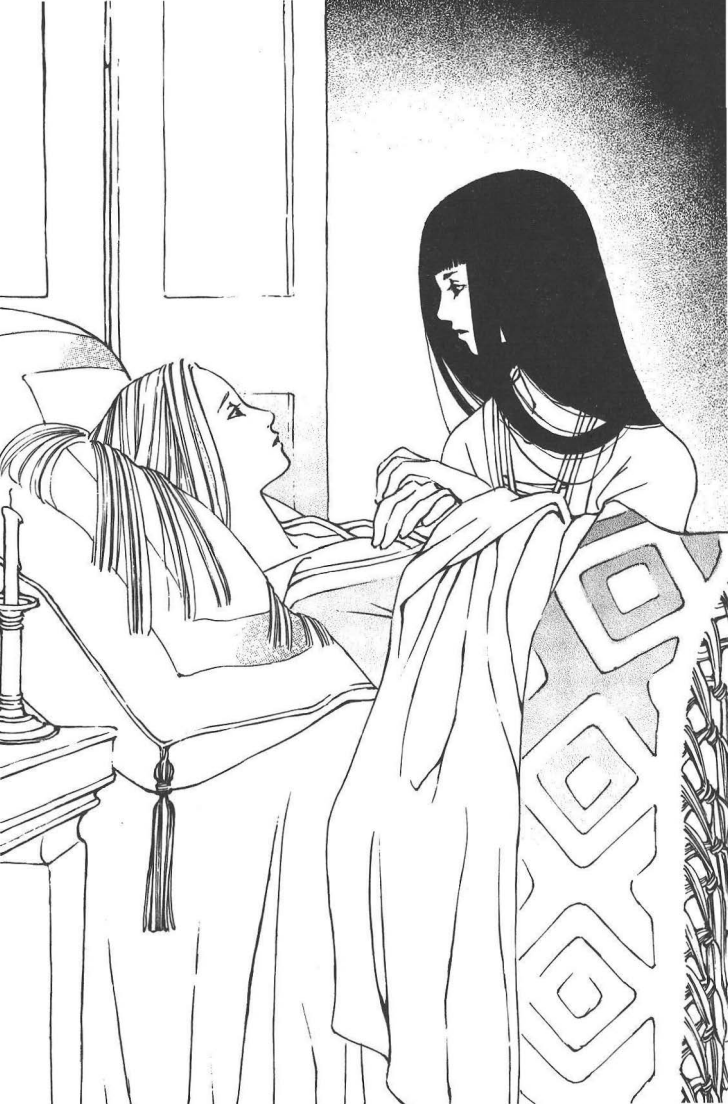
また、そんな彼女に対して、カーラも「自分を信じろ」とは言わなかった。

「あの子にとっても、あなたは大切なひとだ。あたしらは絶対、必ず、あの子を取り戻して、ここに連れてくる……だから、いいか？　あなたはここで体を休めなくちゃならない……わかるか？　わかるね？」

カザルゼイタは素直にうなずき、安心したように瞼を閉じた。

それを見届けた上で、カーラは気配を変えた。

もともと、璃楽における不正に関し、相当の怒りを覚えていた彼女であったが、この出来事



はその限界を越えていた。

「他人を食い物にする根性自体、気に喰わないってのに……遅まきながら、自分たちでどうにかできる範疇を越えて瘴気が強まったもんだから、今度はそいつを解決できるやつ、誘拐してでも手に入れて片付けさせる……？　そこまで性根の腐ったやつの治める国なんか、滅んだところで痛くも痒くもない……よねえ？」

怒髪天を衝く――ばかりのカーラの問い掛けに、歯止め役になりそうでならない相棒の青年は、ぼそりと洩らした。

「国そのものが崩壊しない程度なら……大丈夫だと思うぞ？」

どっちもどっちの二人連れなのである。

男は、自分に断りなく強行された行為に眉をひそめた。

警戒はしていた。いざとなれば、それを妨害する手だても考えてあった。

だが、男がそうするよりも早く、焦りに駆られた男たちは、最も単純にして乱暴な方法で、自らの望みを果たそうとしたのだ。

ただひとりの少女を手に入れるためだけに。

（愚かなことだ……）
思ったが、口には出せない。
それは仮にも主と仰ぐ相手を批判することになるからだ。
一度不興を買って以来、相手は自分に警戒を忘れなくなった。
そうとわかっている以上、むざと相手に本音をさらすわけにはいかないのだ。
（こうなれば……）
自分にできることはひとつしかない。
（今度こそ、あの子供を完全に解放してやるためにも……）
心を決め、男は微笑んだ。
そういう死に方も、悪くはない……。
自らが始めた行為だった。
だが、途中で男は舵を失った。
心に迷いが生じたことで、それ以上舵をとりつづけることができなくなったのだ。
（ならば……）
裁かれるのも一興だと、男は思った。
それだけのことをしてきた自覚は、彼にはあったのだ。

セイタは困惑していた。

なにが現実で、なにが夢なのか、わからなくなってしまったせいだ。

（お父さまがいて、お母さまがいて……それで招外でみんなで仲良く暮らしていた……はずなのに……？）

なのに、気がつけば、そばにはお父さまもお母さまもいなかった。

ぼうっとしていて……気がついたら、これまで見たこともない場所に連れて来られていたのだ。

しかも、お父さまやお母さまのことを聞くと、ここの人達は「夢を見ていたんだね」と言うのだ。

お父さまもお母さまもいない——いなかった。それが本当のことなのだと、そのひとたちは言うのだ！

そして、畳みかけるように、こう続けてくるのだ。

お前には、大地の悲鳴が聞こえるだろう——と。

確かに聞こえる。それが大地の上げる悲鳴かどうかはわからないけれど、でも、どうしようもない違和感は覚える。感じる。

けれど、だからと言って、それをどうにかすることなんて、セイタにはできない。
（出来ない……出来ないよっ！　だってわたしはなにも知らないし、第一お姉ちゃんみたいな聖石の子供じゃないんだし……！）
そう訴えたのだが、周囲のひとたちは聞いてくれない。
「なぜ、そんなことを言う？　忘れてしまったわけではないだろう、お前は特別な聖石の子供なのだ。その証拠に、ほら、ここにお前が抱いて生まれてきた聖石がある……手を出してごらん」
そんなことを言われても、すぐには信じられなかった。
だが、そう告げた男の右手に握られたなにかが、とても気になったのは確かだ。呼ばれているような……そんな気がしてならないのだ。
「ほら」
と、もう一度促され、セイタはそろそろと手を差し出した。
男が、彼女の手にそれをぽとりと落とした。小さな革袋のなかから、より強くなった呼びかけを感じ取り、セイタは中身を取り出した。
それは、彼女の親指の先ほどの大きさの真珠――クリーム色よりもっと黄味の強い、金真珠と呼ばれるものだった。
「あ……」

触れた瞬間、セイタは男が告げたことが嘘ではなかったことを知った。
それは間違いなく、彼女の分身だった。自分とともに生まれてきた自分のものだということが、ただわかったのだ。
けれど、同時に耐えがたい苦痛が彼女を襲う。
自分のものであり、自分とともにあるべきだった真珠は、生まれて間もなく無理やりに半身から引き離され、見知らぬ者たちの手に渡った際の衝撃や恐怖、苦痛や絶望を、あまさず伝えてきたのだ！
セイタの、なんの修行もつんでいない心に、真珠の放つ感情は強烈すぎた。
しかも真珠は……本来聖石であるはずのそれは、七年もの間、半身と引き離されていたせいでほとんどの力を失い、邪気とでも呼ぶべきものの影響を受けていたのだ。
「あ、あ……っっ！」
心臓を鷲掴みにされるような痛みを覚え、セイタは目を瞠った。
（苦しい……痛い……なに……なんなの……!?）
たまらずその場に膝をついてしまったセイタを、男が苛立たしげに怒鳴りつけた。
「なにをしてる!? 早く、この地に巣くう瘴気を浄化するのだ！ それほど大粒の真珠を抱いて生まれてきたお前なら、これぐらいのことはやれるはずだろう!? もっと小さな聖石しか持たなかったサラナゲイダだって、さまざまな瘴気を浄化したのだから！ だいたいお前が

攫われたりしたせいで、わたしがどれほど捜し出すのに苦労したと思ってるのだ!?　わたしとサラナゲイダの血を引くこの国の王女として、率先して力を振るおうとは思わないのか!?」

身勝手この上ない言い分だったが、頭がぼうっとしたセイタには、そのこともよくわからない。

男の言うままに、しなければならないような気さえしていた。

けれど……そうしたくても、体が動いてくれない。真珠の悲鳴はやむことなく彼女を苛みつづけ、耳を塞いでも直接頭のなかに響きつづけるのだ。

知らず、セイタの両目に涙が溢れた。

どうしていいのかわからない。

ただ、ただ、辛くて苦しくて……痛くて……。

「きゃあぁぁっ！」

痛みに押しつぶされ、そのまま力を暴走させかけたセイタの耳に、聞き覚えのある声が飛びこんできたのは次の刹那――。

「セイタ！　受け取れ！」

カーラの声だった。

飛来するものに手をのばしたのは、ほとんど無意識の……本能的な判断だった。

このひとなら信じられる。信じていいのだと、直感で確信したのだ。

飛んできたのはセイタの小指の先ほどの黒玉だった。
触れた瞬間、真珠からの声が小さくなったような気がした。いや、違う。真珠自身が訴えていた怒りや苦痛、憎悪が宥められたのだ！
半身の悲鳴から解放されたセイタは、けれどそれ以上意識を保つことができなかった。あまりにも強烈な真珠の感情は、彼女の心を限界にまで追い詰めていたのだ。
セイタは意識を手放した……。

「なんだ……なんなんだ、お前たちは……っ!?」
突然現れた——その際屋敷の壁が盛大に破壊された——侵入者ふたりを前に、狼狽しきった様子で誰何したのは、セイタを怒鳴りつけていたあの男だった。
ふたりは答えない。
そのことに苛立ちを覚えたらしいその男が、尚も声を張り上げようとしたとき、それを止めた男がいた。
五十代も半ばだろうか……金褐色の髪に白いものが見えるその男は、璃楽の宰相にして第一権力者と見なされる人物男——ダンダローヌ・ギルバニアだった。

彼は、混乱しかけているらしい男に、静かに、
「陛下、どうかお気をお鎮められて――」
と告げた後、ふたりの侵入者に穏やかですらある眼差しを向けた。
「ひとの屋敷を訪れるには、いささか非常識な時刻と手段だとは思わないかね？」
若く無能な王の代わりに、自分こそがこの国を――璃楽を支えているのだと、自負している男だった。
四十にして宰相の座につき、多くの味方をつくりながら、この国のためになることを実行してきたという自信を、彼は持っていた。
現に、一度彼を煙たがり、遠ざけようとした現国王も、二年を待たずして彼を再び近くに呼び寄せた。
それだけの実力と実績が彼にはあった。
そのように振る舞ってきたのだ。
「先に無体を働いたのはそちらだろう？」
無愛想にカーラが答えると、ダンダローヌは意外そうに目を瞠った。
「わたしが？　いったいどんな無体を働いたと……？」
彼にとって――いや、その屋敷において、カーラとセイは紛れもない侵入者であったというのに、彼はまるで客人に対するかのような態度で問いかけた。

「まず、聖石の子供を私物化した」

カーラの指摘に、彼は動じなかった。

「別に璃楽に限ったことではないだろう？　使徒と認められた聖石の子供たちが、神殿の籍に入る、入らないは自由意志に委ねられていたはずだと記憶しているがね？」

それはまさにその通りだった。

だが、カーラは冷やかな態度を崩すことなく、次の言葉を繰り出した。

「だが、その自由意志に薬物で干渉したとなれば話は別だ。さらに言うなら、神殿の上層部に、自分にとって都合のいい人材ばかりを送りこむ所業もな。使徒となるのに充分な資質を持つ者が……しかも女性ばかりがふるい落とされる。子を生める女に限って……お前は世界の理がわかっていないらしい」

それでもダンダローヌは怯まなかった。

「世界の理……？　そんな益体もないものに遠慮する義理がどこにあるんだね？　確かにいささかやりすぎたことは認めるが、我々のやったことと、神殿のやっていることのどこが違うというのかね？　使徒を囲いこみ、私物化して食い物にしているのは、神殿も同じではないかね。そもそも、なにを以て使徒とそうでない者に分けるのか、それがわからないのだよ、わたしは。能力の強弱で篩いわけるというのなら、その行為にどんな意味があるというのだ。使徒などと区別する必要はないではないかね」

滔々と語るダンダローヌの口調に淀みはなく、声にも焦りや不安はなかった。

彼自身、本気でそう考えているようにしか見えなかった。

「第一、使徒認定の儀式はわたしも見たことがあるがね、あれが必要な儀式だとは、到底思えないのだよ。聖石の子供の手の甲に、顔料で神紋を描くだけではないかね。あんな儀式ひとつで、なにが変わるというんだ」

「言いたいことはそれだけか」

冷やかに、カーラはダンダローヌの――なおも続きそうな――言葉をさえぎった。

「目に見えることだけが、世界のすべてだと思っているのか、お前は？　だから、そんな思い違いをすることになるんだ」

軽侮もあらわに、彼女は告げた。

「使徒とそうでない者を分けるのはなにかと言ったな？　簡単だ……新たなる使徒を選ぶのは神々だ。能力の強弱は関係ない。神々は使徒と相応しいと認めた者に神紋を下されるんだ、使徒となる者の聖石にな。儀式において顔料で描くのは、同じ神紋を持つ聖石と使徒との絆を確固たるものにするためだ。同時に、その儀式によって聖石も使徒も安定する……決して無意味なことではないんだ。それをお前は……徴を得た者たちを不安定なままに放り出し、しかも利用しようとした。不安定な状態に置かれた彼女らの能力は、本来発揮すべき部分とは逆に働いてしまった……いま、この璃楽に淀み、溜まっている瘴気は、お前たちが呼び集めたものだ。

お前たちの無知と傲慢が、璃楽どころか世界すらも危険にさらすことになったんだ！」

すさまじい迫力で、切り捨てるように叫んだカーラを前に、ダンダローヌが思わず一歩あとずさった。

一国を担いつづけてきた人物である。少なくとも小心者であるはずがなかったが、彼は明らかにカーラに対して怖じ気づいていた。いや、カーラの背後にいる神の存在に、ようやく気づいたのかもしれない。

それでも、彼は素直に自らの非を認めようとはしなかった。ずっと信じてきたものが、誤りであったと認めるには、年をとりすぎていたのかもしれない。

あるいは、そう見せかけねばならぬ必然があったのか……。

「ならば……ならばなぜっ！　神殿はその事実を公にしないのだ!?」

そういうことだと知っていれば、こんなことはしなかったというのに――とでも言いたげなダンダローヌに、答えたのはカーラではなくセイだった。

「使徒だって人間だからさ」

結論のみとも言える簡潔すぎる言葉に、ダンダローヌはなおも問いたげな顔になったが、セイはそれ以上の説明は口にしなかった。

カーラも、彼の疑問にわざわざ答えてやろうとはしなかった。

「自分で考えるんだな。はっきり言って、百度だって殺してやりたいぐらいだが、どうやらお

前には、そこで腰を抜かしている男よりはずっと、責任能力があるらしい……お前が招いた事態がどんなものだったのか、しっかりと目に焼きつけ、自覚するがいいさ」

どうでもいいことのようにそう告げて、カーラがさらに一歩踏み出した。

ダンダローヌが反射的に、また一歩、あとずさる。

だが、そんなことは関係ないとばかりに、彼女は外套を羽織ったまま、そっと目を閉じた。

（……来い！）

呼びかける――瘴気に向かって。

心を虚ろにして、彼女は瘴気の容れ物となる。

彼女の持つ特殊性は、この能力――瘴気を惹きつけ、なおかつ器にして檻となすそれだった。

璃楽中に蔓延していた邪気という邪気、瘴気という瘴気のことごとくが、一瞬にしてカーラの肉体に集束される。

そのさまは、尋常ならざるものだった。

あまりの毒々しさに、呼吸すらままならぬ――一度息を吸いこんだが最後、その毒気ゆえに命を落としてもおかしくはない……そう思わせるほどの、瘴気の化身。

そういう存在に、カーラはなりかわっていた。

それに合わせて、腰から大振りの剣を引き抜いたのは、彼女の相棒であるセイだった。

大柄な彼の体格と比較しても、巨大な剣の柄には、びっしりと小粒の血赤珊瑚が嵌めこまれていた。

「ったく……後味の悪い仕事ばっかり押しつけやがって……！」

愚痴をひとつ洩らして、彼は瘴気の器と化したカーラの体を両断した。

彼女の帷子を構成していた漆黒の小粒の黒珊瑚が飛び散り、宙にかき消える。

瘴気は完全に消失し、斬られたはずのカーラは、無傷のままで立っていた。

少しばかり疲れた様子を見せているのを除けば、最初に見た姿そのものだった。

「と……れが、聖石の使徒……の力……？」

呆然として床に膝をついた恰好のダンダローヌのつぶやきに、ふたりの珊瑚の使徒は、図らずも同じ台詞を口にした。

「「わかったんなら、きりきり働け」」

宰相ダンダローヌの表情を見る限り、二度とこのような騒ぎは起こらないはずだった。

それは温情による判断ではなかった。

偏った意識と認識のために、祖国ばかりか世界さえも危険にさらしたそのことを、しっかり把握した男に対する、これ以上はないという罰だった。

少なくともふたりの珊瑚の使徒はそのつもりであったし、言い渡されたダンダローヌもしっかり自覚していた。

以降、璃楽は変革の時期を迎える。
それはまた、後の話になるわけだが。

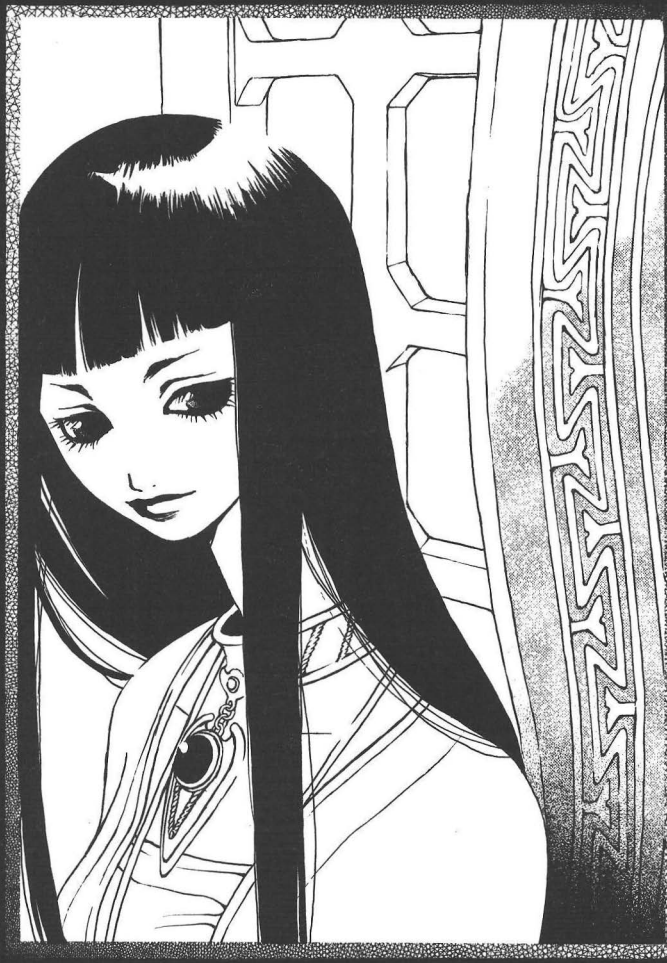
エピローグ

セイタは意識を取り戻したとき、すぐそばにカザルゼイタの顔を認めてほっと息をついた。
安心したのだ。
「よ……かったぁ……」
思わずつぶやいて、けれどすぐに思い出した。
あの金真珠のこと——真珠から流れこんできた凄まじい負の感情のこと。それに押し流されそうになったこと。
「あ……あっ!?」
思わず声をあげてしまったセイタの目の前には、ふたりの『使徒さま』がいた。
あれほどセイタを苦しめた金真珠を掌に乗せて、平気な顔で笑う使徒さまたちが。
「あ……」
なにを言うべきなのか、なんと言えばいいのか——わからぬままに唇を開きかけた彼女に、カーラが声をかけてきた。

「これは暫く、あたしらが預かるよ……荒ぶってしまって、このままじゃ制御も難しいだろうからね」
浄化が終わったら、ちゃんと返すから――。
告げられた内容に、嘘の気配はかけらも感じられなかったから、セイタは「うん」とうなずいた。
このひとたちの言うことなら、嘘ではないと信じられた。
「大丈夫だよ」
保証するように言ってくれたのは、もうひとりの使徒さまだった。
（うん……きっと、大丈夫だね……）
うなずきながら、セイタはそう思った。
その想いが、彼女を支えた。

「意外だった……かな」
ぼそりとセイがつぶやいたのを、カーラは聞き逃したりはしなかった。
「どういう意味で、だい？」

尋ねた彼女に、セイは肩をすくめながら、本音そのものを口にした。
「いや、お前自身、怒り狂ってたし……そうなると、お前が言ってたように、国ひとつぐらい平気でぶっ飛ばす暴走状態になるかなあ……っとか考えちまって」
カーラが、眉宇をひそめて答えた。
「状況次第じゃそうなってたかもしれないけれどね」
つまりはそういう状況ではなかったのだと説明して、彼女は言い切った。
「あの宰相……ああいう男はね。ものごとの仕組みが見えれば、これまでの罪滅ぼしも兼ねて、必死になって働くもんさ。自分に非があったと認めれば尚更にね。あいつらを一刀両断するのは簡単なことだったけれど、だからってあたしらは国の未来にまで保証はしてやれない……だったら、罪を償う気のある、それなりに有能なやつらにそれは任せるさ」
そこまで告げた後、彼女は少しばかり意地の悪い笑みをたたえた。
「それにあの男はね、綺麗な赤瑪瑙を肌身放さず身につけてたんだよ。神殿で売られてるような大仰なもんじゃなくてね。理まではわかってなかったみたいだけどね、あの時、あの男は完全に覚悟を決めていた……自分が裁かれることでセイタを自由にしてやりたいってね。簡単に命を投げ出すやつは嫌いだけどね、あいつの覚悟はなかなかのものだったからね……」
国王とかいう男はどうでもよかったけれど、あの男と、あの男に聖石の子供石を委ねたサラナゲイダに免じて、次の機会を与えてやったのだ——と、カーラは告げた。



「もっとも楽はさせないけどね」
けけけ、とどこか楽しげにカーラが気味悪い声を上げる。
「そういうことなら、あいつはこれから苦労しっぱなしってことになるな」
別段同情する風でもなく、そう告げたセイに、こちらはダンダローヌに対する同情心皆無のカーラは、あっさりと言い切った。
「自業自得ってもんだろ？」
まさにそれはその通りだったのだが……全く別のことに気づいたこともあって、セイは思わず苦笑した。
「だが、お前の人見知りの癖、直らないな」
第三者を相手にしたとき、女性らしさのかけらもない言動を取るカーラのそれが人見知りの延長なのだと知っているごく少数派の男の言葉に、カーラは不機嫌そうに顔を顰めてこう答えた。
「煩いね、放っておきなよ」
と――。

三月の時を経て、セイタ――シャラクセイタは樹翁各国からの監督員の入った雷牙の学院に入学が認められた。

庶出の王女という権利など、彼女が欲しがるはずもなく、きれいさっぱり拒絶した後に入学した彼女は、学院史に残る成績をおさめることになった。

翌年には、他大陸である麗矢に逃れ、学んでいたシオルリイダが紅水晶の使徒と認められた上で帰国した。

カザルゼイタとともに、彼女たち三人は人々から慕われながら、家族をつくった。

想いの絆のみで――。

六年後、シャラクセイタは正式に真珠の使徒と認められることになる……。

あとがき

悪夢以上にスリリングな日々の果て――この本が無事に発売されるのは、わたしを除く関係者の皆々様のおかげです。

逃げ出そうとは思わなかったけれど、逃げたら楽になるかな、とは一度だけ思いました……結局、書きたい話放り出して楽になれるはずないとすぐに悟りましたが。

さてさて、しょっぱなから不穏な話題で申し訳ありません。『聖石の使徒』をお届けいたします。

このシリーズを立ち上げるにあたって、わたしはひとつ心に決めたことがあります。それはずばり、「今度のヒロインは苛めない」でした。いや、以前はともかく、最近はそれほど痛い目にあわせてないつもりなんですが……もごもご。

だから、アラクセイトは複雑な出生はなしと、最初から決めてました。これで暗い幼時体験って線はほぼなくなるわね、ふふ……とか思ってましたのに、物事うまくいきません。彼女にもしっかり、暗い幼時体験がっ！　わたしとしては、不朽の名作『エースをねらえ！』の岡ひ

ろみ路線で行くつもりだったんだけどなあ……出来上がった代物は、どこがというものになってしまったし……ふう。

カーラさんとセイ氏は、夢のなかで出来上がった方々です。今年の正月、夢のなかに、血赤珊瑚の鎧に身を包んだ黒髪の男性が出てきまして（顔は覚えていないけど、恰好良かったという記憶だけが……）夢のなかながら、わたしはミーハーしたのですね。しかし、そこは夢――あっという間に別の夢に変わってしまって、二度と見ることはできませんでした。そのことを悔しく思いながら、それでもわたしは夢のなかでもネタを見逃したりできなかったのですね。そうだ、折角だから聖石の使徒にしちゃえ、と思ったわけです。そういうわけで、ふたりのモデルは正月に夢に出てきた美丈夫だったりします。

もっとも、年末に某百貨店でやってた中国物産展見に行った流れで、ああいう夢をみたんでしょうが。

今回、わたしの不徳のいたすところによって、ヒロインであるアラクセイトには、ロマンス（わたしの作品に、果してあるのだろーか？）の相手との出会いの場を設けてやることができませんでした。次回は頑張って出会わせてあげたいなーと思っております。どんな相手かは次回までのお楽しみということで。ひとつだけ確実なのは、岡ひろみ嬢のお相手のように、優しく包容力豊かな人物ではない、とゆーことでしょうか。

今回、あとがき三ページなので、ちょこっと近況など。

手作り石鹸にはまってます。と言っても初心者なので、台所用米石鹸ぐらいしか、オリジナルレシピでは作ってませんが。

このあとがきが終わったら、色々試してみるつもりです。熟成期間に四〜六週間、使い心地がよくなるまで更に一月から一月半かかるので、次の季節を見越した石鹸作らないといけないってあたりがせっかちなわたしにはちょっとナニですが。まあ、原稿書いてたら、あっという間に熟成期間ぐらいは過ぎますしね。

そろそろ結びとまいります。

川野さま。

次回こそ、このような事態を引き起こさぬよう、早期に原稿に着手いたします。

山本鳥尾さま。

わたしの不手際のせいで、大変なご迷惑をおかけいたしました。次こそはこんなことにならぬよう努力しますので、これからも宜しくお願いします。

最後に、読んでくださる方々へ——。

いろんな意味で、これからも頑張ります。見守りつつ、感想などもいただけると嬉しいです。それでは。

平成十三年　某月　某日

前田　珠子

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其は焔をまとう者

COBALT-SERIES

2001年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2001　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-614886-2 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊警護課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

9784086148863

ISBN4-08-614886-2

C0193 ¥438E

1920193004380

定価本体438円＋税



コバルト文庫